

一橋大学大学院  
言語社会研究科  
平成 26 年度博士論文



身体語彙を含む日本語の慣用句の分析：

ペルシア語との対照を通して

— 「目」「手」「口」「身」を用いた表現を中心に—

指導教員 糟谷啓介 教授

学生証番号 LD091014

ファルザネ・モラディ

**Farzaneh Moradi**

## 目次

|                                                   |    |
|---------------------------------------------------|----|
| 第1章：問題提起及び研究の概要 .....                             | 5  |
| 1.1 問題提起及び本研究の背景と目的 .....                         | 5  |
| 1.2 認知言語学についての予備的考察 .....                         | 8  |
| 1.3 認知言語学からの主なアプローチ .....                         | 8  |
| 1.3.1 プロトタイプ .....                                | 8  |
| 1.3.2 イメージ・スキーマ .....                             | 9  |
| 1.3.3 メタファー、メトニミーとシネクドキー .....                    | 9  |
| 1.3.4 フレーム .....                                  | 11 |
| 1.4 本論文において対象とする慣用句 .....                         | 11 |
| 1.4.1 日本語の場合の調査の対象と使用したコーパス .....                 | 12 |
| 1.4.1.1 書き言葉のデータ .....                            | 12 |
| 1.4.1.2 話し言葉のデータ .....                            | 12 |
| 1.4.1.3 書き言葉と話し言葉における慣用句の分布調査 .....               | 12 |
| 1.4.1.3.1 新聞社説（書きことば）における身体語彙慣用句の使用実態 .....       | 12 |
| 1.4.1.3.2 テレビドラマや映画のシナリオ（話しことば）における慣用句の使用実態 ..... | 13 |
| 1.4.1.4 本研究の対象となる慣用句 .....                        | 14 |
| 1.4.2 ペルシア語の場合 .....                              | 17 |
| 1.4.2.1 書き言葉のデータ .....                            | 18 |
| 1.4.2.2 話し言葉のデータ .....                            | 18 |
| 1.5 本研究の基本的な目的 .....                              | 18 |
| 1.6 本論の構成 .....                                   | 19 |
| 第2章 日本語とペルシア語における意味拡張のプロセス .....                  | 20 |
| 2.1 日本語における意味拡張 .....                             | 20 |
| 2.1.1 メタファーの定義と例 .....                            | 20 |
| 2.1.1.1 メタファーに基づく慣用的意味の成り立ち .....                 | 21 |
| 2.1.2 メトニミーの定義と例 .....                            | 21 |
| 2.1.2.1 メトニミーに基づく慣用的意味の成り立ち .....                 | 22 |
| 2.1.3 シネクドキーの定義と例 .....                           | 24 |
| 2.1.3.1 シネクドキーに基づく慣用的意味の成り立ち .....                | 25 |
| 2.2 ペルシア語における意味拡張のプロセス .....                      | 25 |
| 2.2.1 مجاز/majāz（比喩） .....                        | 25 |
| 2.2.1.1 مجاز مرسل / majāz-e morsal（メトニミー） .....   | 25 |
| 2.2.1.2 تشبيه / tašbīh/シミレ .....                  | 26 |
| 2.2.1.3 استعاره / este ‘āre /メタファー .....          | 27 |

|           |                                                      |    |
|-----------|------------------------------------------------------|----|
| 2.2.1.3.1 | استعاره مصرحه / este‘āre mosarahe/明白なメタファー:          | 27 |
| 2.2.1.3.2 | استعاره مكنيه / este‘āre maknīye/不明瞭なメタファー:          | 27 |
| 2.2.1.3.3 | استعاره تبعيه / este‘āre tabaīye /追隨メタファー            | 28 |
| 2.2.1.4   | اسناد مجازی / esnād-e majāzī /主体と動詞あるいは形容詞と名詞の不自然な関係 | 28 |
| 2.2.1.5   | كنايه / kenāye/メタファー                                 | 29 |
| 2.3       | 日本語の慣用的表現の分類                                         | 29 |
| 2.3.1     | 慣用句について                                              | 31 |
| 2.3.2     | 慣用句の分類                                               | 32 |
| 2.3.2.1   | 品詞別の特徴に基づいての分類                                       | 32 |
| 2.3.2.2   | 語彙的な特徴に基づいての分類                                       | 33 |
| 2.3.2.3   | 形式上に基づいての分類                                          | 33 |
| 2.4       | ペルシア語の慣用的表現                                          | 34 |
| 2.5       | まとめ                                                  | 35 |
| 第3章       | 日本語とペルシア語の「目」を含んだ慣用句の対照                              | 37 |
| 3.1       | 「目」の意味分析                                             | 37 |
| 3.1.1     | 日本語の場合                                               | 37 |
| 3.1.2     | ペルシア語の場合                                             | 39 |
| 3.2       | 「目」を含んだ慣用句の意味分析                                      | 43 |
| 3.2.1     | 視覚器官としての側面                                           | 45 |
| 3.2.2     | 視覚機能の側面                                              | 52 |
| 3.2.3     | その他                                                  | 59 |
| 3.3       | まとめ                                                  | 62 |
| 第4章       | 日本語とペルシア語の「手」を含んだ慣用句の対照                              | 63 |
| 4.1       | 「手」の意味分析                                             | 63 |
| 4.1.1     | 日本語の場合                                               | 63 |
| 4.1.2     | ペルシア語の場合                                             | 67 |
| 4.2       | メタファーによる「手」意味拡張                                      | 71 |
| 4.3       | メトニミーによる「手」の意味拡張                                     | 73 |
| 4.4       | 「手」を含んだ慣用句の意味分析                                      | 75 |
| 4.4.1     | メタファー、メトニミーと「手」の慣用句                                  | 77 |
| 4.5       | まとめ                                                  | 89 |
| 第5章       | 日本語とペルシア語の「口」を含んだ慣用句の対照                              | 91 |
| 5.1       | 「口」の意味分析                                             | 91 |
| 5.1.1     | 日本語の場合                                               | 91 |
| 5.1.2     | ペルシア語の場合                                             | 93 |
| 5.2       | 「口」を含んだ慣用句の意味分析                                      | 95 |

|                                    |     |
|------------------------------------|-----|
| 5.2.1 「摂食行為」に関する慣用表現.....          | 96  |
| 5.2.1.1 「口」が「摂食行為を行う人間」を表す用例.....  | 96  |
| 5.2.1.2 「口」は「味覚」を表す用例.....         | 97  |
| 5.2.2 「言語行為」に関する慣用表現.....          | 99  |
| 5.2.3 その他.....                     | 111 |
| 5.3 まとめ.....                       | 112 |
| 第6章：日本語とペルシア語の「身」を含んだ慣用句の対照 .....  | 115 |
| 6.1 「身」の意味分析 .....                 | 115 |
| 6.1.1 日本語の場合 .....                 | 115 |
| 6.1.2 ペルシア語の場合 .....               | 116 |
| 6.2 「身」を含んだ慣用句の意味分析.....           | 119 |
| 6.2.1 日本語における「身」の用法に基づく慣用句の分類..... | 120 |
| 6.3 まとめ.....                       | 131 |
| 第7章：結論 .....                       | 135 |
| 7.1 本論文のまとめ .....                  | 135 |
| 7.2 今後の課題.....                     | 150 |
| 参考文献 .....                         | 151 |
| 謝辞.....                            | 157 |

## 第1章：問題提起及び研究の概要

### 1.1 問題提起及び本研究の背景と目的

人と人とのコミュニケーションの基本は言葉である。お互いに話したり、手紙を書いたり、自分の考えを相手に伝えたりする際に、言葉を自己表現の道具として使う。このような能力は子供のうちから身に付けられるものである。日常の生活の中で、知識を増やすとともに、自分の中にある考えや思いを効果的に伝えるように、豊富な語彙、表現などを自在にあやつるようになる。その中で、特に意識することもなく、多くの比喩表現を使いこなす。比喩は談話や文章の理解や効果的な会話の産出、高度的な書き言葉の産出と深い関係がある。

日本語にも比喩表現が数多く存在する。その出現の頻度は高く、新聞や雑誌、放送番組やテレビ番組つまり、話し言葉においても書き言葉においても幅広く使われている。日本語の特性と密接な関係を持つ比喩の一種に慣用句がある。慣用句の使用度数について調査を行った程 (1996) によれば、日常の言語生活に 3500 項も使用されているようだ。

言語教育の中でも、将来豊かなコミュニケーション活動を展開し、適切な談話や文章を生成する能力を養うために、通常、学習者の外国語能力が中・上級レベルに達してから慣用句の基礎を習得するべきと考えられる。

日本語を勉強する外国人学習者も日本語のレベルを高め、日本人の表現心理や考え方の微妙なところを理解するために、慣用句を正しく学習し、正しく使用することが必要であると思われる。

慣用句の意味を理解しないとおかしい使い方をしてしまったり、相手に対して間違った応答をしてしまったりすることがある。つまり、慣用句は談話や文章の理解、効果的な会話や高度な書き言葉の産出に深い関係があると言える。しかし、一般に慣用句習得は学習者にとって難しい課題である。(1) 単語連鎖を一つの意味を持つ語句として認識しなければならないこと、(2) 単語連鎖を構成する個々の単語の意味を組み合わせただけでは、語句全体の意味が分からないことなどが難しさの要因であると言われる。なぜなら、慣用句には句の構成要素である各語の意味から、句全体の意味が導けないという特徴があるからである。つまりこのような表現がある特定の事柄の比喩として意味を持ち、使われている。例えば「胸に刻む」や「胸を打つ」という慣用句では、「胸」を直接に指しているわけではなく、「よく覚えておく」や「感嘆する」という概念を持った比喩表現となっている。つまり、身体部位詞から意味が拡張されたのである。このような意味の拡張の仕方は外国人学習者の母語と一様ではないはずであるため、慣用句を使いこなすようになることは簡単なことではなく、記憶負担が大きく、学習は難しいとされる。

ペルシア語<sup>1</sup>母語話者の日本語学習者にとっても慣用句は確実に習得しにくい言語項

---

<sup>1</sup> 梶茂樹・中島由美・林徹 (2009) によれば、インド・ヨーロッパ語族の一支派であるインド・イラン語派、イラン語はに属する言語であり、イラン、アフガニスタン、タジキスタンはその主

目の一つであり、学習者が直面する困難点ともなる。日本語を外国語として学ぶとき何が慣用句であるかわからないという状態が生じるのである。また、日本語とペルシア語の言語的特徴と、上述の意味拡張の差異は、イラン人の日本語学習者にとって、言語学習上の障害になるのではないかと考えられる。それは、両言語の慣用句の形成や意味の過程が両国の社会と文化の伝統から重大な影響を受けているからであると思われる。

慣用表現に関する伝統的見解によれば、これらの表現は非合成的であり、表現全体の比喩的意味はその個々の部分の意味の総和ではない。したがって、その個々の構成要素と慣用的意味との間の関係が説明されない。そのため、慣用句の意味を習得するには、話し手が慣用表現とその非字義的意味の間に恣意的リンクを形成することが必要であるとされる。このことは、言語の母語話者には単純にできることであろうが、その言語の外国人学習者には困難である。

しかし、認知言語学の展開に伴い、従来の見解の問題点が解決され、メタファーとメトニミーによる意味拡張のプロセスによって、これまで説明されなかった部分や曖昧な点の説明が可能になった。認知モデルの理論によれば、慣用的な表現とその比喩的意味の間には恣意的なものではなく動機付けのリンクが存在すると考えられる。また、慣用句も比喩も、その全体の意味を得ることはできない点では同じ条件にあり、両者が関連づけられる。慣用句の多くは比喩などの修飾手法を使ってイメージを作り、そのイメージによって物事や道理を説明する。

上述のことを踏まえつつ、本論では、認知意味論における比喩のメタファーとメトニミーについて整理・考察する。

イラン人日本語学習者の慣用句に関しての記憶負担を減らし、効率的に慣用句を学ぶためには、学習者は、日本語の実際の言語運用の中で頻繁に使用されている慣用句を優先して学習すべきである。使用頻度が高い慣用句から学習を始め、順を追って使用頻度が低い慣用句を学習することは、重要語句か否かの順に従った学習方法よりも合理的である。また、例文を通して日本語の慣用句を学習者の母語のペルシア語の慣用句と対応することが望ましい方法であると思われる。

日本語では慣用句が非常に多く使用されるのみならず、慣用句に使う言葉も圧倒的多い。程 (1996)は約 1942 個の慣用句を調査し、その各々を構成している主な単語意味によって、15 テーマに大別している。程が挙げている慣用句の 15 のテーマを次の表でまとめる。

＜表 1＞ 意味による慣用句を構成している主な単語

|    | テーマ   | 主な単語                       | 慣用句<br>数 | パーセン<br>ト数 |
|----|-------|----------------------------|----------|------------|
| 1  | 天文・気象 | 天・空、太陽、月、星、雲、雨・雷、風、雪など     | 60       | 3          |
| 2  | 地形・風景 | 陸地、道、野原、山、川、海、波、穴          | 35       | 1.8        |
| 3  | 自然のもの | 土・泥、水・湯、氷、火、煙、油            | 48       | 2.5        |
| 4  | 動物    | 動物、魚介類、鳥の体・名前、虫の名前         | 87       | 4.5        |
| 5  | 植物    | 花、根、芽、果実、草、木、田畑、植物の名前      | 48       | 2.5        |
| 6  | 時     | 年月日、時・時間、昨日・今日、今昔          | 23       | 1.2        |
| 7  | 人間関係  | 自分、生死・命、年齢、老若、病気、人名、世など    | 103      | 5.3        |
| 8  | 人間の体  | 頭、髪、顔、頬、眉、目、手、口、腹、足、腰、尻、など | 747      | 38         |
| 9  | 気持ち・心 | 気、心、感情、思慮分別、願望、態度、思案、知恵など  | 158      | 8.1        |
| 10 | 暮らし   | 飯、米、茶、襟、袖、笠、壁・棚、車、船、金銭など   | 324      | 17         |
| 11 | 神仏    | 神仏、鬼・魔                     | 32       | 1.6        |
| 12 | 抽象的な物 | 真偽、是非、善悪、有無、勝負、当・不当、損得など   | 101      | 5.2        |
| 13 | 状態    | 型・形、長短、高低、大小、軽重、上下、裏表など    | 94       | 4.8        |
| 14 | 色     | 色                          | 13       | 0.7        |
| 15 | 数     | 一、二、数、甲乙、単位、度・割・桁          | 69       | 3.6        |

程が挙げている 15 テーマの中で、一番多いのは「人間の体」というテーマ、つまり、身体語彙<sup>2</sup>を含む慣用句であり、全数の三分の一を上回っている。身体語彙を含む慣用句の使用率が高い原因は、人間は外部世界を認識し、経験を重ね、そして、その経験基盤を通じて物事や抽象的なものを理解していく。この経験基盤を築くや物事の理解のプロセスには身体の部位が重要な役割を果たしているからであろう。

本稿ではまず、頻繁に使用される身体語彙慣用句を明らかにし、その慣用句を中心として、認知モデルにおけるメタファーとメトニミーを通し、ペルシア語における身体語彙慣用句に対する対照を行い、両国における身体語彙慣用句というものがどのように捉えられ、その基本義と派生義の表現の間にどのような意味関係が存在しているかを考察する。

次に、身体語彙慣用句について考察を行う前に、認知言語学と認知言語学における慣用表現に関する主なアプローチについて予備考察を行う。

<sup>2</sup> 身体語彙による表現は「身体語彙表現とは、人間の身体に関する語彙のうち、直接身体・その部位を指示する名称（身体用語）の名称を一部または全部借用しながら、身体の状態・活動を直接指示するというよりは、むしろ別の状態や活動を暗示し描写する表現のことである」（星野、1976、p.155）と定義されている。

## 1.2 認知言語学についての予備的考察

認知科学 (Cognitive Science) とは 1970 年代にほぼ確立した学際領域で、人間と心の働きについての関係を統合するという新しい分野であり、人、動物、人工知能などの「知」、すなわち認知活動を研究する科学である。認知科学は多方面の分野に大きな影響を与え、哲学、心理学、人類学、言語学、計算機科学、教育学、脳神経科学、コンピュータ科学、動物行動学などが関係する学際分野である。言語についてのこの方面からのアプローチは「認知言語学」(Cognitive Linguistics)あるいは「認知意味論」(Cognitive Semantics)と呼ばれ、チャールズ・フィルモア(Charles Fillmore)、ジョージ・レイコフ(George Lakoff)、レナード・タルミー(Leonard Talmy)、ロナルド・ラネカー(Ronald Langacker)、ジル・フォコニエ(Gilles Fauconnier)などの研究者の間で取り組まれている。

「認知意味論」あるいは「認知言語学」という枠組みで言語を分析しようとする場合の「認知 (Cognitive)とは、人間が日常生活の中で常に行っている意味にかかわる営みつまり、主体としての人間が外部世界を把握するやり方とその働きを意味する。例えば「目覚まし時計になる」と感じるのは「知覚」作用であるが、それをさらに「起きなければならない」ということを理解するのは「認知」であると言える。そして、この「認知」の営みは多くの場合は、言語を媒介として行われる。「認知言語学」の基本的姿勢は言語とは人間が環境をどのように把握しているかという「認知」の仕方を映し出していることを考えることであり、松本(2003)によると「ごく大ざっぱないい方をすれば、意味の問題を知覚や認識の関連で捉える意味理論である」。したがって、このような考え方によれば、認知言語学とは、語の意味は、外界の指示物によって決定されるというよりも、認識された外界をカテゴリー化したものであるということになる。

## 1.3 認知言語学からの主なアプローチ

### 1.3.1 プロトタイプ

大堀壽夫 (2002) は「人の認知活動を支える柱の一つとして、受け取った情報をもとに有意味なまとまりを作り出す能力がある。このまとまりをカテゴリー—(Category)という。(中略)カテゴリーを作り上げ、ある対象がそこに属するかどうかについて判断を行うことをカテゴリー化 (Categorization)という」(p.29) と述べている。つまり、人間は受け取った情報と知識を統一し、何等かのグループにまとめている。そのグループがカテゴリーと言われる。しかし、カテゴリーのメンバーが同じ資格を持っているわけではない。カテゴリーには中心的なメンバーから周辺的なメンバーがある。その代表的、中心的なメンバーはプロトタイプ (Prototype) と呼ばれる。

我々の日常的な理解において、例えば、「家具」といえば、人によって異なるだろうが、タンスやテーブルは誰も思い浮かぶであろう。もちろん、花瓶やカーテンも「家具」であるが、タンス、テーブル、ソファ、椅子、ベッドなどのように素早く出てくるはずがなく、日常の直観においては、タンスと花瓶を「家具」として同

例に扱ってはいないであろう。

カテゴリーということは段階性があり、典型性の度合いが異なった様々なメンバーからなっている。そこで、「家具」というカテゴリーの場合は、一番最初に思いつく「タンスやテーブル」が中心的なメンバーとして、プロトタイプと呼ばれる。

### 1.3.2 イメージ・スキーマ

「イメージ・スキーマ (Image Schema)」とはいろいろな概念、さらに言語の基盤として重要な役割を果たすものであり、人間が、身体を通して世界と相互作用をする中で、一般化、抽象化した形で抽出することができる(認知)図式のことである。(艮山 2010 : 77) すなわち、言語の意味体系の多くの部分が身体経験に基づくイメージ・スキーマのプロセスを通して、抽象化、概念化される。山梨 (2004) は、容器 (Container) のスキーマ、部分—全体 (Part-Whole) のスキーマ、リンク (Link) のスキーマ、中心—周辺、(Center-Periphery) のスキーマ、前—後ろ (Front-Back) のスキーマ、上—下 (Up-Down) のスキーマ、起点—経路—到着点 (Source-Path-Goal) のスキーマをイメージ・スキーマの典型例として、挙げている。

「容器 (Container) のスキーマ」を考えると、例として、「人間は部屋の中に入る」、「部屋の中にいる」、「部屋から外に出る」という経験を介して、「部屋」を「容器」、「自身」を「容器の中身」として理解する。このような例では、人間が自分の体を容器としてイメージし、容器の内側・外側・境界を設定することで、物事を理解するようになる。また、「前・後」の場合は、人間は目や鼻など感覚器官のあるほうを「前」そして、その反対を「後ろ」と捉えるイメージを持っている。

イメージ・スキーマは様々な言語表現、とりわけ、メタファーの動機づけとして有効である。例えば、「上・下」のイメージ・スキーマでは「上」は「良い/プラス」、「下」は「悪い/マイナス」という概念にほぼ対応し、高揚を表す「意気が上がる」「氣勢を上げる」「気分が浮き浮きする」「舞い上がる」「意欲を起こす」「気分は上々だ」「天にも昇る気分」という表現、そして、落胆を表す「落ち込む」「絶望のどん底」「悲しみに沈む」という表現はその例として挙げられる。

### 1.3.3 メタファー、メトニミーとシネクドキー

認知言語学においては重要な研究のテーマの一つは「比喩」であり、基礎的な研究課題として注目されている。古典的な比喩論では、言葉を飾りたてる修辭的な手段と考えられる傾向があり、文学的韻文や散文を修飾するための修辭学 (rhetoric/レトリック) として研究されてきた。このタイプの「比喩」は「言葉のあや (figure of language)」であり、文学的ないさどりと別の表現の「言い換え」あるいは通常の表現を修飾するに使われる手法であった。しかし、認知言語学が「比喩」に注目したのは、「比喩」は必ずしも修辭的な目的のために用いられるものではなく、山梨 (1988 : 1) が述べている

ように「この言葉のあやは、日常生活の伝達をより効果的にし、新しい創造的な世界を造りあげていくための、認識と発見の手段としての役割も担っている。」こうした観点から比喩を見れば、比喩は単に修飾的な手段だけでなく、創造的な伝達の一つでもある。

日常言語では「比喩」が気づかずに多用される。しかし、厳密に「比喩」はどのようなものであるか、日常言語にどのように現れるかということを Lakoff&Jahnson(1980)が挙げている例に具体的にみることができる。

.You' re wasting my time.

君はぼくの時間を浪費している。

.This gadget will save you hours.

この機械装置を使えば何時間も節約できる。

.I don' t have the time to give you.

君にやれる時間の持ち合わせはないよ。

.How do you spend your time these days?

この頃どんなふうに時間を使っているの。

上例でみた「時間」は本来の意味とは異なる意味、つまり「金銭」の意味に用いられている。「時間」という語が基本的な意味から類似したものに意味が拡張し、個別的な意味を表すようになっていく。「時間」のような形態素・語（あるいはより大きい「句」などのレベル）を従来の意味とは異なる意味に用いることを「比喩」という。このような表現では、物事が直接に表現されず、指示される物が他の実物に喩えられ、間接的に表現される。糸山（2002）は「比喩」という現象が発生する原因を次のように述べている。ある言語を用いる社会に新しい事物が出現する場合、誰かが今までにない考え方やアイデアを創造したり、新たなものの見方や認識をしたといった場合にそのような事物や考え方・認識を効率的に他人に伝達するには名前が必要になる。しかし、その命名方法が続けられれば、言葉が際限なく増加し、言語使用者の記憶に大きな負担になり、不都合が生じる可能性がある。そこで、既存の言葉を未来の意味と新たな意味で用いるということが行われるようになるわけである。すなわち、「比喩」は言語使用者の記憶の負担を軽減する機能を持ち、意思の効果的な伝達やより良いコミュニケーションをとることに影響を与える現象であると言える。

意味拡張のプロセス、つまりある語が従来の意味から新しい意味に転用されるとき、その従来の意味と新しい意味との関係には、主に、メタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）という二種の主要な比喩がある。しかし、比喩の分類に関する立場はまちまちである。佐藤（1992）、瀬戸（1997）、糸山（2002）、多門（2006）によれば、比喩にはメタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）、シネクドキー（提喩）という三種がある。一方 Lakoff&Johanson(1980)や山梨（1988）はシネクドキー（提喩）をメトニミー（換喩）の一種と捉え、メタファー（隠喩）とメトニミー（換喩）を二本柱する立場に立っている。

また、従来の理論の中で、「～のような」「～みたいな」の明示的な表現を用いて、あるものを別ものに喩える表現が「比喩」として受け止め、「直喩」と呼ばれる場合もある。

しかし、時代が進むと、「直喩」は「比喩」として扱われなくなってきた。辻 (2003) によれば、比喩の条件は転義を伴うことである。すなわち、「比喩」というためには、言葉が本来持っていた意味を変えなければならない。言葉が元来の意味ではなく、比喩としての意味として働かなければならない。しかし、「直喩」は単なる「たとえるもの」と「たとえられるもの」を比べているにすぎないということになる。そこで、「直喩」は「転義」という条件を持たないので、認知言語学ではあまり扱われなくなっている。

前述したように、基本的に比喩はメタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）、シネクドキー（提喩）の三種類が挙げられる。この三種の要点は次のように整理される。

|        |          |             |
|--------|----------|-------------|
| メタファー  | （隠喩）：類似性 | （似ている関係）    |
| メトニミー  | （換喩）：隣接性 | （つながっている関係） |
| シネクドキー | （提喩）：包含性 | （含む含まれる関係）  |

すなわち、これらの、三種の比喩では、「たとえるもの」と「たとえられるもの」が類似性、隣接性と包含性に基づいて結び付けられる。それぞれの主要な比喩について具体例を挙げながら後述する。

#### 1.3.4 フレーム

フレーム (Frame) はチャールズ・フィルモア (Charles J. Fillmore) によって提唱され、言語学的な意味論と結びつけた理論である。

フレーム意味論の基本的な考え方は、ある語の理解にはその語と関連する一連の知識を持つことが不可欠であるということである。フレームの知識が言語の効率的な使用を可能にすることを示す例として、「レストラン」という語のフレームを見てみよう。

レストランに入る→料理を注文する→料理を食べたり飲み物を飲んだりする→お金を払う→レストランを出る

このフレームは「レストラン」に関する我々の経験に基づいて形成されたものであり、いくつかの異なる行為から構成され、各行為が順序で実施されることを提示する。このようなフレームの知識は言語話者の中に共有されているので、「レストランに行った」と言えば、上記の「レストラン」のフレームの全過程が伝えられる。

#### 1.4 本論文において対象とする慣用句

本稿において、対象とする日本語の慣用句とそれと対照となるペルシア語の慣用表現は、一定のコーパスから設定し、範囲を設定する。主なコーパスとして、日本語の辞書

類<sup>3</sup>以外に、後述の資料を利用した。そして、ペルシア語に関しては文学作品、辞典類を使用した。

#### 1.4.1 日本語の場合の調査の対象と使用したコーパス

日本語の身体語彙慣用句の使用頻度を明らかにするように、書き言葉のデータとして新聞社説、話しことばのデータとしてテレビドラマや映画のシナリオを採り上げ、慣用句の頻度分布を調査した。

##### 1.4.1.1 書き言葉のデータ

具体的には、書き言葉のデータとして、朝日新聞の3年分（2009、2010、2011）の天声人語を用い、書き言葉における慣用句の頻度分布を調査を行った。

##### 1.4.1.2 話し言葉のデータ<sup>4</sup>

日本語母語話者の自然会話に最も近いテレビドラマと映画のシナリオを話し言葉のデータ資料として使用した。そのリストは以下の通りである。

- (1) 向田邦子シナリオ集Ⅰ、「あ・うん」 岩波書店、2009年4月16日
- (2) 向田邦子シナリオ集Ⅱ、「阿修羅のごとく」 岩波書店、2009年5月15日
- (3) 向田邦子シナリオ集Ⅲ、「幸福」 岩波書店、2009年6月16日
- (4) 向田邦子シナリオ集Ⅳ、「冬の運動会」 岩波書店、2009年7月16日
- (5) 向田邦子シナリオ集Ⅴ、「寺内貫太郎一家」 岩波書店、2009年8月18日
- (6) 向田邦子シナリオ集Ⅵ、「一話完結傑作選」 岩波書店、2009年12月25日
- (7) ドラマ 相棒（season 10）シナリオ特集、「贖罪」「晩夏」「ラスト・ソング」  
映人者、2012年2月1日
- (8) シナリオ 「キツツキと雨」「アフロ田中」ナリオ作家協会、2012年3月1日
- (9) 山田洋次シナリオ集（同時代ライブラリー76）、「息子・家族」岩波書店、1991年8月12日
- (10) 麒麟の翼 講談社、2011年12月16日

以上のデータから慣用句を抽出し、その中に頻繁に使用される身体語彙慣用句を明らかにした。

#### 1.4.1.3 書き言葉と話し言葉における慣用句の分布調査

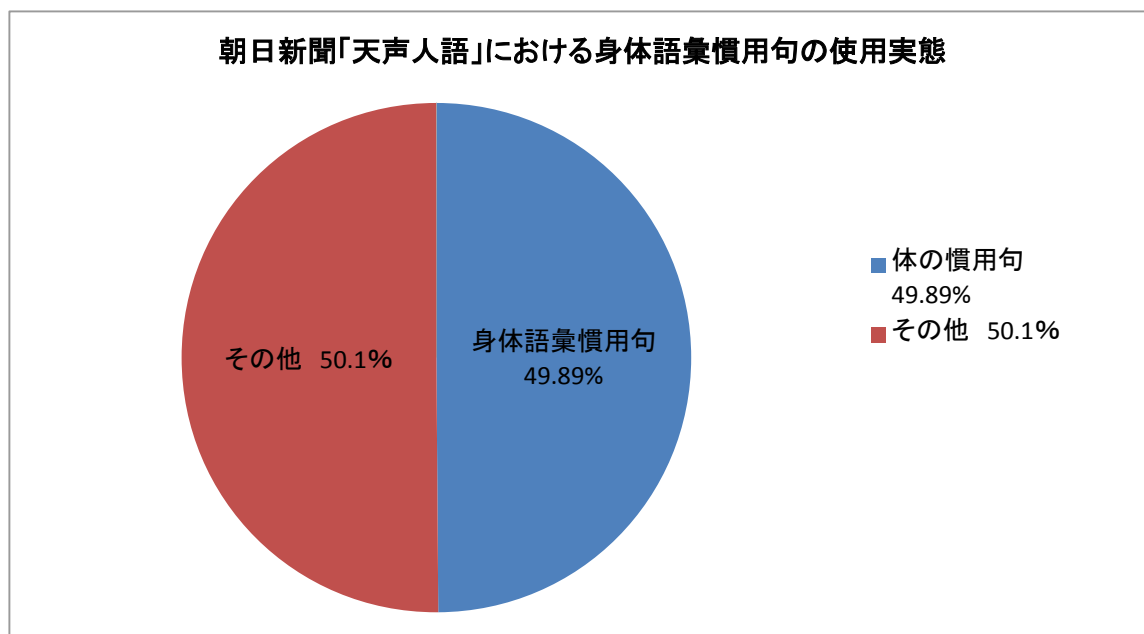
##### 1.4.1.3.1 新聞社説（書きことば）における身体語彙慣用句の使用実態

<sup>3</sup> 辞書類はデータの一定の体系性と詳細さの面で利用価値が大きいから、本論の一つの主なコーパスとして妥当と判断した。

<sup>4</sup> 話し言葉の場合、実際の生きたデータを集めた方が利点があるが、資料作りの作業、言語処理に、非常に長い時間を要するので、日常会話に近いテレビドラマのシナリオという資料を次善の策として利用することを適当であると考えられる。

ここでは、まず、新聞社説の中で使われた日本語慣用句の使用実態を考える。「朝日新聞天声人語」では、986 の使用されていた慣用句の中では、492 の身体に関する慣用句が使用され、書き言葉における慣用句全体の 49.89%を占めていた。この調査の分析結果をまとめて見ると次の表のようになる。

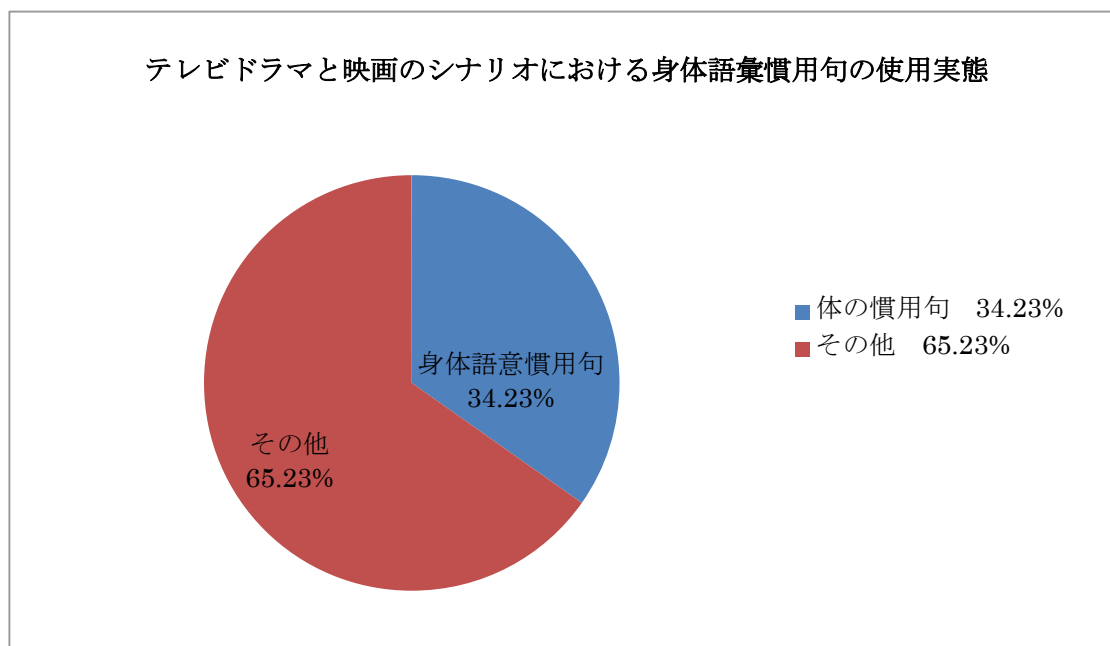
＜図 1＞朝日新聞「天声人語」における慣用句の使用実態



#### 1.4.1.3.2 テレビドラマや映画のシナリオ（話しことば）における慣用句の使用実態

続いて、日本語テレビドラマや映画のシナリオの中で使われた慣用句の使用実態について見てみよう。話し言葉のデータ資料の中で 1142 の使用されていた慣用句の中では、397 の慣用句は身体に関する慣用句として認められ、全体の訳 34.76%を占めた。この結果をまとめて見ると図 2 のようになる。

＜図 2＞テレビドラマと映画のシナリオにおける慣用句の使用実態



日本語の慣用句の使用実態を示している図 1 と図 2 のグラフを見ると対象のデータ資料の中で使用された慣用句、特に話し言葉の中で、数量的に特に高い比重を身体語彙慣用句になるものであり、2128 慣用句の中で 889 であり、全体の約 41.77%の割合を占めている。

日本語に限らず、身体語彙を用いて日常生活における経験を情感豊かに表現することが他の言語にも見られる。その原因を鈴木（1985）は、「それが人間としての普遍的な現象である限り、言語・文化の差異にかかわらず、経験をそのものに即してできるだけぴったりとした語彙で表現しようという要求、活動、結果が普遍的にあるに違いない」（p・157）と述べている。身体語彙による表現は英語、フランス語、ドイツ語などでも用いられるが、鈴木（1985）によれば、日本語では諸外国に比べて、圧倒的に多く、使用が頻繁に見られる。

#### 1.4.1.4 本研究の対象となる慣用句

身体語彙による表現の分け方は様々である。星野（1976）は次のような分類を挙げている。

**第 1：**一つ一つの述語・慣用句が含む身体部位の名称による分類。

この分類では、星野によれば、人類学者の香原志勢の人の身体を構成する各要素に基づくの分け方に従って、身体語彙表現を分類できる。香原の分類は次のとおりである。<sup>5</sup>

<sup>5</sup> 星野によれば、香原の分類ではどういうわけか、「目（目）」「鼻」「眉」「眉毛」「体毛」「髪」「肌」

- ・咀嚼器、言語発生器：口、唇、歯、舌、喉、顎、耳
- ・脳：顔、額、<sup>かしら</sup>首、顔、面、頬
- ・内臓収納器及び体幹直立器：背（背骨・背筋）、肩、胸、腰、胴（体）、尻、筋肉
- ・内臓：心臓、肺臓、胃、腸、腹（肚）、肝（胆）、腎
- ・上肢、手運動器：腕、肘、手、掌、拳、指、爪
- ・下肢、前進運動器：股、腿、膝、脛、脚、足、踵、趾（足指）
- ・頸：首、頸

## 第2：語種による分類。

- ・大和ことば：め、け、まゆ、くちなどの身体部位の名称を含む表現。
- ・漢語：頭角、面目、弁舌、骨肉などの名詞のほか、それらを基幹とする形容など
- ・和製漢語：目算、利口、才覚など
- ・外来語：バックボーン、スタミナ、ニューフェイスなど

## 第3：形態による分類。

- ・一形態語：身体部位の名称を含む語彙のうち、それ自体として一つのまとまった形態を持っているもの。例としては、頭、腹、口、など。
- ・二形態語：怒髪、身の毛、手口、肩身など。
- ・三形態語：わがもの顔、鉄面皮、具眼の士など。
- ・四形態語：一挙手一投足、異口同音、見すぎ口すぎなど。

## 第4：音節による分類。

- ・一音節：目、手、歯、身など。
- ・二音節：髪、顔、鼻、舌など。
- ・三音節：頭、額、面、拳など。
- ・四音節：眉つば、手に汗、目がない、かみつくなど。
- ・五音節：肩代わり、歩みより、胸さわぎなど。

## 第5：意味による身体語彙による表現の分類基準

- ・身体部位の名称から派生した表現で、使用にさいしてもとの部位の意味はほとんど意識されず、他のことばと合成され新しい意味をもっていて暗示や比喻をともしない場合。例えば、頭目、目算、人口、路肩
- ・身体の全体、または部位の名称から派生した表現で、使用に際して、もとの意味は半ば意識されるが、それから離れて、他の語と組み合わせられた述語・慣用句の文脈において生かされている場合、それは、暗示的・描写的表現となる。例としては、体を振る、首になる、抜け目がない、血となり肉となりなどである。

以上、星野が挙げている分類と例の中には、慣用表現と結びつくものは多いはずであるが、本稿で言う身体語彙の対象から除外すべきものもある。そこで、本稿では日本語

---

「臍や生殖」「排泄」に関するの部位が抜け、それに加える必要がある。

の身体語彙慣用句を身体を構成する部位の名称に従って、次のように分類し、頻繁に使用されるものを研究の対象にする。

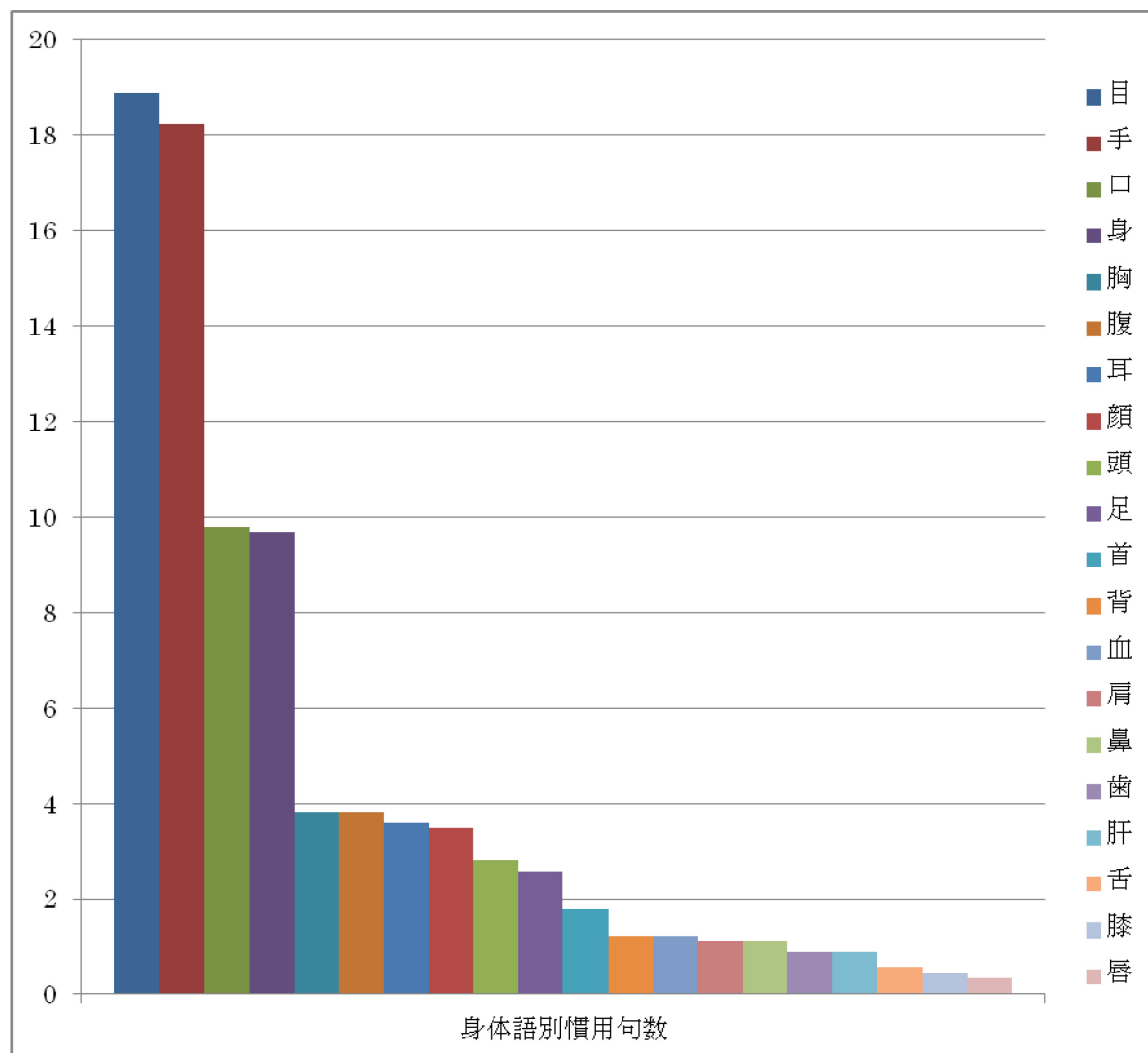
1. 頭部：頭、髪、顎、眉、目、頬、耳、口、鼻、舌、歯、額、首、喉、髭
2. 胴体部：胸、心臓、肝、肺臓、胃、腸、腹、腰、背、胆、臍
3. 四肢部：肩、胸、肘、手、指、掌、尻、足、股、膝、脛、踵
4. 全身部：身、血、骨、皮、神経、肉

上述の 1~4 は日本語の身体語彙であるが、1.4.1.1 と 1.4.1.2 で述べた資料の中では順番に、目、手、口、身、胸、腹、耳、顔、頭、足、首、背、血、肩、鼻、歯、肝、舌、膝、唇が頻繁に使用されている。収録した身体慣用句を、語別に計量すると次の度数分布表とグラフの通りである。

＜表 2＞身体語別慣用句数

|    | 身体語     | 慣用句数 | %      |
|----|---------|------|--------|
| 1  | 目（め）    | 168  | 18.89% |
| 2  | 手（て）    | 162  | 18.22% |
| 3  | 口（くち）   | 87   | 9.78%  |
| 4  | 身（み）    | 86   | 9.67%  |
| 5  | 胸（むね）   | 70   | 7.87%  |
| 6  | 腹（はら）   | 34   | 3.82%  |
| 7  | 耳（みみ）   | 32   | 3.59%  |
| 8  | 顔（かお）   | 31   | 3.48%  |
| 9  | 頭（あたま）  | 25   | 2.81%  |
| 10 | 足（あし）   | 23   | 2.58%  |
| 11 | 首（くび）   | 16   | 1.79%  |
| 12 | 背（せ）    | 11   | 1.23%  |
| 13 | 血（ち）    | 11   | 1.23%  |
| 14 | 肩（かた）   | 10   | 1.12%  |
| 15 | 鼻（はな）   | 10   | 1.12%  |
| 16 | 歯（は）    | 8    | 0.89%  |
| 17 | 肝（きも）   | 8    | 0.89%  |
| 18 | 舌（した）   | 5    | 0.56%  |
| 19 | 膝（ひざ）   | 4    | 0.44%  |
| 20 | 唇（くちびる） | 3    | 0.33%  |

<図3>身体語彙別慣用句数



以上の表と図は用いたデータの中で、数量的に特に高い比重を占めている身体語彙慣用句を示している。

日本語の様々な文献、新聞、テレビ番組などを概観すると、数えられないほど豊富な慣用句の中で身体語彙を含む慣用句が極めて多いことが目立つ。本稿は以上の表と図の中の身体語彙から実際の言語運用の中で最も使用率が高い「目」「手」「口」「身」を対象とし、使用率が高い順に考察を行う。

#### 1.4.2 ペルシア語の場合

前述したように、本稿の基本的な目的は日本語における使用率が高い慣用句をメタファーとメトニミーといった認知過程に基づいて考察することであるが、その一部として、取り上げた日本語の慣用句をペルシア語と対照することである。そこで、ペルシア語の

例文を集めることも必要であるので、参考として次のようなデータを利用した。

#### 1.4.2.1 書き言葉のデータ

書き言葉のデータとして、『Farhang-e Moīn』『Loqat nāme-ye Dehxodā』『Farhang-e Amīd』そしてペルシア語の日常会話の慣用句を連語などを幅広くを集めた、『Farhang-e Fārsye Āmīāne (ペルシア語俗語大辞典)』という辞典、そして、「Hamšahri On Line」というオンライン新聞を利用した。

#### 1.4.2.2 話し言葉のデータ

話し言葉の場合、日本語の場合と一致するようにテレビドラマや映画のシナリオを利用するのが妥当であるが、ペルシア語でのテレビドラマや映像に関するシナリオが入手困難であるので、口語資料として、1994 年からイラン国営テレビの 1 局の社会部が、毎週土曜日から木曜日、放送する「Sīmāye Xānevade」<sup>6</sup>という番組の 2013 年 3 月から 8 月の 6 か月を対象にし、その期間で使用された「目」「口」「手」「身」という慣用句を抽出し、本稿の例文として使用する。

本稿の対象になる「目」「手」「口」「身」という身体部位に関する日本語の慣用句の意味分析を行う前に、両言語における「比喻」に基づく意味拡張を考察する必要があると思われる。そこで、次に、日本語とペルシア語における意味拡張のプロセスを認知意味論の観点から分析を行う。

### 1.5 本研究の基本的な目的

本稿の目的は大きく 4 つに分け、以下の通りである。

- (1) 日本語とペルシア語における意味拡張のプロセスを考察し、それぞれの相違点と類似点を明らかにすること。
- (2) 頻繁に使用されている身体語彙慣用句に焦点を当て、身体語彙慣用句が慣用句表現の中でどのように捉えられかを追求すること。
- (3) 認知モデルにおけるメタファー、メトニミーの理論に基づいて、日本語の慣用句をペルシア語における「目」「手」「口」「身」の身体語彙慣用句の意味と対照し、両国における身体語彙慣用句がどのように捉えられ、どのような概念、感情などと結びついていくのかを考察すること。
- (4) 両言語の「目」「手」「口」「身」を含む慣用句を対照した後に、日本語のイラン人学習者にとってどのような意味領域の慣用句が覚えにくいかを明らかにすること。

---

<sup>6</sup> 「Sīmāye Xānevade」という番組が内容的に日本テレビの「ヒルナンデス」と類似し、ニュース・エンタメ・グルメ・連続ドラマ（15 分ぐらい）などを含む番組である。

## 1.6 本論の構成

本論文は7章から構成される。

第1章は序論とし、本稿の研究動機と研究目的、研究範囲とその方法、調査の結果、研究対象、などの考え方を説明した。また、本稿の研究手段として、認知言語学の基本知識である、プロトタイプ、イメージスキーマ、メタファー、メトニミー、シネクドキー、フレームもここで、紹介した。

続いて、第2章では日本語とペルシア語における意味拡張のプロセスと慣用句の分類などを考察する。

第3章、第4章、第5章、第6章は、日本語、ペルシア語両言語の身体部「目」「手」「口」「身」の意味拡張を探求する。それぞれの章では、まず両言語における「身体部位」として「目」「手」「口」「身」の基本義を定め、拡張された語を分類する。そして、まず、それぞれの身体部位に関連のある慣用句の例を挙げ、ペルシア語の慣用句と対照しながら、認知言語学の観点から意味分析を行う。

最後の第7章では、前章で述べた日本語とペルシア語の「目」「手」「口」「身」の慣用句の考察結果をまとめ、その身体語彙の慣用句の意味拡張の全貌と両言語の相違点を示す。

## 第2章 日本語とペルシア語における意味拡張のプロセス

### 2.1 日本語における意味拡張

日常言語に使用される語の意味が時の流れとともに変化、拡張していくものである。意味変化の要因は様々であるが、重要な要因として、山梨（1988）によれば、次のようなものを挙げている。

- ・空間的な延長ないしは拡張による意味作用
- ・類似性の認知による意味作用
- ・具象から抽象への一般化による意味作用
- ・抽象から具象への特殊化による意味作用

山梨が挙げている意味変化、拡張の仕組みとして、メタファー、メトニミー、シネクドキーという三種の比喩が取り上げられる。既に取り上げたメタファー（類似性に基づく意味の拡張）、メトニミー（物事の隣接性や関連性に基づく意味の転用）とシネクドキー（より一般的な意味より特殊な意味の間の意味の移行）という比喩が慣用句としての意味の成立に重要な役割を果たしている。本設では、順にメタファー、メトニミー、シネクドキーに基づき、どのように慣用的意味が成り立っているかを検討する。

#### 2.1.1 メタファーの定義と例

メタファー（隠喩; Metaphor）という言葉はギリシャ語の「meta-（～を超えて）」「phorein（運ぶ）」に由来している。メタファーは「類似性」つまり「たとえるもの」と「たとえられるもの」が似ている関係によって結ばれる比喩である。靱山（2002）はメタファーを次のように定義する。「メタファー；二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩」。靱山の定義では、「類似性」というのは二つの対象の間に性質に共通性を見出し、表すことであると考えられる。また、メタファーは認知言語学の一部では人間の根本的な認知方式の一つと見なされ、「ある概念領域を別の概念領域を用いて理解する事」と定義される。概念体系の中に形成された概念と概念の対応関係を Lakoff & Jahnson（1980）は「概念メタファー」と呼んでいる。「概念メタファー」は初めて、Metaphor We Live By（レトリックと人生）で Lakoff & Jahnson によって提唱された。上の定義に基づいて、次のような表現が隠喩として分類されることが理解できる。

- (1) こんな素晴らしい計画でも不可だなんて、うちの社長は鬼だね。
- (2) 彼が亡くなった日は空も悲しそうだった。
- (3) 仲間たちとカラオケに行くとき、「甘い声」とよく言われる。
- (4) 祖父母の人生の物語を聞いて、感動した。

(1) の例文では、鬼が恐ろしい形をして人にたたきをする怪物であれば、文字通りの

意味であるが、もちろん「社長が鬼という恐ろしい怪物に変化した」ことを表わしているわけではない。「社長」の指示対象が人間であるとき、「鬼」の意図された意味は「社長は鬼のように怖くて情け容赦ない社長であること」という点で、類似性に基づいて、転義が起こり、比喻になっている。

(2) の例では、もちろん「空」が「悲しい」はずはなく、空の様子が人間の「悲しい時」の姿に似て、人の領域を他の領域に転移している。一般に擬人法 (Personification) と呼ばれるものである。実際に擬人法は隠喩の一種である。Lakoff & Jahnson (1980) によると「このようなメタファーによって、われわれは人間以外の存在物に関する広範な経験を、人間の動機や性格という観点から理解することができるのである」。すなわち、このようなメタファーによって物理的物体が人間として特徴付けられる。

(3) の例は、意味が異なる感覚領域、つまり、味覚から聴覚に転移したメタファー、いわゆる共感覚的メタファーである。

(4) においての抽象概念の「人生」についてなにかを語るのに「物語」のメタファーに頼っている。祖父母の「人生」は「物語」のような構造を持っていると考えられ、概念領域「物語」を「人生」に構造転移し、両者に構造的類似性が成立されている。

メタファーを成り立たせる認知基盤について、靱山 (2002) は、次のように整理している。「メタファーの認知基盤は、「比較する」という認知能力 (の行使) であると考えられる。ここで、比較とは (省略) 複数 (典型的には二つ) の対象をある観点から観察・分析することによって、共通点と相違点を明らかにするということです。この「比較する」ということのなかでも特にメタファーと関わりが深いのは共通点を見出すということです。」つまり、上述のようなメタファーの例の重要な基盤を「比較」という認知能力が成している。

#### 2.1.1.1 メタファーに基づく慣用的意味の成り立ち

メタファーに基づく慣用的意味の成立を次の具体的な例で見ていく。「手を切る」という表現には「料理中に包丁で手を切ってしまう」という字義どおりの意味と、「今までの関係を経つ・特に男女の縁を切る」という慣用的意味 (「日本はその国ともう手を切ったほうがいい」など) がある。そして、この二つの意味の間には「今まで、つながっていたものが切れてしまう」という共通点があり、メタファーによって慣用的意味が成り立っている。

#### 2.1.2 メトニミーの定義と例

メトニミー (換喩; Metonymy) は「隣接性」つまり、「たとえるもの」と「たとえられるもの」とが「つながっている関係」に基づいて転義を起こす比喻である。靱山・深田 (2003) は、メトニミーは二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・

概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喻であると述べている。さらに、メトニミーは空間的隣接と時間的隣接関係があると述べている。靱山ら以外に、谷口（2003）、瀬戸（2007）もメトニミーにおける隣接性について空間的隣接関係と時間隣接に分け、考察を行っている。辻（2003）は、靱山・深田（2003）、谷口（2003）と瀬戸（2007）が述べている空間的隣接性と時間的隣接関係を次のような例で検討している。

- (1) あのトラックは何を考えているのだろうか。
- (2) 恩師に顔（姿）を見せに行く。

この二つの例では、「トラック」が「運転手」、「顔」が「人間全体」に転義を起こしているということになり、決して、類似関係ではなく、隣接関係（つながっている関係）にあることがメトニミーによってなされたものである。(1)の例では、言うまでもなく、「あのトラック」は「運転手」であり、実際には考えているのは「(車両)としてのトラック」であるわけではない。「トラック」は「運転手」は空間的な隣接関係に基づいているのである。また、(2)において、「顔」は胴体と切り離されたという部分は意図された意味で使われるわけではなく、「顔」という部分が意図された意味として、「人間全体」を表現し、空間的隣接関係にあたる。

以上の例では、いずれも空間内における物と物の隣接関係に基づく、言葉の意味が本来のものから拡張されている。しかし、メトニミーは空間的な隣接関係以外にも、時間的な隣接関係、つまり、二つの出来事が時間的に連続して生じることに基づくメトニミーもある。靱山（2009）は、「(お)手洗い」を時間的な隣接関係に基づく例として挙げている。「(お)手洗い」という表現が「使用(するところ)」を表している。「使用」と「手を洗うこと」が時間的に連続し、行われることに基づき、時間的隣接関係に基づくメトニミーになる。

メトニミーの認知基盤について靱山（2009）は次のように述べている。メトニミーは、参照点能力という認知能力に基づく考えられる。参照点能力とは、私たちが、ある対象（＝目標）を把握あるいは指示する際に、その対象を直接捉えるのが難しい場合、別のより把握しやすいもの（＝参照点）を経由して、目標の対象を捉える認知能力のことである。このことは靱山（2002）が挙げている次の具体的な例に基づいて確認できる。「一升瓶を飲み干す」という表現では、「一升瓶」を参照点として、「酒」を指示している。「酒」は「一升瓶」と空間的に隣接する問題の対象である。

#### 2.1.2.1 メトニミーに基づく慣用的意味の成り立ち

靱山（2002）はメトニミーに基づく慣用的意味の成立を以下のように分類している。

- (1) 二つの事柄が時間的に隣接している場合<sup>7</sup>
  - ・二つの事柄が同時に生じる場合
  - ・二つの事柄が連続して生じる場合
- (2) 二つの事柄が「手段－目的」あるいは「原因－結果」の関係にある場合
- (3) 二つの事柄が「部分－全体」の関係にある場合

(1) の二つの事柄が時間的に隣接している場合はさらに、「二つの事柄が同時に生じる場合」と「二つの事柄が連続して生じる場合」に下位分類される。

まず、(2) の「二つの事柄が同時に生じる場合」の例を見ていく。「首を傾げる」という慣用句は、字義どおりの「首を横にまげる」という身体的状態の意味と、「不審に思う」という慣用的意味がある。このような場合は、「首を傾げる」という身体的状態と後者の「不審に思う」という精神状態が同時に生じることがあることに基づき、意味が成り立っている。次に、「二つの事柄が連続して生じる」の慣用的意味が成立する場合である。例としては、「口を開く」という句が字義通りの行動と連続して生じること、つまり、慣用的意味を持つ「言葉を発する」という行為が成立する。次は、(1) の「二つの事柄が連続して生じる場合」である。靱山はその例としては「しばらくの沈黙のあと、最初に口を開いたのは花子の方だった。」を挙げている。この表現では、「口を開く」という句が字義どおりの意味以外に「言葉を発する」という慣用的意味も表している。後者の「言葉を発する」という行為が前者の「口を開く」と時間的に連続して生じるというメトニミーの一種に基づき、慣用的意味が成立しているわけである。

次に、メトニミーの一種の (2) の二つの事柄が「手段－目的」あるいは「原因－結果」の関係に基づく慣用的意味が成立する場合を見ていく。「誰にも言わないでと言っていたのに、口が軽いあの人は皆に話してしまった」のような表現では、「口が軽い」には、「口を開ける動作が速い」という字義どおりの意味と「秘密にすべきことを口外する」という慣用的意味がある。前者の字義どおりの意味が原因で、後者の「秘密にすべきことを口外する」ということがその結果で生じると考えられる。このような表現は、原因と結果も密接に関連しているメトニミーの一種である。

最後に、メトニミーに基づいて句の慣用的意味の成立する場合は、(3) の二つの事柄が「部分－全体」の関係にある場合である。靱山は「目の黒いうち」をその例として挙げる。「目が黒いうち」は「存命中、生きているあいだ」という慣用的意味を持っている。この場合、「目が黒い」という状態は「生きている」状態の一部分であるという関係に基づいて成り立っているメトニミーである。

しかし、山梨 (1988) は靱山の分類と異なる分類を挙げている。山梨はメトニミーに

---

<sup>7</sup> 前述した「空間的な隣接」については靱山 (2002) は語のレベルにおいて (中略) 二つのものの空間的な隣接が中心でしたが、句 (特に動詞句) のレベルでは、時間的な隣接に基づき慣用的意味が成り立っているものが数多くありますと述べている。

基づく関係を「空間的な隣接性」、「近接性」、「共存性や時間的な前後関係」と「因果的關係」に分類し、「部分—全体」を後節でそれについて述べるシネクドキーとしてメトニミーから区別している。そして、メトニミー的な關係の典型的な例として、次のようなものを挙げている。

- ・ 容器—中身      ・ 材料—製品      ・ 主体—手段
- ・ 主体—付属物    ・ 作者—製品      ・ 原因—結果

本稿では、上述の靱山の分類に基づいて、慣用表現の考察を行う。

### 2.1.3 シネクドキーの定義と例

シネクドキー（提喩；*Synechdoche*）は「包含關係」（類と種的關係）、つまり、「含む含まれる關係」に基づいて、転義が起こる喩である。1.3.3 で述べたように、**Lakoff & Jahnson** や山梨のような言語学者はシネクドキー（提喩）をメトニミー（換喩）の一種と捉え、メタファー（隱喩）とメトニミー（換喩）を二本柱する立場に立っている。しかし、靱山（2002）はシネクドキーをメトニミーから区別し、それを次のように、定義する。

シネクドキー：より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは、逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表す喩。

なお、より一般的な意味とは、相対的に外延が大きい（指示範囲が広い）ということであり、より特殊な意味とは、外延が小さい（指示範囲が狭い）ということである。シネクドキーの例としては、

- (1) 彼は体が不自由なのに、人に頼らず、生きていく。
- (2) 花見に行ったとき、写真をいっぱい撮った。

例文 (1) の「人に頼らず」という表現では、「人」は一般的な意味としては、「人間一般」を意味するが、この文では「自分以外の人」を指す。つまり、「人」という語が「人間一般」という意味より特殊化されている。また、(2) の例文の「花見に行ったとき」という表現では「花」は「桜」を表す。「桜」は明らかに、「花」つまり、「植物が咲かせる美しく人目を引くもの」の一種であるが、「花」に含まれるものの方が「桜」に含まれるものより多い。すなわち、「花」の方は外延が多く、包摂關係が成り立つことになる。より外延が大きいカテゴリー（「花」）を類、より外延が小さいカテゴリを（「桜」）を種という場合もある。

私たちが持っているある対象を様々な程度の詳しさと特定性で捉える能力が、シネクドキーの基盤となる認知能力として考えられる。例えば、上述の例では、「花見」の対象となる「花」も「桜」と呼ぶ可能性がある。「花」と呼んだ場合は他の種類の花の違いに注目せず、一般的な「花」として見なされている。それに対して、「花」の下位カテゴリーである「桜」の一員としてより厳密に捉えた場合は、他の花にない特徴に注目

したということである。したがって、我々は認知能力を基盤として、詳しさや精密さに関しての異なるレベルの捉え方をした場合でも、言語表現としては同一のものを用いる。例としては、ある対象を「花」と捉えても、「桜」と捉えても、「花」を言語表現として使用する。これが、シネクドキーという現象である。

### 2.1.3.1 シネクドキーに基づく慣用的意味の成り立ち

句の慣用的意味がシネクドキーに基づいてどのように成り立つかを具体的に次の例で見ていく。

・彼はやくざの世界から足を洗った。

という例では「好ましくない仲間や仕事から離れて、まともな生活をする」という慣用的意味がある。この場合「足を洗った」ことは「好ましくない仲間や仕事から離れて、まともな生活をする」ことの一種である。したがって、前者、つまり、慣用的意味はより特殊であり、後者、つまり、字義どおりの意味がより一般的ということであり、シネクドキーに基づき、慣用的意味が成り立っていることになる。

以上、メタファー、メトニミーとシネクドキーという比喩に基づく日本語の句の慣用的意味の成立について検討した。

次に、まず、ペルシア語における意味拡張のプロセスを分析する。そして、慣用的表現の分類と、日本語慣用句とその比喩との関わりについて考察を行い、日本語の日常生活に頻繁に使用される慣用句を上述のメタファーとメトニミーの理論を手法として用い、ペルシア語の慣用句と対照しながら分析を行うことにする。

## 2.2 ペルシア語における意味拡張のプロセス

レトリック (rhetoric/ بلاغت)あるいは修辞学は、弁論・叙述の技術に関する学問分野である。Shamisa)2003 (によれば、ペルシア語では弁論・叙述の重要な技法は

「مجاز/ majāz/比喩」であり、その種類は「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」「تشبيه/tašbīh/シミレ」、「استعاره/este 'āre/メタファー」、「کنایه/kenāye/メタファー」である。次にそれぞれの特徴を検討する。

### 2.2.1 مجاز/majāz (比喩)

#### 2.2.1.1 مجاز مرسل / majāz-e morsal/メトニミー

「مجاز/majāz (比喩)」とは語句を本来の意味とは異なる意味で用いるということである。しかし、そのような意味拡張は特別な、正当な理由や何らかの関係に基づくべきである。(その理由や関係は「علاقه/‘alāqe」と呼ばれる。) この技法の使用は言葉をより美しく、好ましく、印象的にするためである。そこで、すべての表現や語句を本来の意味と異なる意味で使うことができない。「مجاز/majāz (比喩)」の「علاقه/‘alāqe」つまり

「理由/関係/関係の理由」は大きく二つのグループに分けられる。

- علاقه مشابهت / ‘alāqe mošābehat → 類似性に基づく理由/関係/関係の理由
- علاقه مجاورت / ‘alāqe mojāverat → 隣接性に基づく理由/関係/関係の理由

上記の二つの「理由/関係」に基づいて他の修辞技法が現れ、それぞれの使用頻度により、独立して名づけられている。

علاقه مشابهت / ‘alāqe mošābehat/類似性に基づく理由/関係/関係の理由」に基づく「مجاز/ majāz/比喩」は「استعاره/ este ‘āre/メタファー」と呼ばれる。そして、「علاقه مجاورت / ‘alāqe mojāverat/隣接性に基づく理由/関係/関係の理由」に基づく「مجاز/ majāz/比喩」は「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」と呼ばれる。「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」の形成にどのような「علاقه/ ‘alāqe /理由/関係/関係の理由」が影響を与えるか、言い換えれば、「原義」と「拡張した意味」の間にどのような「理由/関係/関係の理由」があるかによって、色々な事例の分類・整理が行われてきている。ペルシア文学では、「علاقه/ ‘alāqe/理由/関係/関係の理由」は無限であるが、本稿は純粋文学と関わるものではないから日常言語で使用される「علاقه/ ‘alāqe /理由/関係/関係の理由」のみを本稿の対象とする。

「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」の主な「علاقه/ ‘alāqe /理由/関係/関係の理由」は次のようなものである。

- علاقه کل و جزء / ‘alāqe-ye kolīyat va jozīyat → 全体—部分あるいは部分—全体
- علاقه حال و محل / ‘alāqe-ye hāl va mahal → 場所—その中に入れるもの（人やもの）
- ظرف و مظلوف / zarf va mazrūf → 入れ物—中身
- علاقه لازم و ملزوم / ‘alāqe-ye lāzem va malzūm → 相関的關係（何かの存在は他のものの存在による場合）
- علاقه علت یا علت و معلولی / ‘alāqe-yīlīyat yā ellat-o m ma’lūlī → 原因—結果
- علاقه عام و خاص / ‘alāqe-ye ām-o xās → 固有—公共
- علاقه آلیت / ‘alāqe-ye ālīyat → 手段や道具の「علاقه/ ‘alāqe/理由/関係/関係の理由」（主体—手段）’ alāqe-ye
- علاقه جنس / ‘alāqe-ye jens → 品質の「علاقه/ ‘alāqe /理由/関係/関係の理由」（主体—品質）
- علاقه شباهت / ‘alāqe-ye šebāhat → 類似さの「علاقه/ ‘alāqe /理由/関係/関係の理由」
- علاقه سمبل یا نماد / ‘alāqe-ye sambol yā namād → 象徴やシンボルの「علاقه/ ‘alāqe /理由/関係/関係の理由」

#### 2.2.1.2 تشبیه / tašbīh/シミレ

もう一つの言葉のあやは「تشبیه/tašbīh/シミレ」である。「تشبیه/tašbīh/シミレ」は、あるもの、あるいはある人を共通の類似性に基づいて別のものや人にたとえることであり、「mošabah/例えるもの」、「وجه شبه/vajhe šabah/類似性」、「mošabah-on beh/例え

られるもの」と「همچون و غيره/hamānand-e,mesl-e,hamčon va qeyre/のように、みたいになど」比況を表す語句が使われている比喩法である。例としては、

سورت او در زیبایی همانند ماه است./sūrat-e ū dar zībāi hamānand-e māj ast.

彼/彼女の顔は美しさにおいて月のようだ。(直訳)

ペルシア語では「تشبيه/tašbīh/ (シミレ)」は様々な種類があるが、本稿の分析の対象範囲外であるから、その分析を除外する。

### 2.2.1.3 استعاره/este‘āre/メタファー

「استعاره/este‘āre/メタファー」は「مجاز/majāz/比喩」の一種であり、その「علاقه/’alāqe/理由/関係/関係の理由」は「類似さ」である。実際に、「استعاره/este‘āre/メタファー」は「تشبيه/tašbīh/シミレ」に基づいて成立され、「圧縮されたتشبيه/tašbīh/シミレ」と呼ばれる場合もある。つまり、「مشبه به/mošabah-on beh/例えられるもの」のみ残るほど、「تشبيه/tašbīh/シミレ」は圧縮される。

「استعاره/este‘āre/メタファー」では、「同様と同一」が主張される。例えば、「太陽は黄色い花だ」と言うとき、「太陽は黄色い花のようだ」ではなく、「太陽は黄色い花、そのものだ」つまり、太陽の他の名前は「黄色い花だ」ということが主張される。

「استعاره/este‘āre/メタファー」における、「مشبه به/mošabah-on beh/例えられるもの」か「مشبه به/ mošabah-on beh/例えられるもの」のみ、表示されるかによって、次の二種類の「استعاره/este‘āre/メタファー」が成形されている。

#### 2.2.1.3.1 استعاره مصرحه/este‘āre mosarrahe/明白なメタファー:

この種の「استعاره/este‘āre/メタファー」では「مشبه به/ mošabah-on beh /例えられるもの」のみが表示される。例として、

مرادر خانه سروی هست کاندس سایه ی قدش فراغ از سرو بستانی و شمشاد چمن دارم  
marā dar xāne sarvī hast kandar sāyeye qadaš farāq az sarv-e bostānīo šemšāde čaman dāram

私には家に糸杉がいる。その糸杉がいるから、庭園の陰はもういらぬ。(直訳)

上記の詩は「糸杉のような背が高い恋人（配偶者）がいる」ということを表し、「恋人（配偶者）」が「高さ」で「糸杉」に例えられている。すなわち「مشبه به/ mošabah-on beh/例えられるもの」、では「糸杉」のみで表現されている。

#### 2.2.1.3.2 استعاره مکنیه/este‘āre makniye/不明瞭なメタファー:

この種の「استعاره/este‘āre/メタファー」では「مشبه به/ mošabah-on beh/例えられるもの」は例えられる

ものの「特徴や付属物」のみが表示される。例として、

به چشم عقل در این رهگذار پر آشوب نگر که کار جهان بی ثبات و بی محل است.

be chešm-e ‘aql dar īn rahgozār-e por āšūb negar ke kār-e jahān bī sobāt-o bī mahal ast.

この世は不安定で、混乱いっぱいの通路のようなものであることを知恵の目で見ろ。(直訳)

上記の例では「知恵」は「目」を持つ「人間」のようなものである。「たえられるもの」は「人間」で、「目」はその「付属物」である。

上述の「استعاره مصرحه/este‘āre mosarrahe」と「استعاره مکنیه/este‘āre maknīye」という二種類の「استعاره/este‘āre/メタファー」では「名詞句」だけの意味が拡張する。しかし、それ以外に、本稿が対象としているものと関わり、「استعاره/este‘āre/メタファー」の下位に含まれる「استعاره تبعیه/este‘āre tabaīye」、そして、「اسناد مجازی/esnād-e majāzī」という他の二種類の比喩的な言い方がある。「استعاره تبعیه/este‘āre tabaīye」と「اسناد مجازی/esnād-e majāzī」に基づいて、「形容詞」や「動詞」の意味が拡張する。それぞれに基づく意味拡張を次に考察する。

#### 2.2.1.3.3 استعاره تبعیه / este‘āre tabaīye / 追隨メタファー

「استعاره/este‘āre/メタファー」に基づく意味拡張は「形容詞」あるいは「動詞」に発生するなら、「استعاره تبعیه/este‘āre tabaīye」つまり、「追隨メタファー」と呼ばれる。「استعاره تبعیه/este‘āre tabaīye / 追隨メタファー」における「主体」を「現実的」と想像し、そして「動詞」の意味が類似性に基づいて拡張する。例えば、

ابر آمد و زار بر سر سبزه گریست.

abr āmado zār bar sare sabze gerist.

雲が来て、芝生の上に泣き出した。(直訳)

この例文では、「雲」が「現実的」の「主体（人）」と想像され、動詞の「降る」「泣く」との類似性に基づいて、「استعاره/este‘āre/メタファー」によって「زار گریستن/zār geristan/泣き出す」に拡張されている。

#### 2.2.1.4 اسناد مجازی / esnād-e majāzī / 主体と動詞あるいは形容詞と名詞の不自然な関係

「اسناد مجازی/esnād-e majāzī」と呼ばれる表現では、「動詞」は「現実的」であるがその「主体」との関係が「仮想的」で、現実では不可能なことである。つまり、現実では、「主体」は「動詞」の意味に基づく行為を行うことができない。こうしたことは、Shamisa (2003)によれば、単語の軸並置における混乱である。「اسناد مجازی/esnād-e majāzī」の例として、

šar', bargošāde tūmār hokme īn gonāh xānd

聖法は巻物を開き、この罪の判決を読む（直訳）

上記の詩の対句では「聖法」は「主体」であるが、実際に「巻物を開く」ことができない。そこで、「聖法」と「巻物を開く」の関係は「اسناد مجازی/ esnād-e majāzī」に基づいている。すなわち、「聖法」は「主体」として「巻物を開く」ことができないから、偽りに、「巻物を開く」が「聖法」に帰されている。つまり、「巻物を開く」ことが「仮想的」でる。

### 2.2.1.5 کنایه / kenāye/メタファー

「کنایه/kenāye/メタファー」は「مجاز/ majāz/比喩」の一種である。「کنایه/kenāye/メタファー」は文字通りの「覆う話し方/間接的な話し方」を意味する。「کنایه/kenāye/メタファー」という表現は、二通りの意味を持つ。すなわち、構成語の意味、つまり、文字通りの意味と比喩的な意味がある。「کنایه/kenāye/メタファー」の文字通りの意味は「معنای نزدیک/ ma'nāye nazdīk/近い意味」、比喩的な意味は「معنای دور/ ma'nāye dūr/遠い意味」つまり、抽象的な意味、と呼ばれ、聞き手や読み手はその「معنای نزدیک/ ma'nāye nazdīk /近い意味」を通して、「معنای دور/ ma'nāye dūr/遠い意味」を理解する。つまり、「کنایه/kenāye/メタファー」では、話し手が実際に言いたいのは文字通りの意味ではなく、後者の比喩的な意味である。すなわち、具体的な動作を通じて、抽象的なことが表される。そこで、聞き手や読み手の意識が「معنای نزدیک/ ma'nāye nazdīk/近い意味」と「معنای دور/ ma'nāye dūr/遠い意味」の関係を推論や推理に基づいて理解すべきである。「کنایه/kenāye/メタファー」の例として、

درخانه او باز است.

dar-e xāne ū bāz ast.

彼/彼女の家の扉が開いている。（直訳）

上記の例では「扉が開いている」ということから、「家の扉が開いているから入ることができる」ことが連想される。このように文字通りの特徴がこの表現に写像され、「客持て成しの良い」という抽象的な意味を表すようになる。

## 2.3 日本語の慣用的表現の分類

ある表現体が「慣用句表現」として成り立つためには、表現言語単位の基本条件を満たすこと、意味や形態の面で慣用性または固定性を保つこと、使用においては、一般性・

普遍性のうえで成り立つことという条件を満たさなければならない。慣用表現を 字義どおりに定義すれば、慣用とは習慣として使い慣れること、あるいは、一般に広く用いられることである。しかし、本論では、慣用表現を村木（1985）に従って、次のように定義する。

「語結合の意味、あるいは、語結合を構成する要素の意味がなんらかの逸脱（ズレ）をおこした表現」

このように定義した慣用表現は日本語表現の中でどのように位置づけられ、分類できるかは見解によりまちまちであり数多く示されているが、その中で注目に値するものの一つは宮地裕（1982）の見解である。宮地裕は慣用によって成り立つ「句」を大別し、「成句」と「一般連語句」に分ける。そして、「成句」をさらに、文レベルでは、「ことわざ・格言」、句レベルでは、「慣用句」に分類している。なお、「慣用句」をさらに、「連語的慣用句」と「比喩的慣用句」に二分し、そして、「比喩的慣用句」を「隠喩的慣用句」と「直喩的慣用句」に下位分類している。

次に、宮地があげている慣用表現に目を向けよう。

**句：**句とは二つ以上の単語が連続し、語よりも大きく文よりも小さい言語単位であり、あるまとまった意味を表し、一つの単語と似たような働きをなすものである。

**一般連語句：**一般的表現であり、語の連結体で句としてのまとまりをもつものである。

**成句：**成句とは、二つ以上の単語が複合し、ある決まった意味を表し、古くから広く世間で習慣的に用いられる言い回しである。

**ことわざ・格言：**歴史的、社会的な価値観を短い文相当の表現にまとめたものである。

**慣用句：**一般に慣用句と呼ばれるものは、二つ以上の単語が固く結びついて、いつも決まった組み合わせである。宮地によれば、慣用句という用語は一般の連語句より、結合度が高いものであるが、格言・ことわざと違って、歴史的・社会的な価値観を表すものではない。

**連語成句的慣用句と比喩的慣用句：**宮地は一般連語句よりは結合度が高いものを「連語成句的慣用句」と呼び、明確に比喩的意味を持つものを「比喩的慣用句」と呼んでいる。

**直喩的慣用句：**「直喩的慣用句」では、「～（の）よう」「～（の）思い」「ごとし」「ばかり・ほど」などの比喩指標が明示される。例としては、

- |          |                      |
|----------|----------------------|
| ・雲をつかむよう | 雲をつかむような話でとても信じられない。 |
| ・血をはく思い  | 血を吐く思いで論文を書いた。       |
| ・光陰矢の如し  | 人生は光陰矢のごとしだね。        |

- ・泣かんばかり                      泣かんばかりに頼み込む。
- ・猫の手も借りたいほど          猫の手も借りたいほど忙しいシーズンだ。

**隠喩的慣用句：**このような慣用句では、比喩指標が明示されないが語句の意味が派生的・象徴的であり、句の全体が比喩的な意味を表す。例えば、

- ・手を貸す    ちょっと手を貸してくれる？
- ・腹が黒い    あの人は口先だけで、腹が黒いから気をつけたほうがよい。
- ・肩を持つ    彼の肩を持つ者はだれもいなかった。

本稿では、宮地があげている慣用的表現の中から特殊な句である「慣用句」に焦点を当て、比喩表現との関連で考察を行う。

### 2.3.1 慣用句について

慣用句という用語は一般に広く使われているが、厳密にはどのようなものを慣用句と呼ぶのだろうか。慣用句に関する概念がはっきりしていないので、その疑問に明確に答えることができる人はほとんどいないであろう。ただ、おおよそ「一般的な共通理解として、習慣的に二つ以上の語が結合した形で使われ、全体である特定の意味を表すもの」である。日本語専門辞典もほぼ同様の概念規定をしている。次に、慣用句とはどういうものであるかを一般の辞書を通して試してみることにする。

広辞苑第6版では、「慣用句」を次のように説明している。「二つ以上の語から構成され、句全体の意味が個々の語の元来の意味からは決まらないような慣用的表現。「骨を折る」「油を売る」「間髪を入れず」など。イディオム。

日本語慣用句辞典では、「慣用句」とは、「単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比喩的固く、全体で決まった意味を持つ成句である。そして、同じ成句でも格言（歴史的・社会的に安定した教訓的意味を持つ成句：例「転ばぬ先の杖」）や諺（歴史的・社会的に安定した、事実や実態を簡潔に表現した成句：例「ぬかにくぎ」）とは異なる」と定義されている。

大辞林第三版によれば、「慣用句」とは次のようなものである。

- ・二つ以上が結合し、その全体が一つの意味を表すようになって固定したもの。「道草を食う」「耳にたこができる」の類。慣用語。イディオム。
- ・二語以上が、決まった結びつきしかない表現。「間髪を入れず」「悦に入る」の類。慣用句。イディオム。

以上の定義に基くなら、この種の句は語同士の結びつきが固定していることが特徴である。例としては、「手を通す」という慣用句は「誰も着ていない衣服をはじめて着る」という意味を表すのに、「肘を通す」などとは言えない。つまり、構成語を関連語で言い換えられない。また、慣用句の構成語を反義語で言い換えたり、特定形の敬語にする

ことはできない。<sup>8</sup>さらに、慣用句には句の構成要素である各語の意味から句全体の意味が導けない。例えば、「手を通す」の場合、「手」「を」「通す」という各語の意味がわかったとしても、全体の意味、つまり、「誰も着ていない衣服をはじめて着る」を導くことができない。

以上のことを踏まえると、「慣用句」に関するキーワードは「固定化」と「結びつく」ということであると言える。「固定化」というのは、二つ以上の単語が一度、結びついたら分離できなくなり、また、そのなかに他の要素を入れにくい、ということである。つまり、もしも分離した形を考えた場合、意味が「不明」になるということである。また、「結びつく」というのは、独立した単語の複合で生まれ、会話や文章上で定型句として用いられるということである。慣用句の意味が結びつく前にあった一つ一つの単語の意味とは、大きく異なり、フレーズ全体としての意味を持つようになり、ほとんどの場合は意味の予測が不可能になる。例としては、「手の裏を返す」という慣用句は、「手（名詞）」＋「の（助詞）」＋「裏（名詞）」＋「を（助詞）」＋「返す（動詞）」で構成され、それぞれ異なる意味を持っている。それに対して、「手の裏を返す」で「急に、がらりと態度を変える」という意味を持つ慣用表現となる。

### 2.3.2 慣用句の分類

慣用句について論ずるとき、その分類に関する様々な基準が考えられる。例えば、文法的形態による分類、意味分野による分類、身体語彙による分類、動物名による分類などがある。本稿では慣用句を挙げられる品詞別の特徴、語彙的な特徴、形式上の特徴に基づいて三つの分類に分け、それぞれの下位分類について考察を行う。

#### 2.3.2.1 品詞別の特徴に基づいての分類

慣用句は中心となる品詞により次のように分類される。

**1. 動詞慣用句：**動詞慣用句は「名詞＋助詞＋動詞」の形を成し、慣用句の中で、最も多く使用されるものである。例としては、目が届く、鼻にかける、骨を折るなど。

**2. 形容詞慣用句：**形容詞慣用句は「名詞＋助詞＋形容詞」の形を成し、その名詞と形容詞の間の意味関係はその間の助詞によって違う。動詞慣用句、名詞慣用句に比べて少ない方である。例としては、手が早い、口が軽い、虫がいいなど。

**3. 名詞慣用句：**この種の慣用句は形式的に主に「名詞＋名詞」「名詞＋に＋名詞」「名詞＋の＋名詞」その他から成る。例として、十重二十重、寝耳に水、水の泡、一糸まとわ

---

<sup>8</sup> 慣用句中の動詞を「お～になる」の形にはしにくいと言われるが、動詞に「（ら）れる」をつけ、敬語化できるものは多い。

ぬ裸、などがある。

### 2.3.2.2 語彙的な特徴に基づいての分類

語彙的な特徴としては、以下の四つの種類の慣用句が挙げられている。

**1. 身体語彙の慣用句：**身体語彙慣用句とは、身体語を含んだ慣用句を指す。日本語では、身体語彙慣用句は比較的多い。しかし、「胃」「肺」「腸」などのような身体の内部分かりにくく、目に見えないものの方が「口」「目」「手」のように、目に見えるものに比べて少ない。身体慣用句の例としては、手も足も出ない、鼻の下を長くする、舌を巻くなど。

**2. 心情語彙慣用句：**心情語彙慣用句とは、心情や心理を表す句である。例えば、気が重い、息をのむ、気に入る、気を楽にするなど。

**3. 漢語語彙の慣用句：**このような慣用句の構成は「名詞＋名詞」「名詞＋動詞」で、漢語＋漢語、漢語＋和語、和語＋漢語の形で現れる。例えば、風前の灯、肝に銘ずる、齒牙にかけるなど。

**4. 洋語語彙慣用句：**他の言語とりわけ、ヨーロッパ諸言語から借用された語が含まれる慣用句であり、「洋語＋和語動詞」の形で用いられる。例としては、ピリオドを打つ、ブレーキをかけるなど。

### 2.3.2.3 形式上に基づいての分類

慣用句は形式上の特徴に基づいて、次のように分類される。

**1. 比喩形式の慣用句：**前述したように、比喩形式の慣用句は主に直喩的慣用句と隠喩的慣用句に分けられる。隠喩のタイプはさらに、動物の比喩を使う慣用句、自然現象の比喩を使う慣用句、体の部分を使う比喩等々に分類される。直喩的慣用句では「よう」「思い」などの比喩指標が明示されるが、隠喩的慣用句では、比喩指標が明示されず、句の全体が比喩的な意味を表す。例としては、「羽が生えたよう（に）」、「馬が合う」、「火中のくりを拾う」、「手も足も出ない」など。

**2. 否定形式の慣用句：**否定の形をとる慣用句は日本語では多く見られる。例えば、「露知らず」、「そりが合わない」、「腹が減ってはいくさができぬ」など。

**3. かさね形式の慣用句：**「元も子もない」「あの手この手」「言わず語らず」「踏んだ

り蹴ったり」のように、類義語や関連語、対義語をならべたものなどによって意味が強調される慣用句はかさね形式の慣用句と呼ばれる。かさね形式をとる慣用句は日本語で多いと言える。

上述のように慣用句と呼ばれるものは様々な形態を取って現れる。本稿では、慣用句の分類の中から、「名詞＋助詞＋動詞（動詞慣用句）」「名詞＋助詞＋形容詞（形容詞慣用句）」という構造を持つ隠喩的慣用句を中心として考察する。

## 2.4 ペルシア語の慣用的表現

日本語では慣用句（「一般的な共通理解として、習慣的に二つ以上の語が結合した形で使われ、全体である特定の意味を表すもの」として定義されるものはペルシア語では、別の名前で呼ばれ、解説される。つまり、「前置詞＋名詞＋動詞」、あるいは、「具象名詞/抽象名詞＋動詞」という形で作られ、前者は「عبارت فعلی/ebārat-e fe'lī/動詞句」、後者は「فعل مرکب/ fe'l-e morakkab /複合動詞」と呼ばれる。それぞれの例は次のようなものである。

**عبارت فعلی/ ebārat-e fe'lī /動詞句の例：**

به دست آوردن /be dast āvardan →手に入れる

「به/be/に」は「前置詞」、「دست/dast/手」は「名詞」、「آوردن/āvardan/入れる」は「動詞」である。

**فعل مرکب/ fe'l-e morakkab /複合動詞の例：**

نگاه کردن /negāh kardan →.～を見る/熟視する

「نگاه/negāh/一見、観察」は「名詞」、「کردن/kardan/する」は「動詞」である。

言うまでもなく、上記のような表現はペルシア語文法の観点に基づく分類である。しかし、それぞれをレトリックの観点から考察するなら、場合によって、「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」か「استعاره/este'āre/メタファー」か「کنایه/ kenāye/メタファー」と見なされる。そこで、本稿では「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」か「استعاره/ este 'āre/メタファー」か「کنایه/ kenāye/メタファー」として確定されているものについては日本語の「慣用句」と対照する。

日本語の「慣用句」という言葉がペルシア語では「اصطلاح/estelāh」と訳されている。しかし、ペルシア語では「اصطلاح/estelāh」は「特殊な用語」という意味で使われる。そこで、各種の科学的な分野には特別な「فرهنگ اصطلاحات/Farhang-e estelāhāt/用語辞典」、例えば、「فرهنگ اصطلاحات ادبی/Farhang-e estelāhāt-e Adabī/文学用語辞典」「فرهنگ اصطلاحات مهندسی/Farhang-e estelāhāt-e Mohandesī/工学用語辞典」などがある。

それ以外に、ある比喩の表現は日常言語と口語では頻繁に使用され、人々はその文字

通りの意味ではなく、慣用的な意味を理解する場合もその表現は「اصطلاح/estelāh」と名付けられる。

## 2.5 まとめ

本章では、日本語とペルシア語における意味拡張のプロセス、つまり、両言語における比喩的意味の作られ方の特徴やパターンについて論じた。その方法として、まず、日本語の拡張の仕組みとしてのメタファー、メトニミー、シネクドキーという三種の比喩が取り上げ、そして、その定義と例を考察し、それぞれに基づく慣用的意味の成り立ちを分析した。次に、ペルシア語における意味拡張の過程を紹介した。その結果、いくつかのことが明らかになった。

まず、日本語では、「～のような」「～みたいな」の明示的な表現を用いて、あるものを別ものに喩える表現、つまり、「シミレ（直喩）」は比喩の一種であるが、認知言語学の分野では除外されている。しかし、ペルシア語では「تشبيه/tašbīh/シミレ」は言葉の一つのあやとして取り扱われている。

次に、日本語では、意味拡張は「形態素・語」あるいは「句」のレベルで派生したとしても、メタファー、メトニミー、シネクドキーと呼ばれる。一方、ペルシア語では、メトニミーの場合は、日本語と同様であり、「語」の意味拡張の場合でも、「句」の場合でも、「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」と呼ばれる。しかし、メタファーの場合は、ペルシア語では「形態素・語」と「句」が区別されている。つまり、日本語のメタファーと対応する2種類のメタファー（استعاره/este‘āre/メタファー・کنایه/ kenāye/メタファー）があり、意味拡張が「語」に派生する場合は「استعاره/este ‘āre/メタファー（استعاره مصرحه/este‘āre mosarahe・استعاره مکنیه/ este‘āre maknīye・استعاره تبعیه/ este‘āre tabaīye)」、意味拡張が「表現の全体」に派生する場合は「کنایه/ kenāye/メタファー」と呼ばれる。

また、シネクドキーに関して、日本語では言語学者の考え方がまちまちであり、山梨（1988）のような言語学者はシネクドキーをメトニミーの一種と捉え、メタファーとメトニミーを二本柱する立場に立っているが、靱山（2002）はシネクドキーをメトニミーから区別し、日本語の比喩をメタファー、メトニミー、シネクドキーに分類している。一方、日本語のシネクドキーはペルシア語の「علاقه عام و خاص/ ‘alāqe-ye ām-o xās → 固有一公共」の関係に基づく「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」と対応すると考えられる。すなわち、ペルシア語では「シネクドキー」が「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」の一種と捉えられている。

一方、ペルシア語における「اسناد مجازی/ esnād-e majāzī」による意味拡張はペルシア語の特有で、日本語では存在しないであろう。例えば、

شرع، برگشاده طومار حکم این گناه خوانده

šar’, bargošāde tūmār hokme īn gonāh xānd

聖法は巻物を開き、この罪の判決を読む（直訳）

「動詞」の「読む」は「現実的」であるがその「主体」との関係が「仮想的」で、現実では不可能なことである。つまり、現実では、「主体」は「動詞」の意味に基づく行為を行うことができない。

続いて、両言語の慣用的表現の分類とその特徴について討論した。日本語の慣用句は慣用表現の一部として、品詞別の特徴に基づいて「動詞慣用句」「形容詞慣用句」「名詞慣用句」、語彙的な特徴に基づいて「身体語彙の慣用句」「心情語彙慣用句」「漢語語彙の慣用句」「洋語語彙慣用句」、そして、形式上に基づいて「比喻形式の慣用句」「否定形式の慣用句」「かさね形式の慣用句」に下位分類されることが分かった。

一方、日本語では慣用句、つまり、一般的な共通理解として、習慣的に二つ以上の語が結合した形で使われ、全体である特定の意味を表すものとして定義されるものはペルシア語では、別の名前で呼ばれ、「前置詞＋名詞＋動詞」、あるいは、「具象名詞/抽象名詞＋動詞」という形で作られ、前者は「عبارت فعلی/ebārat-e fe'lī/動詞句」、後者は「فعل مرکب/fe'l-e morakkab /複合動詞」と呼ばれる。それぞれをレトリックの観点から考察するなら、場合によって、「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」、「استعاره/este'āre/メタファー」、「کنایه/ kenāye/メタファー」などと見なされる。そこで、本稿では「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」か「استعاره/ este'āre/メタファー」か「کنایه/ kenāye/メタファー」として確定されているものについては日本語の「慣用句」と対照するということが明らかになった。

### 第3章：日本語とペルシア語の「目」を含んだ慣用句の対照

#### 3.1 「目」の意味分析

日本語の話者の実言語運用の調査の結果に基づいて、「目」という身体語彙に関する慣用句は最も高い使用率を占めていた。

本章では、具体的にはまず日本語とペルシア語における「目」の意味を様々な辞典に基づいて検討する。そして、日本語とペルシア語の「目」に関する慣用表現を取り上げ、その意味を比較する。そして、メタファーやメトニミーなどの認知言語学の手法を用いて、慣用句の構成素である「目」の意味が慣用句全体の意味成立にどのように影響を与えるかを追及する。

『日本語国語大辞典』、『大辞林』、『大辞泉』、『広辞苑』、『日本語大辞典』、『明鏡国語辞典』といった格日本国語大辞典も「目」の見出しのもとに記述されている意味を参照にし、日本語における「目」の基本的意味と派生的意味が辞書でどのように記述されているかを見てみよう。

##### 3.1.1 日本語の場合

###### 【「目」の基本義】

『日本語国語大辞典（第2版）』（2001）によると「目」の基本義は次のとおりである。

- ・ 人や動物に備わる感覚器官の一つ。視覚器官。
- ・ 光の刺激を受けて、外界の状況を知るための器官。
- ・ 人をはじめ脊椎動物のように頭部に二つあって対をなすものをいう。
- ・ 動物の種類によってその個数・位置・構造・機能は異なり、一様でない。まなこ。

日本語の各辞典においては「目」の基本義はほとんど同義となっており、「外界を見るための器官」「光線・色などを感受して脳に送る感覚器官」「人や動物の頭部に二つある」などは、「目」のもつ大きな特徴であると言える。

また、『大辞泉 第一版』（1995）において「目」の派生的な定義は以下のとおりである。

###### 【「目」の派生義と典型的意味】

###### 1. 物を見るときを目つき。眼差し。

こんな鋭い目で見つめられたら心臓が止まる。

###### 2. 物を見る能力。眼力。

本当に目が悪いかどうかは本人にしか分からない。

###### 3. 見ること。見えること。

私達がお目にかける料理を作る為に微妙に調合され、その割合には細心の注意を払っております。

**4. 注意して見ること。注意。**

恥ずかしい、みっともない、世間の目が怖い、惨めなどことは親に愛してもらえなかった子が一生一人で抱えていく思いです。

**5. 見分ける力。洞察力。**

私の目に見えている世界は、私がいるべき世界ではないと言う錯覚である。

**6. 見たときの印象。外観。**

相手の見た目が良くないと恋愛できませんか？

**7. その者が出会ったありさま。体験。**

女だったら、あんな目に遭うのはつらいよなあ！

**8. 位置・形状など目に似たもの。**

「台風の目」「魚の目」「網の目」

**9. 線状に一列に並んだものの間にできたすきまや凸凹。**

「櫛<sup>くし</sup>の目」

**10. のこぎりの歯や、やすり・すりばちなどの表面に付けた筋。**

「目立て」

**11. 賽<sup>さい</sup>の面につけられた一から六までの点。また、振るなどして表れたその数。**

「賽の目」「いい目が出る」

**12. 囲碁で、連結が完全な石で囲んである空点。**

「目が二つで活」

**13. 物差し・はかりなどに数量を示すために付けたしるし。**

「はかりの目」

**14. はかり・升などではかった量。重さ。**

「目が足りない」

15. 木材の切口に現れる年輪の線。木目。

「目の粗い板」「<sup>まき</sup>正目」

16. 文様または紋所の名。方形またはひし形の中心に点を一つ打った形のもの。

「五つ目」

### 【「目」の接尾としての派生】

17. 数を表す語に付いて、その順序にあたる意を表す。

「二番目」「一年目」「五人目」

18. 動詞の連用形に付いて、その状態にあること、また、その状態にあるところを表す。

「結び目」「落ち目」「弱り目」

19. 形容詞の語幹に付いて、そのような性質や傾向をもっている意を表す。

「長目」「細目」

上記の意味項目を見れば、日本語の「目」の派生義は非常に多いことがわかる。「目」の派生義の意味として挙げられている項目は、メタファー写像とメトニミーによって、基本義と派生義という形で体系的に関係づけられている。例えば「目」は光線・色を感受する、外界を見るに関わる器官であり、身体部位でその身体部位の機能のメトニミーに基づいて「目」がその働き、機能である「物を見る能力」を意味する。また、「目」の形状に類似した「網の目」のような例では、メタファーによって意味が拡張されている。

#### 3.1.2 ペルシア語の場合

ペルシア語の場合は、日本語の「目」に相当するものとして、「چشم/Čašm/Češm/目」と「دیده/dīde/目」<sup>9</sup>という言葉がある。日本語の「目」に対応するペルシア語の「چشم/Čašm/Češm/目」は何を意味しているか、そして、その意味がどのように拡張されているかを『Farhang-e Moīn』『Loqat nāme-ye Dehxodā』『Farhang-e Fārsye Amīāne (ペルシア語俗語大辞典)』『Farhang-e Amīd』によって次のように整理する。

### 【「چشم/Čašm/Češm/目」の基本義】

<sup>9</sup>日常会話では「چشم/čæšm/češm/目」に比べ「dīde/دیده」は使用率が非常に低。古代ペルシア語で使用されていた言葉で、近代ペルシア語では、詩、文学的なテキストなどで使用されるので、本稿では取り扱いとする。

- ・ 人や脊椎動物の身体の一つの器官
- ・ その上に眉毛があて、外界を見るための器官
- ・ 色彩を感受して区別能力がある器官
- ・ まなこ

例としては、

در این مقاله در رابطه با مواد غذایی مفید برای سلامتی چشم به بحث می پردازیم.

dar īn maqāle dar rābete bā mavāde qazāīye mofīd barāye salāmatīye čāšm be bahs mīpardāzīm.

本稿では、目の健康に良い食品について考察を行う。

رنگ چشمان او شباهت زیادی به چشمهای مادرش دارد.

range čāšmāne ū šebāhate zīādī be čāšmhāye mādaraš dārad.

彼女の目の色は、彼の母親にとっても良く似ている。

## 【「چشم/čāšm/češm/目」の派生義と典型的意味】

1. 邪視の害（人は他人の羨望の目差しで害を受けるか、他人を羨望の目差しで邪視の害を与える。つまり、他人に病気や死などの害悪を与える神秘的な能力を有すると考えられている人のまなざし）

برای اینکه از چشم بد در امان باشی ، همیشه این دعا را به همراه داشته باش.

barāye īnke az češm-e bad dar amān bāšī,hamīše īn do‘ā rā be hamrāh dāšte bāš.

邪視から保護されるために、いつもこのお守りを身につけて。

2. 望・希望・期待

ما ز یاران چشم یاری داشتیم خود غلط بود آنچه می پنداشتیم

mā ze yārān čāšm-e yārī dāštīm xod qalat būd ānče mī-pendāštīm

我々は親友に助けてもらうことを期待していたが、その考え自体が間違いだった。

3. 目付き・眼光・視線・眼差し・まなざし

وقتی برگشتیم یکدفعه چشم به همان جوان افتاد و از ترس جیغ کشیدم.

vaqtī bargāštam yekdaf’ e češmam be hamān javān oftād va az tars jīq kešīdam.

振り返った途端、突然、若い男が目にとまり、怖くて叫んだ。

(「Hamšahri On Line」 2013.12.13)

4. 受諾・承諾・応諾（喜んで承知しました）

الف: لطفاً این کتاب را به استاد صبوری تحویل دهید.  
ب: چشم، اگر تشریف بیاورند حتماً تحویلشان میدهم.

A: lotfan īn ketābhā rā be ostād sabūrī tahvīl dahīd.

B: čašm, agar tašrīf bīāvarand hatman tahvīlēšān mī-daham.

A: この本をサアブリ先生に渡していただけますか。

B: はい、わかりました。いらっしゃいましたら、渡します。

## 5. 愛すべき・貴重・親愛

آرزو دارم برایش زن بگیرم و خودم دامادش کنم، اگر دختر داشتم می گذاشتم روی چشم بهش میدادم. عباس چشم راست من است.

ārezū dāram barāyaš zan begīram va xodam dāmādaš konam. agar doxtar dāštam mī-gozāštam rūye češmam beheš mī-dādam. ‘abbās češm-e rāste man ast.

彼のために妻を娶らせることが私の夢だ。私に娘がいれば、非常に喜んで、彼と結婚させていた。アッバスは私の右の目（意訳：最愛の人）だ。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』: 428)

## 6. 面前・御前・… の見るところでは

آری چو وقت خویش ندانی و روز خویش در چشم شاه خواری و در چشم خواجه خوار

ārī čō vaqt-e xīš nadanī o rūz-e xīš dar čašm-e šāh xārīo dar čašm-e xāje xār

自分の時間と自分の価値を知らなければ、王の目では卑しく、富豪の目にも卑しい。（直訳）

自らと自分の時間の価値を知らなければ、他人の見るところでは、卑しくなる。（意訳）

(『Loqat nāme-ye Dehxodā』)

## 7. 睡眠（うたた寝）の単位

بعد از ظهر گرمی بود. اگر فقط یک چشم خوابش می برد، این جزو جز سینه آرام می گرفت.

bad az zohr-e garmī būd. agar faqat yek češm xābaš mī-bord, īn jezzo jezz-e sīne ārām mī-gereft.

暑い午後だった。一目さえ寝たら（意訳：うたた寝さえすれば）、その心の悩みが落ち着いていただろう。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』: 425)

## 8. ペルシア文字における形状が目 に似たもの：(و:vāv) (ف:fa) (ق:qāf) (ه:he)

و چشمهای او و قاف و فا در خور یکدیگرند و بر یک اندازه بود، نه تنگ و نه فراخ

va češm-haye vāv va qāf va fā dar xor-e yekdīgarand va bar yek andāze bovad, na tang va na farāx.

「vav ヴァヴ」「qāf ガーフ」「fā ファ」という文字の目のサイズが同じです。

(『Loqat nāme-ye Dehxodā』)

## 9. バックギャモンというゲームのサイコロの各面に数を示す小さな点<sup>10</sup>

上記の日本語とペルシア語の「目」の意味項目から見れば、日本語に比べてやや少ない。両言語では、「目」は見る働きをする感覚器官の一つであり、身体部位として認識され、以下の四つの観点から特徴付けられると思われる。

- ・ **構造**：眼瞼、結膜、角膜、強膜、虹彩、チン小帯、毛様体、水晶体、前房・後房、隅角、脈絡膜、網膜、黄斑、視神経、視神経乳頭、硝子体で構成される器官。
- ・ **機能**：光線・色などを感受し、脳に伝える。
- ・ **位置**：目の基本的な位置は、眉毛の下、顔の輪郭に対して左右 1/4、高さは 1/2 を中心とする位置である。
- ・ **形状**：基本的にアーモンドの形や丸い、細いなどの形状を持つ

しかし、両言語では、意味拡張に関わる認知プロセスによって、以上の四つの側面に基づいて拡張している。例えば、「睡眠（うたた寝）の単位」を表す「目」の派生義の場合は、「目」と「睡眠」の隣接性や関連性つまり、メトニミーに基づいてその意味が拡張され、基本義的な意味と派生的な意味が体系的に関連付けられている。また、「ペルシア文字における形状が目にしたもの：(ج:vāv) (ف:fe) (ق:qāf) (ه:he)」のような場合は「目」と「(ج:vāv) (ف:fe) (ق:qāf) (ه:he)」という文字の類似性に基づ「استعاره/ este'āre/ (メタファー)」による意味の拡張が成立している。

山梨 (1995) は以上のような語彙レベルの意味拡張の関係を「類似性の認識」に基づいて場合は「メタファーリンク」、「近接性の認識」に基づく場合は「メトニミーリンク」と呼び、身体部位に関する原義とメタファーリンクまたはメトニミーリンクの関係にある意味が、前者から後者の意味への派生関係を介して結びつけられていると述べている。しかし、意味拡張は語のレベルだけではなく句ないしは文のレベルでも現れることである。山梨はイディオムを前者の例として挙げ、そしてイディオムの例として身体部位の意味関係を考察している。山梨はイディオムを二つの A グループと B グループに分け、A グループを「メタファー的イディオム」そして、B グループを「メトニミー的イディオム」と呼んでいる。A グループの例として「顔に泥をぬる」B グループの例としては「手をあわせる」を分析している。「顔に泥をぬる」という表現では文字通りの意味つまり、「泥で（相手の）顔を汚す」という行為のアナロジーを介し、抽象的な意味の「（相手を辱める/侮辱する）」が派生する。それに対して、B グループの例では、「部分」－「全体」の近接性のメトニミーリンクによって、原義とイディオムの意味が関連づけられている。すなわち、「手を合わせる」というイディオムは「祈る」という意味であるが、手をあわせる行為自体は祈るという物理的な行為全体の一部であると述べている。

<sup>10</sup> 9 番の目の意味が古典ペルシア語で使用されていたが現代ペルシア語では使われなくなっている。

次に「目」を用いた慣用句においてメタファーとメトニミーがどのように関わっているかを考察する。

### 3.2 「目」を含んだ慣用句の意味分析

両言語の辞書に載っている説明に基づくと、「目」の基本義は、動物、特に人間の視覚器官で、物を見る働きをすることであり、「視覚の器官」の意味が共通しているのがわかる。田中（2001）は、これを基本義とする理由を「人間が世界の物事を捉え、理解し、働きかけるという生の営みの出発点が自らの身体とこれを通じての活動とにあり、語の多義化においても身体基盤の意味がそうでない意味より基本的であると考えられるからである」と述べている。田中によれば、「視覚器官」は複合的な概念であり、大きく、身体部分という物体としての側面と知覚・生理的機能の側面に分けることができる。次節以下ではこの二つの側面を起点として、メタファーやメトニミーの手法に基づく「目」の意味が慣用句の意味形成のプロセスにどのように影響を与えるか、また、「目」の意味が「目」を含む慣用句においてどのように位置づけになるのかを探り、具体的な例文を挙げながら、分析を試みる。

そこで、まず、本稿で行った日本語における慣用句の分布調査のデータで使用された日本語の「目」に関する慣用句を表2でまとめ、そして、様々な慣用句辞典や調査に使用したデータの中から例を提示し、その意味においてはメタファーやメトニミーがどのような役割を果たしているのかを考えていくことにする。そして、その日本語の「目」に対応するペルシア語の「目」の慣用句はどのように成立するかを明らかにするために、例文を挙げながら、分析を試みる。<sup>11</sup>まず、調査のデータで、使用された日本語の「目」に関する表を見てみよう。

---

<sup>11</sup> 使用したデータ資料の中で最も使用率が高い身体語彙は「目」の慣用句であり、全体の18.89%を占めていたが、その中で繰り返しに使用されていた慣用句は多かった。この表でそのような慣用句を一回だけ記入する。

＜表 3＞日本語慣用句の分布調査のデータにおける使用されていた「目」の慣用句<sup>12</sup>

| 目が～   | 目に～          | 目の～        | 目も～      | 目を～        |
|-------|--------------|------------|----------|------------|
| 目が合う  | 目に会う（逢う、遭う）＊ | 目の敵（仇）にする＊ | 目も当てられない | 目を疑う       |
| 目が利く  | 目に浮かぶ＊       |            |          | 目を奪われる     |
| 目が眩む＊ | 目に掛かる＊       |            |          | 目を覆う       |
| 目が肥える | 目に掛ける        |            |          | 目を掛ける＊     |
| 目が覚める | 目に沁みる        |            |          | 目をくらます     |
| 目が高い  | 目にする＊        |            |          | 目を凝らす＊     |
| が届く   | 目につく＊        |            |          | 目を覚ます＊     |
| が無い   | 目に留まる        |            |          | 目を三角にする    |
| が光る   | 目に入る＊        |            |          | 目を忍ぶ       |
| が回る   | 目に見える＊       |            |          | 目を白黒させる    |
|       | 目に物見せる       |            |          | 目を注ぐ       |
|       | 目に触れる        |            |          | 目をつける＊     |
|       | 裏目に出る        |            |          | 目をつぶる＊     |
|       | 人目に立つ        |            |          | 目を通す       |
|       |              |            |          | 目を止める      |
|       |              |            |          | 目を盗む＊      |
|       |              |            |          | 目を光らす＊     |
|       |              |            |          | 目を引く＊      |
|       |              |            |          | 目を開く＊      |
|       |              |            |          | 目を丸くする     |
|       |              |            |          | 目を回す       |
|       |              |            |          | 目を見る       |
|       |              |            |          | 目を見張る      |
|       |              |            |          | 目を向ける＊     |
|       |              |            |          | 目を遣る＊      |
|       |              |            |          | 目先（目前）を変える |

「目」は「身体部分」すなわち「視覚器官」として、丸い、細いなどの形状を持ち、手で触れたりできる物体である。しかし、前述のメタファー、メトニミーといった認知過程を経てその意味が拡張している。次節では、「目」の多義的意義を「身体部分」の側

<sup>12</sup> 表の中では＊は3回以上、繰り返しに使用されていた慣用句を示す。

面と「機能」の側面、そして、この二つの範疇に含まれないその他に分け、その慣用句の意味拡張を考察する。

### 3.2.1 視覚器官としての側面

「目」は視覚情報の受容器であり、人が視覚器官を介し、物を知覚して、ある印象を形成する。しかし、常にこの意味で使用されるわけではない。「目」の表情と働きによってその意味が拡張される。

千住（2003）によれば、昔から「目は心の窓」と言われ、心理学的研究の報告に基づいて、人間は他者の心の状態を読みとるときに相手の「目」の部分の情報を多く用いている。実際、人の「目」の部分隠されてしまうと、その他の部分が見えていたとしても、微妙な情報の違いは、かなり判別しにくくなる。

「目を丸くする」（驚き）「目を見張る」（驚き）「目の色が変わる」（怒り）「目を輝かす」（喜び）「白い目で見る」（軽蔑）「目を細くする」（喜び）「目を瞑る」（寛容）「目を三角にする」（怒り）「目尻を下げる」（喜び）などのような表現は人間の表情や感情を表し、身体経験によって成立されている例である。このような表現の起源について、楠見・米田（2007）は現実の表情や身体部位、姿勢の変化を字義通りに描写したものであると述べている。しかし、実際には、身体変化が現れていなくても比喩的に誇張して使われている。すなわち、これらは、換喩表現として、

（a）表情、身体・姿勢（部分）の記述で、感情（全体）を示す（例：手がわななく→悲しみ）、

（b）表情、身体・姿勢の変化（結果）で、感情（原因）を示す（例：息をのむ→驚く）の2通りがある。両者は、区別が難しいこともあるが、原因—結果の時間的隣接性あるいは部分—全体の空間的隣接性に基づいている。」と述べている。

山梨（1998）によれば、上述のタイプの表現は次のようなモデルに基づいている。

**肉体の兆候：→内面的な感情の兆候**

山梨があげているモデルに基づいて、人間の感情は肉体的な原因や生理的な動機によって裏付けられ、そして、感情の諸相はその体の肉体的、生理的な変化や兆候のモデルを介し、具体的に理解される。主体の肉体的、生理的なモデルにより、感情の側面を間接的に表現するのは因果的關係、すなわち、原因—結果に基づくメトニミーである。<sup>13</sup>

以上のような表現は喜び、驚き、怒り、感動、寛容、冷淡など、すなわち、感情を表す身体語彙表現が日本語ではかなり多い。顔面部位の筋肉や色の変化による感情表現に

<sup>13</sup> 山梨（1998）はメトニミー表現を特徴づける関係を内容—中身、材料—製品、主体—付属物、作者—製品、原因—結果に分類しているが、これらはいくまでも換喩的な（メトニミー）関係の典型的であり、これにつきるものではないと述べている。

において、もっとも多いのは、「目」である。目の形態は、注目されやすく、また表情が顕著に現れているからである。ペルシア語でも同様であり、日本語・ペルシア語とも感情を表す慣用句は身体語彙、とりわけ、「目」とよく結びついていると言える。次節では、日本語のそれぞれの感情に関する「目」の慣用表現を対象とし、その慣用句に対応するペルシア語の「目」の慣用句はどのように成立するかを例文を挙げながら考察する。

## 1. 喜びを表す表現の例

日本語：

目を輝かす（張り切る）

子供たちは目を輝かせて絵を描いている。（張り切って楽しそうに絵をかいている）

目を細める（満足してほほえむ）

孫の活躍に祖父は目を細めっぱなしだ。（孫が活躍するので祖父は喜びっぱなしだ）

（『分野別・日本語の慣用表現』1992）

1の「目を輝かす」や「目を細める」のような表現では「目」自体が喜びの意味を担っているのではなく「喜びや期待などで興奮している様」や「満足しているほほえむ」ことを表す。嬉しいとき、笑うことが当然で、その結果が表情に現れ、目が輝くようであり、細くなるということであり、人間の内部で生じる精神状況である。これは、「原因—結果」に基づくメトニミーである。

ペルシア語：

زن انگلیسی سردار در را باز کرد چشمهای اسدالله میرزا برق زد. / barx zadan-e češm/目が輝く（意訳：意欲が溢れ、嬉しそうに見つめる）

زن انگلیسی سردار در را باز کرد چشمهای اسدالله میرزا برق زد.

zan-e engīlīsīye sardar dar rā bāz kard. čehsm-hāye asadollāh barqī zad.

イギリス人の軍司令官の奥さんがドアを開けると、アサドゥッラーミールザーの目が輝いていた。（意訳：アサドゥッラーミールザーは（意欲が溢れ、）嬉しそうに見つめた）

（『Farhang-e Fārs-ye Amīane』:151）

以上の文章では「زن انگلیسی سردار در را باز کرد چشمهای اسدالله میرزا برق زد/barx zadan-e češm/目が輝く」には目がきらきら照りきらめくという文字通りの意味がある。しかし、この文字通りの意味が抽象化され、「アサドゥッラーミールザー」という人物が「軍司令官のイギリス人の奥さん」に対して意欲が溢れ、嬉しそうに彼女を見つめるという感情を表している。

この例では、「主体」、あるいは「目」は現実の意味（文字通りの意味）で考慮されているがその動詞の意味は類似性に基づいて拡張されている。普段、「輝くとキラキラする」は「嬉さ」をもたらし、ある意味で、「嬉さ」の象徴である。その類似性に基づい

て意味拡張が派生し、「استعاره تبعیه /este‘āre tabāīye/追隨メタファー」である。

## 2. 驚きを表す表現の例

日本語：

目を丸くする（驚いて目を大きく見開く）

兄鳩ら（あにばと）が目を丸くして見守る中、伝書をつかさどる会社のポッポと湯気を上げる弟鳩（おとうとばと）

（『朝日新聞、天声人語』2009.6.9）

目が飛び出る（とても驚いて目を大きく開く）

日本は目が飛び出るほど物価が高い。

（『おぼえて便利な慣用句』2000）

上の2つの例において通常より「目」が大きい場合は驚きを意味する。これらの表現は、文字通りでは「目が飛び出るほど大きくなる」や「目の形が丸くなる」すなわち、「目」の状況の変化という意味である。この具体的なことを通して、その結果である「びっくりする、驚く」のような抽象的な感情を表すようになる。これは、感情が及ぼす生理的影響はその感情を表すというメトニミーに基づいた意味の拡張であると考えられる。

ペルシア語：

日本語の上記の二つの表現は「目」の形の変化によって、感情が表れている例である。ペルシア語の「目」の慣用句の中でもそのような例が見られる。

例えば、

چشمهای خود را دراندن /češm-hāye xod rā darandan/目を破れるほど大きくする

چشمهای کسی گرد شدن /češm-hāye kasī gerd šodan/目が丸くなる

چشم کسی چهار تا شدن /češm-e kasī čahārtā šodan/目が四つになる

چشم کسی سفید شدن /češm-e kasī sefīd šodan/目が白くなる

しかし、その中で、「چشمهای کسی گرد شدن /češm-hāye kasī gerd šodan/目が丸くなる」という慣用句のみ、「驚き」という感情を表している。

چشمهای کسی گرد شدن /češm-hāye kasī gerd šodan/目が丸くなる（意識：非常に驚く、びっくりする）

وافور را جلو دخترک گرفت دخترک فوت کرد و دو نفس پی در پی بالا کشید. من و بهروز چشمهامان گرد شد و با تعجب نگاهشان کردیم.

vafūr rā jolo-e doxtarak gereft.doxtarak fūt kard va do nafas-e pey dar pey bālā kešīd.man va behrūz češm-haman gerd šod va bā ta‘ajob negāhešan kardīm.

アヘン吸飲用パイプを小娘に渡した。小娘はふっと吹き消して、連続的に二回吸飲した。私とベヘルーズは目が丸くなって（意訳：非常に驚いて）、彼（彼女）と小娘をまじまじと見つめた。

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』:434）

この例における「目が丸くなる」と日本語の「目を丸くする」は同じ意味で、類似表現である。しかし、日本語の「目を丸くする」の場合は目の持ち主は異常のことに対する意図的に目を丸くする、つまり意図的な行為である。それに対して、ペルシア語の「目が丸くなる」の場合は目の変化は意図によらない不随意的な行為であると思われる。両方の表現では、文字通りの目の形が変わり、丸い感じになるという物理的な行為を通して、「驚き」や「びっくりすること」を示す。すなわち、意味的に同様であるが、日本語では「目を丸くする」は「原因—結果」のメトニミーによって文字通りの意味から慣用的な意味へ転換されたと考えられる。一方、ペルシア語では、「کنایه/kenāye/メタファー」と見なされる。すなわち、「چشمهای کسی گرد شدن/češm-hāye kasī gerd šodan/目が丸くなる」を「目の形が変わり、丸い感じになる」つまり、「معنای نزدیک/ma‘nāye nazdīk/近い意味」は「驚き、びっくりする」つまり、「معنای دور/ma‘nāye dūr/遠い意味」の意味で使用される。しかし、ここでは、「معنای دور/ma‘nāye dūr/遠い意味」が考慮されている。

上記の例と同様に、両言語において、意味的にも、表現的にも類似する表現が散見されるが、これが、全部の慣用句に当てはまるとは言いがたい。例えば、ペルシア語では、上述の日本語の「目が飛び出る」と全く同じ「چشمهای کسی در آمدن/češm-hāye kasī dar āmadan/目が飛び出る」という表現がある。日本語の「目が飛び出る」は「驚いて目を大きく見開く」という意味を表すが、ペルシア語の表現は「嫉む・嫉妬する」ということを表す。つまり、同じ表現で違う意味を持つ。ペルシア語の「目が飛び出る」という例文を通して考察してみよう。

چشمهای کسی در آمدن/češm-hāye kasī dar āmadan/目が飛び出る（意訳：他人の幸運や長所を羨む）

چشمهانشان از حسودی داشت در می آمد.نمی دانی چه چیزهایی سر هم می بافتند!

češm-hāšan az hasūdī dašt dar mī āmad.nemī-dānī če čīz-hāī sar-e ham mī-bāftand!

彼ら/彼女らは嫉妬から目が飛び出そうで、話をでっちあげていた。（直訳）

彼/彼女は嫉妬のあまり話をでっちあげていた。（意訳）

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』:433）

この例文では、「目が飛び出る」は「他人の幸運や長所を羨む」という意味を表している。したがって、「自分より優っていることを憎む」は原因で、その結果が「目が飛

び出る」ような表情の変化である。つまり、「علاقه علیت یا علت و معلولی/alāqey ‘ellyat ya ‘e llato va malūlī/原因－結果」に関わっている「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」と判断される。

### 3. 怒りを表す表現の例

日本語：

目を三角にする（激怒する様の形容）

冗談のつもりが、目を三角にされちゃった。（冗談が通じず、怒られちゃった）

目をむく（怒って目を大きく見開く）

初対面の女性に年齢を聞くんだから、目をむかれるのも当然よ。（失礼だと怒られるのも当たり前だ）

（『分野別・日本語の慣用表現』1992）

「目を三角する」には目が三角のような状態になるという文字通りの意味がある。しかし、その文字通りの意味が抽象化され、「怒って険しい目つきをする」という感情を表す慣用的意味を持っている。これは特定の感情が及ぼす生理的影響はその感情を表すというメトニミーに基づく意味拡張だと考えられる。そして、「目をむく」という表現は「目の表面にかぶっているものをはがし取る」という意味を持ち、そこから、怒って目を大きく見開くという様子を表す慣用句の意味になり、起因関係、メトニミーに基づく感情表現の一種である。この表現では、「目」の生理的な変化の側面を表現することによって、怒りに関する感情が表現されている。

ペルシア語：

『Loqat nāme-ye Dehxodā』『Farhang-e Fārsye Āmīāne』に基づいて、ペルシア語において、「怒り」を表す「目」の慣用句は「چشم غره رفتن/češm qorre raftan/怒りに満ちた目で見える」のみである。

چشم غره رفتن/češm qorre raftan/怒りに満ちた目で見える（意訳：怒りを見せる）

دایم به بجه ها چشم غره می رفت که بجه آب را حرام نکن!

dayem be bače-hā češm qore mī-raft ke bače āb rā harām nakon

ずっと、子供たちを怒りいっぱいの目で見ている（意訳：にらみつけていた）、つまり水を無駄にするな！

（『Farhang-e Fārsye Āmīāne』:429）

上記の例では「چشم غره رفتن/češm qorre raftan/怒りに満ちた目で見える」は文字通りの「怒りいっぱい

し手に後者の意味が意図されているから「کنایه/kenāye/メタファー」の表現であると考えられる。

#### 4. 感動を表す表現の例

日本語：

目頭が熱くなる（感動して泣きそうになる）

久しぶりに恩師にお会いできて目頭が熱くなりました。（うれしくて泣き出しそうになった）

（『分野別・日本語の慣用表現』 1992）

普段、人間は悲しみ・苦しみ・喜び・感激・苦痛を感じたときや外部から刺激を受けたとき、泣きそうになったり、涙出を出す場合もある。涙を流すとき目の中が熱くなり、ヒリヒリする。こういう日常経験に基づく、「目頭が熱くなる」というような表現が作られていると思われる。

上記の例では、「目」の肉体的、生理的なモデルによって、結果である「感動する」という感情の側面が間接的に表現されている。「先生に会う」が原因で、「泣きそうになる」「涙が出る」が結果であり、同時に起こっているので、「時間的隣接に基づくメトニミー」と「原因—結果」に基づくメトニミーである。これが同じ意味で類似の表現である。一方ペルシア語の「چشم کسی گرم شدن/češm-e kasī garm šodan/目が温かくなる」という慣用句が日本語の「目頭が熱くなる」と表現的に、ある程度、似ているが、ペルシア語の表現は「眠りに入る最初の瞬間」という違う意味を表している。<sup>14</sup>感動し、泣き出すことを表す表現は『Loqat nāme-ye Dehxodā』によれば、「آب در چشم آمدن/āb dar češm āmadan/目に水が来る」という表現である。しかし、古い表現で、現代ペルシア語の日常会話ではあまり使用されないが、意味的に、日本語の「目頭が熱くなる」とほとんど同じである。

ペルシア語：

آب در چشم آمدن/āb dar češm āmadan/目に水が来る（意訳：目に涙が溢れる）

اگر صد نوبتش چون قرص خورشید ببینم ، آب در چشم من آید

agar sad nūbataš čon qors-e xoršīd bebīnam, āb dar češm-e man āyad

毎日、太陽を見るように、彼/彼女に会ったとしても 毎回、目に水が来る（意訳：感動して泣きそうになる）

（『Loqat nāme-ye Dehxodā』）

<sup>14</sup> 「چشم کسی گرم شدن/češm-e kasī garm šodan/目が温かくなる」を「睡眠」を表す「目」の表現に関するところで分析する。

この詩の対句では「آب در چشم من آید/ āb dar češme man āyad/目に水が来た」という表現は「現実的」つまり、「実際に水が目に入る」と「比喩的」つまり「目に涙が溢れる/泣きそうになる」の両方の意味があるが詩人や話し手が後者の意味を考慮し、「کنایه/kenāye/メタファー」の表現であると考えられる。

## 5. 寛容を表す表現の例

日本語：

目をつぶる（見逃す）

これくらいの失敗には目をつぶってやろう。（失敗を見逃す）

（『大辞泉 第一版』1995）

上記の例では「目をつぶる」は二通りの意味を持つ。字義通りには動作の意味、つまり「まぶたを閉じる」という意味があり、慣用的には「見ないことにする、我慢する、あきらめる」という比喩的な意味がある。この場合、「目をつぶる」という動作を手段として、「対象、すなわち、失敗を見ないことにする」という目的を果たすということである。これは「手段－目的」に基づくメトニミーの一種である。

ペルシア語：

一方、ペルシア語では「چشم پوشی کردن/češm pūši kardan/目を覆い隠す（意識：見逃す）」  
「چشم خود را هم گذاشتن/češm-e xod rā ham gozāštan/目を閉じる（意識：見逃す、寛容）」という慣用句がある。

چشم پوشی کردن/češm pūši kardan/目を覆い隠す（意識：見逃す）

از اشتباهات همسر خود چشم پوشی کنید.

az eškebāhāt-e hamsar-e xod češm pūši konīd.

配偶者の過ちに目を覆い隠そう。（直訳）

配偶者の過ちを見逃そう（意識）

（「Simāye Xānevāde」）

چشم خود را هم گذاشتن/češme xod rā ham gozāštan/目を閉じる（意識：見逃す）

می دانی مراد؟ همه من را می چا‌پند. من چشمم را هم می گذارم، نادیده می گیرم.

mīdānī morād? hame man rā mī-čāpand. man češmam rā ham mī-gozāram, nādīde mī-gīram.

分かるモラード？皆、私（の財産）を略奪する。（だけど）私、目を閉じって（意識：見逃して）、無視する。

（『Farhang-e Farsye Amīāne』：427）

上記の二つの例において、「چشم پوشی کردن/češm pūši kardan/見逃す」「چشم خود را هم گذاشتن/češm rā ham gozāštan/目をつぶる」という表現では、構成語の「目を閉じる」の意味も「過失・

欠点などを見ないふりをする、見逃す」という慣用的な意味がある。しかし、話し手は後者の意味を考慮しているから文字通りの意味を通して、慣用的な意味を表現する。そこで、「کنایه/kenāye/メタファー」の表現であると考えられる。

## 6. 軽蔑、憎しみや嫉妬を表す表現の例

日本語：

白い目で見ると（冷淡な、または憎しみのこもった目つきで見る。）

犯人の家族を、白い目で見るとのは良くない。

以上の例では、「目」の肉体的な兆候や変化が文字通りに叙述されている。すなわち、身体部位としての基本義が保持されている。そして、他の構成要素と組み合わせられ、句全体で意味が決まると考えられる。「目」の肉体的、生理的なモデルにより、感情の側面を間接的に表現するという（原因—結果）メトニミーに基づいて意味が拡張されている。

ペルシア語：

ペルシア語でも、「目」で「憎しみ」を表す「چشم دیدن کسی را نداشتن/češm-e dīdan-e kasī rā nadāštan/人を見る目がない（意訳：人を憎む）」という慣用句が見当たる。この表現を日本語に直訳すると「人を見る目が無い」になり、表現的に日本語の「目が無い」に類似するが、意味的に日本語の表現と全く異なり、「誰かや何かに嫉妬や憎しみを持ち、見たくなくなる」ということを表す。その例として、

چشم دیدن کسی را نداشتن/češm-e dīdan-e kasī rā nadāštan/人を見る目がない（意訳：人を憎む）

اروپاییها چشم دیدن اتحادیه را ندارند.

orūpāi-hā češm-e dīdān-e etehādye rā nadārand.

ヨーロッパは（ヨーロッパ）連合を見る目が無い（意訳：憎んでいる）

（「Hamšahri On Line」 2013.05.14）

上例における「چشم دیدن کسی را نداشتن/češm-e dīdan-e kasī rā nadāštan/人を見る目が無い（意訳：憎んでいる）」という表現は、「目」が身体部位で、「見る」ための「手段」であり、手段や道具の「علاقه/’ alāqe/理由/関係/関係の理由」の「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」に基づいて意味拡張した結果生じたものである。

### 3.2.2 視覚機能の側面

「目」の慣用句は、その派生義の側面についていえば、ほとんど「目」の機能や「見る行為」に関するものである。「見る行為」（視知覚行為）という事象の生じる場面には、眼力、視線、まなざしなどの不可欠な構成要素が参加する。次の例は、「目」の機能や

「見る行為」のそれぞれの要素が参加する慣用句の意味拡張の様子を描くものである。

## 1. 視線を表す表現

視線というのは視覚機能を実現するのに一つの欠かせない要素である。「視線は知覚主体と対象とを結ぶ直線経路と、その経路上に生じる視知覚行為のプロセスとを一つの実体として捉えた概念である」(田中、2001、p・67)と定義されている。

田中の定義に基づいて日本語とペルシア語では次のような慣用表現は視線の様子を描くものである。

### 日本語：

「目が合う」「目が物を言う」「目が<sup>ゆ</sup>行く」「目が行き届く」「目で追う」「目に懸ける」  
「目のやり場に困る」「目も当てられない」「目もくれない」「目を射る」「目を奪う」「目を落とす」「目を掠める」「目をきわむ」「目を下す」「目を配る」「目をくれる」「目を据える」「目を注ぐ」「目をそむける」「目を逸らす」「目を転じる」「目を盗む」「目を離す」「目を引き付ける」「目を引く」「目を伏せる」「目を向ける」「目を遣る」など。

### ペルシア語：

「چشم انداختن/češm andāxtan/目を投げる(意識：視線を向ける、目をやる)」「چشم پلکندن/češm pelekandan/目を回す(意識：目をやる)」「چشم تو چشم شدن/češm tū češm šodan/目が合う」「چشم خود را ندیدن/češm-e xod rā dozdīdan/目を盗む」「چشم خود را دوختن/češm-e xod ra dūxtan/目を縫う(意識：じっと見つめる)」「چشم کسی افتادن به/češm-e kasī oftadan be/～に目がとまる」「چشم کسی افتادن توی چشم کسی/češm-e kasī oftadan be češm-e kasī/人と目が合う」「چشم کسی خوردن به/češm-e kasī خوردan be/目にとまる」「چشم کسی را دور دیدن/češm-e kasī ra dūr dīdan/人の目が遠く見られる(意識：人やあることの関係者がいないうちに自分の好きな通り何らかのことをやる)」「چشم گرداندن/češm gardāndan/目を回す」「چشم کسی به چیزی بودن/češm-e kasī be čizi būdan/何かに目がある(意識：何かが気に入り、ずっとそのものを欲しいという感じ)」「چشم بر نداشتن/češm bar-nādaštan/目を取らない(意識：じっと見つめる)」など。

### 目が行く

つい欲しい物に目が行く。

(『大辞泉 第一版』 1995)

「目が行く」という慣用句は、あるものに心が引かれ、視線を向けることを表す。ペルシア語の慣用句の中で、この慣用句に当てはまるのは「چشمهای کسی دویدن/češm-hāye kasī davīdan/目が走る」という表現であり、両方とも「あるものに対しての欲の深いこと」を表し、同じ意味で類似の表現であると思われる。

چشمهای کسی دوید/češm-hāye kasī davīdan/目が走る（意識：ものに対して欲が深いこと）

پیوسته چشمهایش می دوید و آرواره هایش می جنبید و شکر خدا را می کرد که این همه نعمت آفریده و معدۀ قوی به او داده.

peīvaste češm-hāyaš mī-davīd va ārvāre-hāyaš mī-jonbīd va šokre xodā mī-kard ke īn hame ne' mat āfarīde va me' deye qavī be ūo dād-e.

常に、目が走って、顎が動きながら（何かを噛みながら）色々な恵みと強い胃を与えてくださった神様に感謝していた。（直訳）

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』:433）

両方の慣用句では、「目」は「視線」の意味を担い、「行く」「走る」ことができ、ものに触れたり、追いかけてもできるものとして、単なる「視覚器官」とは区別されている。これは「目」の「見る」機能に基づいてできたものである。日本語の場合は「目」と「視線」の関係は「部分—全体」のメトニミーに基づいている。しかし、ペルシア語の表現は「اسناد مجازی/ esnād-e majāzī/主体と動詞あるいは形容詞と形容詞で修飾された（名詞）の不自然な関係」である。なぜなら、確実に、「目」の機能は「見る」ことであり、「走る」ことができない。したがって、「走る」という行為と「目」との関係が不自然である。

### 目を盗む

釈放後、当局の目を盗み、夕闇に叫ぶ民衆を超高感度でとらえた。

（『朝日新聞、天声人語』2010.6.13）

「目を盗む」という慣用句は、人の視線を阻止し、見つからないようにこっそり行動するという意味を表す。ペルシア語にも「چشم خود را نزدیدن/češm-e xod rā dozdīdan/自分の目を盗む」という表現があるが、意味的に若干異なっている。つまり、表現は似ているが違う意味を表す。

両方の表現では「目」は「視線」を表すが日本語では「部分—全体」のメトニミーと見なされ、ペルシア語では「استعاره تبعیه/este'āre tabaīye/追隨メタファー」として認められている。

چشم خود را نزدیدن/češm-e xod rā dozdīdan/自分の目を盗む（意識：見ていないふりをする）

مرا دید. نتوانستم چشمم را بزدیم. به هم نگاه کردیم.

marā dīd. natavānestam češm-am rā bedozdam. be ham negāh kardīm.

（ある人が）私を見たが、私は自分の目を盗む（意識：見ていないふりをする）ことが

できず、お互いを見つめ合ってしまった。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:427)

日本語の表現では「人の視線を阻止し、見つからないようにひそかにする」という意味であるのに対して、ペルシア語の表現は「盗む」は「だれかあるいは何かを見ていない振りをして、自分自身の視線を他の方向に向けさせる」という意味を表す。「盗む」と「見ていないふりをする」という「行為」の間に、「速さと瞬間でやる」という類似性に基づいて、この表現の意味が拡張され、「استعاره تبعیه/este‘āre tabaīye/追隨メタファー」であると考えられる。

**目を落とす**（視線を下の方にあるものに向ける）

私の人生は（中略）、あなたが封を切って最初の文字に目を落とすになった瞬間、再びいきいきと燃え上がり…

(『慣用句の意味と用法』: 220)

**目をやる**（そちらの方を見る。視線を向ける）

南へ目をやると富士山が白い。

(『朝日新聞、天声人語』2009.11.23)

上記の「目を落とす」と「目をやる」では、視線がある対象やある場所に届く様子が表現されている。ペルシア語でも「چشم انداختن/češm andāxtan/目を投げる（意識：視線を向ける、目をやる）」と「چشم پلکاندن/češm pelekandan/目を回す（目をやる）」という慣用句がある。

**چشم انداختن/češm andāxtan/目を投げる（意識：視線を向ける、目をやる）**

می خواستم ببینمت،دلم برایت تنگ شده بود...هر چه در کوجه مان چشم انداختم تو را ندیدم.

mī-xāstam bebīnamat,delam barāyat tang šod-e būd...har če dar kūče-mān češm andāxtam to rā nadīdam.

非常に君のことが恋しくて会いたかった....いくら路地に目を投げても（意識：目を向けても）、あなたを見つけられなかった。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:425)

**چشم پلکاندن/češm pelekandan/目を回す（意識：目をやる）**

هر چه چشم پلکاندم و اطرافم را پاییدم بلکه یک بچه بلیت فروش پیدا کنم و از او بلیتی بخرم پیدا نکردم.

har če češm pelekandam vā atrāfam rā pāīdam balke yek bače belit forūš peīdā konam va az ū belīt-ī bexaram peīdā nakardam.

切符を買おうと思い、切符の売り子を見つけようと、その周りにいくら目を回しても（意訳：目をやっても）見つけられなかった。

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』:426）

ペルシア語の「چشم پلکاندن/češm pelekandan/目を回す（意訳：目をやる）」は日本語の「目を回す」と類似する単語が使用されているが、ペルシア語の表現の意味は日本語の「目をやる」「目を向ける」と類似し、「あちこちの方向を見る」という意味を表す。それぞれの例の共通点は「目」が「視線」を表すことである。前述したように、目の視覚機能が実現されるように、様々な要素が参加し、「視線」がその一つの大事な要素である。

日本語の上記の例では「視線」を表すには「目」に焦点が当てられ、その部分のみが表現されている。そこで、「視線」と「目」の関係は「部分—全体」のメトニミーに基づく意味が拡張している。一方、ペルシア語の例では「目」は「投げると回す」ことができるものに例えられ、その「動き」の類似さに基づいて、意味が拡張されていると考えられる。そこで、ペルシア語の表現は「استعاره/ este‘āre/メタファー」であると思われる。

## 2. 眼力を表す表現

眼力というのは物体の位置・形状などを分離し、物事の真偽・善悪を見分ける力である。つまり、人間の一般的な眼力は、物事の正邪・成否・真相などを見抜く能力のことである。

目のこの機能に基づいて、様々な慣用表現が生まれてきている。例としては、「目がある」「目が利く」「目が眩む」「目が肥える」「目が高い」「目が無い」「目をくramsす」「目を肥やす」「目を見る」「目がいい」「目が弱い」「目が悪い」など。次の例文では「目」が「眼力」を表現している。

日本語：

目が高い（よいものを見分ける能力を持っている）

これをお選びになるとは目が高い。

（『大辞泉 第一版』 1995）

目が肥えている（いいものを見馴れてその価値を見抜く力ができる）

奥様はさすがに目が肥えていらっしゃるから着物の趣味がよろしいですね。（見分ける力があるので、品のいい着物を着ている）

（『分野別・日本語の慣用表現』 1992）

目が利く（見分ける力が優れている。鑑識力がある）

あの人は美術品には目が利きます。（美術品の価値がよくわかる）

以上の慣用句には、「眼力」という「目」の一つの機能に焦点が当てられ、その部分のみが表現される。そこで、「眼力」と「目」は「部分—全体」という関係のメトニミーに基づく慣用表現であると考えられる。

ペルシア語：

ペルシア語でも、「眼力」を表す「چشم کسی کیمیا بودن/češm-e kasī kīmīya būdan/錬金術の目を持つ（一目でよいものと悪いものを区別する能力を持つ）」という表現がある。

چشم کسی کیمیا بودن/češm-e kasī kīmīyā būdan/錬金術の目を持つ（意識：一目でよいものと悪いものを区別する能力を持つ）

این یک چارک آلو بود؟...این یک چارک آلو نبود،من دیگر چشم کیمیاست.

īn yek čarak ālū būd?...īn yek čarak ālū nabūd,man dīgar češm-am kīmīāst.

これが750グラムのプラムなの？これが750グラムじゃないよ！私の目はもう錬金術だよ。（錬金術の目を持つ）（直訳）

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』:432）

ペルシア語の上記の例における「錬金術の目を持つ」は「اسناد مجازی/esnāde majāzī」である。なぜなら、「錬金術の目を持つ」は現実では不可能なことで、「主体」と「動詞」の関係は「仮想的」からである。

### 3. 視界を表す表現

視界というのは主体の視覚機能の及ぶ範囲である。すなわち、一定の位置から見通すことのできる範囲が視界あるいは視野である。「視界」も「見る行為」のもう一つの要素である。田中（2001）によれば、視界には二つの側面がある。一つは範囲という空間的な側面である。すなわち、視覚主体と対象とを結ぶ直線経路である視線のすべての線が集まると空間になる。つまり、視覚の及ぶ範囲が「視界」である。もう一つはスクリーン（画面・画像）として「視界」を表す側面である。

「視界」を表す表現として、「目に入る」「目に映る」「目に浮かぶ」「目に留まる」「目にも止まらない」「目に立つ」などがある。

日本語：

目に浮かぶ

楽しげに舞う姿を目に浮かべれば、その五感にひざをうつ。

乳白色に煙る里山が目に浮かぶ。

(『朝日新聞、天声人語』 2010.3.6/2011.7.20)

上記の日本語の例文では「目に浮かぶ」は実際に目の眼前に舞う姿、煙る里山が存在するのではなく、頭の中に存在するかのように描き出され、見ているように想像するという慣用句の意味を表すようになる。つまり、視覚的イメージを想像することである。

「浮かぶ」とは、空中に浮いているのかのように目の前や表面に現れることをいう。ここから、目に浮かぶことはその時の姿やさまが目の内に再現されるという文字通りの意味になる。「目の前に再現する」という共通点に基づいて、「目に浮かぶ」は文字通りの具体的な意味から「実際に見えない物事が頭の中に思い描かれる」という抽象的な意味を表すようになる。この慣用句はメタファーによって「目に浮かぶ」という句全体の意味が決まってくる。前述したように、このような表現では「目」はメタファーによって「容器」として把握され、客観世界にあふれている情報、人間の情報などはその容器に入ることができる。

### 目につく

届いた年賀状には、丑年（うしどし）のせいか、「ゆったり」「マイペース」などを誓う一言が目についた。

韓国の大統領には無残な末路（まつろ）が目につく。

(『朝日新聞、天声人語』 2009.1.3/2009.5.24)

以上の例文では「目につく」は「よく見える、見て忘れられなくなる」という慣用句としての意味を持つ。この表現では「つく」は本来ぴったりと沁みついて離れない状況になるという意味を持つ。ここでは、「あるものがほかのものにつく」という見えることを通して、目に見えない「誓う一言」や「無残な末路」が視界に定着することを表している。両方の概念の間に「離れない」という共通点に基づいてメタファーが生まれ、目が物事を見る働きを持ち、「目」の身体的な経験に由来していると思われる。また、視線の対象となった物事が目に付いて離れなくなり、注意や関心が生じるという状態を表している。

### 目に入る

近くの公園を歩くとささやかな黄色が目に入る。

「この紋所が目に入らぬか」以下の大団円は微動だにしない。

(『朝日新聞、天声人語』 2009.1.21/2011.8.4)

以上の二つの例文における、「目に入る」という表現とは「何かが物理的に目に入る」という字義通りの意味と「何かが視界に入る」という比喩的な意味を持つ。「入る」という動詞は、「何かが外から中に移り、すっかりおさまる」という意味を持つ。ここでは、目に見える「あるものがほかのものの中に入る」ことを通して、目に見えない「黄色や紋所が目に入る」ことを表している。字義の意味から「移って入る」という共通点に基づくメタファーによって、慣用句の意味が発生したと思われる。

また、「黄色」と「紋所」という対象が「視界」に入り、その対象に関する情報、すなわち、目がその対象の形、光、色、サイズという信号を知覚に発し、容器としての体に留まることも表している。

#### ペルシア語：

ペルシア語でも次のような表現が「視界」を表している。「از چشم افتادن/az češm oftadan/目から落ちる（意識：信頼が崩れる）」「به چشم زدن (یا خوردن)/be češm zadan (yā xordan)/目にとまる」「به چشم کسی خوردن/be češm-e kasī xordan/人の目にとまる」「تا چشم کار می کند/tā češm kār mī-konad/目が働いているまで（意識：目が見る限り）」「توی چشم خوردن/tūye češm xordan/目にの中に当たる（意識：何かが確実に見られる）」など。次の文章は「به چشم کسی خوردن/be češm-e kasī xordan/目に当たる（目にとまる）」の例である。

#### به چشم کسی خوردن/be češm-e kasī xordan/目に当たる（意識：目にとまる）

این اولین بنفشه ای بود که در آن بهار به چشم ملکه خورده بود.

īn avalīn banafše-ī būd ke dar ān bahār be češm-e malake xord-e būd.

その春で女王の目に当たった（意識：目にとまった）最初のスマイルはこれだ。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:435)

「به چشم کسی خوردن/be češm-e kasī xordan/目に当たる（意識：目にとまる）」という表現を日本語で直訳すると「目に当たる」となるが上記の例文からもわかるように、「見る/目にとまる」を意味する。

この表現では「目に当たる」の「معنای نزدیک/ma'nāye nazdīk/近い意味」で、「見る/目にとまる」は「معنای دور/ma'nāye dūr/遠い意味」であり、「کنایه/kenāye/メタファー」の表現であると考えられる。

### 3.2.3 その他

#### 1. 注意・関心を表す表現

日本語の「目を注ぐ」「目が離せない」「目を懸ける」「目を配る」「目が届く」「目を引く」「目を留まる」など、ペルシア語の「چشمهای کسی را باز کردن/češm-hāye kasī rā bāz kardan/

人の目をあける（意識：事実に注意させる）」「دو تا چشم داشتن دو تاي ديگر هم قرض گرفتن/ do tā češm dāštan do tāye dīgar ham qarz kardan/二つの目を持って、別の二つ目も借りる（意識：非常に注意し、監督する）」「چشم بر نداشتن/ češm bar-nadaštan/何かや誰かをじっと見つめる（意識：注意を引く）」「چشم کسی را پر کردن/ češm-e kasī rā por kardan/人の目をいっぱいにする（意識：関心を引き付ける）」「چشم کسی را گرفتن/ češm-e kasī rā gereftan/人の目をとる（意識：注意を引かれる）」などが、全体として認識主体が認識対象に「注意・関心を向ける」という比喩的な意味を表している。<sup>15</sup>

#### 日本語：

目を引く（注意を引き付ける。他人の注意を向けさせる）

商品名以上に消費者の目を引くという知財高裁の結論は、信じたデザインを使い通す企業への敬意でもあろう。

（『朝日新聞、天声人語』2010.11.22）

目を配る（四方に注意を向ける）

そのリーダーは仲間の一人一人にきちんと目を配っている。

（『分野別・日本語の慣用表現』1992）

目を掛ける（注目する、親切に助力や世話をする）

山好きな村山少年に目をかけ、自宅へ招いてくれたそうだ。

（『朝日新聞、天声人語』2010.6.20）

目が離せない（常に注意・監督をしていなくてはならない）

最近の株価の動向は目が離せない。

（『大辞林』 2006）

上記の全体として「視線をある対象に向ける」という意味を表し、「視線」と「目」は「部分—全体」という関係のメトニミーとして分類できる。そして「目（視覚）」という意味から「注意・関心をある対象に向ける」意味へと転じ、さらにメタファーによって表現全体として抽象的な意味へと拡張したと考えられる。

その応用範囲の広さから、〈注意・関心〉という概念は、単に複合形式の中に固定された意味という以上に、「目」の語義となっていると考えてよいであろう。

#### ペルシア語：

<sup>15</sup> 3.3. 2の節の「視線」のところで、述べたように、あることに注目したら、視線がその対象に引かれる。すなわち、「注目」と「視線」の間に直接な関係があると考えられる。そこで、「目」の慣用句の中で同時に「視線」と「注意」を表している慣用句が少なくない。

do tā češm daštan do tāye dīgar ham qarz kardan/ 二つの目を持って、別の二つ目も借りる（意識：非常に注意し、監督する）

تو باید دو تا چشم داری دو تای دیگر قرض بکنی، هوایشان را داشته باشی.

to bayad do tā češm dārī do tāye dīgar ham qarz bokonī, havāšān rā dašt-e bāšī.

君は二つの目を持ち、他の二つの目も借りて、彼ら/彼女らにじっと注意を注ぐべきだ。  
（直訳）

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』:436）

「do tā češm daštan do tāye dīgar ham qarz kardan/ 二つの目を持って、別の二つ目も借りる」という表現は「非常に注意し、監督する」を意味している。「目を借りるのは」現実では不可能なことであるが、「注意が必要である」ことを強調するために、仮想的に使用されている。そこで、この表現は事実に基づいていないから「اسناد مجازی/esnāde majāzī/偽りに、何かを何かに帰する」の表現であると考えられる。

## 2. 睡眠を表す表現

「目」という身体部位は、「睡眠」という生理的な現象とも関係している。人間の生活経験では、一般に、体の動きと活動を休止し、外的刺激に対する反応が低下すると共に、目が閉じられ、睡眠状態に入る。そして、体に必要な睡眠量を取ったら、意識を働かせ、はっきりした状態になり、目を覚ますことになる。こういった生活経験に基づいて、様々な慣用句が生じている。

「目が冴える」「目が堅い（子供などが夜更けても眠たがらない）」「目の皮がたるむ」「یک چشم کسی گرم شدن/目が温くなる（意識：眠りに入る瞬間）」「یک چشم خواب و یک چشم بیدار/yek češm xābo yek češm bīdār/一つの目が眠る、一つの目が覚める（意識：寝ていて熟睡に入る前）」「چشم به هم گذاشتن/چشم به هم گذاشتن/目を瞑る」などが日本語とペルシア語における睡眠に関わる慣用句の例である。

### 日本語：

目が堅い（（子供などが）夜がふけても眠たがらない）  
今夜はこの子は目が堅い。

（『日本語大辞典 第二版 第十二巻』 2001）

上記の例の「目が堅い」は本来、「夜がふけても眠たがらない」ことを表す。ここでは、「堅い目」を持つ子は「簡単に目を閉じらない」という隣接性に基づくメトニミーに成立していると考えられる。

### ペルシア語：

چشم به هم گذاشتن/چشم به هم گذاشتن/目を閉じる（意識：眠る）

ر عنا تا صبح چشم به هم نگذاشته و بالای سر بابام بیدار نشسته.

ranā tā sobh češm be ham nagozašt-e va bālāye sar-e bābām bīdār nešast-e.

ラーナは朝まで目を閉じず、お父さんの世話をしている。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:426)

上例では「目を閉じる（閉じらない）」は「眠る」という意味を持っている。しかし、「目を閉じる」には「まぶたを閉じる」という文字通りの意味と、「眠る」という慣用的意味があり、両方の意味で使用される。ここでは、その文字通りの意味を通して、「眠る」という意味が理解されるから、「目を閉じる」は「کنایه/kenāye/メタファー」であると考えられる。

### 3.3 まとめ

本章では、日本語の「目」とペルシア語の「چشم/češm・čašm/目」の意味を「基本義」と「派生義」の2種類に分け、それぞれの例を提示しながら考察した。両言語では、意味拡張に関わるそれぞれの認知プロセスによって、形状、位置、形状やの類似性や機能の隣接性に基づいて拡張している。例として、「睡眠（うたた寝）の単位」を表す「目」の派生義の場合は、「目」と「睡眠」の隣接性や関連性つまり、メトニミーに基づいてその意味が拡張され、基本義的な意味と派生的な意味が体系的に関連付けられている。また、「ペルシア文字における形状が目 に似たもの：(و: vāv) (ف: fā) (ق: qāf) (ه: he)」のような場合は「目」と「(و: vāv) (ف: fā) (ق: qāf) (ه: he)」という文字の類似性に基づく「استعاره/este 'āre/メタファー」による意味の拡張が成立している。

そして、具体的な事例を通して、両言語の「目」に関する慣用句とそれと対照するペルシア語の「目」慣用表現意味拡張の考察を行った。多義的な意味がある「目」の意味を分析する方法としては、「目」の意味を「身体部分」の側面と「機能」の側面、そして、この二つの範疇に含まれないその他のものに分け、その慣用句の意味拡張を考察した。その結果として、次のことが明らかになった。

この章で提示した事例を見れば分かるように、日本語の「目」に関する慣用句では、メトニミーによる意味拡張がほとんどであるのに対して、ペルシア語ではメトニミーによる意味拡張が少なく、「کنایه/kenāye/メタファー」、「استعاره/este 'āre/メタファー」による意味拡張が多く見られる。また、両言語における表現の構成用語は類似的であったとしても、日本語ではメトニミー、ペルシア語ではメタファー、又は、ペルシア語ではメトニミー、日本語ではメタファーと見なされるケースもあった。例として、両言語の「目を盗む」と「چشم خود را نزدین/češm-e xod rā dozdīdan/（自分の）目を盗む」という表現の構成用語は同じであり、両方の表現では「目」は「視線」を表わす。しかし、日本語では「部分—全体」のメトニミーと見なされ、ペルシア語では「استعاره تبعیه/este 'āre tabāīye/

追随メタファー」)として認められている。

## 第4章：日本語とペルシア語の「手」を含んだ慣用句の対照

### 4.1 「手」の意味分析

日本語の話者の実言語運用の調査の結果に基づいて、「目」の後で最も使用率が高かったのは「手」という身体語彙に関する慣用句であり、全体の18.22%を占めている。

「手」といった語は、一見、人の両肩から分かれて出ているという身体部位を示すものであることに違いはない。しかし、具体的に「手」が、どの部分を指しているかは、文章や発話によって違いがあるのが普通である。例としては次の文章を見てみよう。

1. 左手で鞆をもって右手でドアを開けた。
2. 両袖に手を通して掛けると、体に密着する。

3. پدر دِستش را روی شانه پسرش گذاشت و از او پرسید من قوی تر هستم یا تو؟

pedar dast-āš rā rūye šāneye pesarāš gozāšt va az ū porsīd man qavī-tar hastam yā to?

お父さんは、手を息子の肩に掛け、私とあなた、どちらがより強いんだと聞いた。

(「Sīmāye Xānevāde」)

4. صدای بوق خودروهای مخالفان که دست خود را به علامت پیروزی بالا برده اند، خیابانهای شهر را پر کرده است.

sedā-ye boūq-e xodro-hāye moxālefān ke dast-e xod rā be ‘alāmat-e pīrūzī bālā borde-and, xīābān-hāye šahr rā por kard-e ast.

V サインの手を大きく挙げた反体制派たちの車のクラクションが通りで鳴り響いていた。

(「Sīmāye Xānevāde」)

上記の例文1と3では、「鞆を持つ」と「肩を掛ける」のは手の「手首から指先までの部分」であるが、2と4の例では、袖を通すや挙げるという動作は「手首から先の部分」だけではなく、「肩から指先までの部分」すなわち、手の全体をその範囲とし、1と3における「手」とは同様ではない。そこで、「手」に関する慣用句の意味拡張を考察する際に、その指示範囲を明らかにするのは欠かせないことであると思われる。

次にまず、日本語とペルシア語の各辞書を参考にし、「手」の基本的意味と派生的意味が辞書でどのように記述されているかを見てみよう。

#### 4.1.1 日本語の場合

##### 【「手」の基本義】

『日本語国語大辞典(第2版)』(2001)は「手」について次のように語義を示している。

1. 人体の上肢。軀幹の上部で、肩から左右に分かれ出ている部分。肩の関節部から指

先までの部分。

2. かいな、うでと区別して、てくびから先の部分。その全体だけではなく、指、てのひらなど部分を漠然とさすこともある。
3. ヒト以外の動物の前肢。前足。また、植物のつるなどをもいう。

また、『日本語大辞典 第二版』(1995)において「手」の定義は以下の通りである。

1. 手首から、先の部分。手背(手の甲)、手掌(てのひら)、手指からなる。ものを持ちったり、握ったり動かしたり、作ったりなどする。
2. 人体の、肩から先の部分。腕。
3. てのひら。

『大辞林 第三版』(2006)に「手」の基本義は、「人体の肩から先の部分。手首・てのひら・指先などをさすこともある。また、動物の前足をいうこともある」と書いてある。

そして、『広辞苑 第六版』(2008)における「手」の基本義の意味分類は次の通りである。

人体の左右の肩からでた肢。

1. 肩から指先に至る間の総称。
2. 手首
3. 手のひら
4. 手の指

以上の定義から見ると、「手」の基本義はほぼ同じ示しており、「人体の肩から、指に至るまでの部分」すなわち、具体的な身体部位いを指すものといえる。しかし、その意味から様々な抽象的な意義が派生し、意味拡張している。以下では、「手」の派生義を示す。

## 【「手」の派生義】

まず、『日本語国語大辞典』『日本語大辞典』『広辞苑』『大辞泉』『大辞林』『明鏡国語辞典』といった辞典を参考した上で、日本語の「手」の派生した主要な諸意味を次のように分類、整理する。

### <名>と<接頭>

#### 1. 人体の手のように突き出ている。

- ・器物の左右に分かれた部分。又、器物の取っ手「鍋の～」 「急須の～」
- ・植物の蔓などをからませるための竹や木の棒など「竹をアサガオの～にする」
- ・几帳などの横木
- ・ほのお「火の～が上がる」「水の～」
- ・幕などの乳を通してかけ渡す網「網の手」
- ・長旗のへりについている、竿<sup>さお</sup>につけるための緒<sup>お</sup>

- ・<sup>かりまた</sup>雁股の矢じりの左右に突き出た部分。

## 2. 人体の手のように作業や仕事を行うもの

- ・労働力。働く人・力。人手「～が足りない」「～に職を持つ」「猫の～も借りたい」
- ・部下。配下「～の者」
- ・分担する人・その動作をする人、また特に、そのことに優れた人の意を表す「嫁のもらい～」「語り～」「やり～」「踊り～」「読み～」
- ・くみ。隊

## 3. 手を動かしてすること。

- ・所有。所持。持つこと。保持すること。「大金を～にする」「人の～に渡る」
- ・手で文字を書くこと。筆法。転じて書かれた文字。筆路。書跡「綺麗な～」「人の～をまねる」「～習い」
- ・技量。腕前「～が上がる」
- ・方法。手段。手立て。また策略。相手に勝つわざ「きたない～を使う」「その～に乗らない」「～の付けようがない」
- ・仕事やことを処理する能力「～職を持つ」「～に余る」
- ・手数。手間。世話「～の込んだ作品」「この子は甘えん坊で～がかかる」「～ばかり掛かる」
- ・日本音楽で、(節<sup>ふし</sup>に対して) 楽器の演奏。また、その調子や拍子をとる方法。「古い味線曲に箏の～付ける」「合いの～」「～事」
- ・関わりあうこと。交際。関係

## 4. 手で指すもの。

- ・ある方面・方向・方角・側面「山の～」上～「右～の建物」「行く～をさえぎる」
- ・ある特定の種類のものやある種類に属する人やもの。また、ある手法・技法によるもの。「その～の話には気を付けろ」「この～の品」「厚～の生地」
- ・人品。風采

## 5・自分の手

- ・手前。自分
- ・その物事を機械などを用いなくて作る・人が自ら手を下してすること。「～づくり」「～弁当」「～料理」
- ・その物が、持ち運びや取扱いに容易な小型のものである意を表す。「～斧」「～帳」「～箱」

## 6. 技芸などの一定の型

- ・囲碁・将棋・相撲などで、石や駒を打つこと。また、その攻め方・受け方  
「～のない将棋は負け将棋」「五～先を読む」「堅い～で攻める」
- ・舞や踊りの所作「さす～引く～」
- ・トランプ、花札、勝負事などで、手中にあるもの。手持ちの札・駒など。手の内。  
「～を明かす」「相手の～を読む」

## 7. 人が手を使って様々な事をする。また、人の行為を漠然という

- ・仕事。作業「裁縫の～を休める」
- ・他人に関与すること「～出し」
- ・武器を使って傷つけること。転じて、戦いなどで受けた傷「～争い」「深～」

## 8. ある方面に配置した軍隊

「寄せ～の軍勢」

## 9. 支配下・監督下（にあるもの）

「犯人の～から人質を救う」「平家の～の者」

## 10. 人との結びつき・つながり

「～を切る」

## 11. 代金・代償「酒～」

## 12. 江戸時代の雑税の一。山手・野手・河手の類。

## 13. 茶器などで、その手法になるもの「三島～の茶碗」

## 14. 武芸などの技。「相撲の四十八～」

## 15. 風采。体裁。

## <接尾>

### 助数詞

1. 囲碁や将棋などで石や駒を動かす回数を数えるに用いる。「三～で詰む」「数～先をよむ」

2. 矢二筋を一組として数えるのに用いる。「的矢一〜」
3. 相撲の番数を数えるに用いる。「相撲出でて五〜、六〜ばかりとりて」「宇津保・俊陰」
4. 舞の数を数えるのに用いる。「一〜舞うて東の方の賤しき奴ばらに見せん」「義経記・八」

#### 4.1.2 ペルシア語の場合

ペルシア語の場合は、日本語の「手」に対応するものとして、「دست/dast/手」いう言葉である。本節では、ペルシア語の「دست/dast/手」の基本義と派生義を『Farhang-e Moīn』『Loqat nāme-ye Dehxodā』『Farhang-e Fārsye Amīāne (ペルシア語俗語大辞典)』『Farhang-e Amīd』といったペルシア語辞典を参考にした上で、次のようにまとめる。

##### 【「دست/dast/手」の基本義】

- ・両肩から分かれ出て、腕から指先までの部分を含む
- ・両肩から指先までの部分
- ・人体の腕より、手のひら、手の甲、指、手首を含む部分
- ・人体の上肢。手の甲、手首、手指、手のひら、肩や腕も含む部分
- ・四足獣の前足

以述の辞典を用いて、ペルシア語の「手」の基本義を整理した。ペルシア語の「手」は「肩から指先まで」という上肢全体を示す意味があり、その基本的な意味は日本語とペルシア語はほぼ同義であるといつてよいと思われる。

##### 【「دست/dast/手」の派生義】

#### 1. 袖、袂

دستهایش را زده بود بالا و لباس کار تنش بود و چمن را متر می کرد.

dast-hāyaš rā zad-e būd bālā va lebās kār tanaš būd va čaman rā metr mī-kard.

袖をまくり上げ、仕事着を着て芝生を測っていた。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』: 633)

#### 2. 方向、側

مستقیم می روی تا ته کوچه، آنجا که رسیدی می پیچی دست چپ.

mostaqīm mī-ravī tā tahe kūče, ānja ke resīdī mī-pīčī dast-e čap.

路地の突き当たりまで行ってもらい、そこで左手に曲がります。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』: 633)

#### 3. 職業、貿易、ビジネス、活動

توی یکی از اتاقهای خانه شان دار قالی بزن و دست از تو، سرمایه از او، یک کار حسابی راه بینداز.

tūye yekī az otāq-hāye xāne-šan dāre qālī bezan va dast az to, sarmāye az ū, yek kār-e hesābī rāh bīandāz.

彼らの家のどれかの部屋に絨毯織り機を置かせてもらって、手はあなたから、お金は彼からで、商売を始めたらどう？（直訳）

彼らの家のどれかの部屋に絨毯織り機を置かせてもらって、労働力はあなたが提供し、資金は彼が出すという形で、商売を始めたらどう？（意訳）

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』 : 634)

#### 4. エージェント、仲介業者、商行為の媒介を業とする者、役人

این دفعه باید توی دهات رخته بکنید، چون توی شهرها به قدر کافی دست داریم.

īn daf ‘e bāyad tūye dehāt rexne bokonīd, čon tūye šahr-hā be qadr-e kāfī dast dārīm.

街には手が十分あるから、今回は村に張り込むべきだ。（直訳）

街には役人が十分いるから、今回は村に張り込むべきだ。（意訳）

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』 : 634)

#### 5. ビジネスの競争相手、仕事のライバル

دست زیاد شده است.

dast zīad šode ast

手（意訳：ライバル）が多くなっている。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』 : 634)

#### 6. 介入、干渉、影響、役割、関係

مگر من در این مرگ چه دستی داشتم؟

magar man dar īn marg če dast-i dāšt-e-am?

私はこの死に手がなかっただろう！（直訳）

私はこの死に関与していないだろう！（意訳）

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』 : 634)

#### 7. スキル、熟達、堪能

در گرم کردن مجلس و گریز و دعا و فاتحه دستی پیدا کردم.

dar garm kardan-e majles va gorīz va do‘ā va fātehe dast-i peīdā kardam.

宴会、お祈り会、お葬式を盛り上がらせることで手を見つけた（意訳：手が上がった）。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』 : 634)

#### 8. 手書き、書かれているもの

گردن می کشیدند تا از روی دست هم ببینند.

gardan mī-kešīdand tā az rūye dast-e ham bebīnand.

お互いの手を見るように首を延ばしていた。(直訳)

お互い書いているものを見ようと覗き込んでいた。(意訳)

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』 : 634)

## 9. 種類

از این دست اخبار زیاد شنیده ایم.

az īn dast axbār zīād šenīde-īm.

この手 (種) のニュースをたくさん聞いたことがある。

(「Sīmāye Xānevāde」)

## 10. 助数詞

### ・食事のセット

یک دست چلو کباب

yek dast čelo kabāb

一手のチェローキャバーブ (キャバーブとごはん) (直訳)

チェローキャバーブの一つのセット (意訳)

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』 : 633)

### ・食事やドリンクの六つの食器の組み

یک دست کارد و چنگال، دو دست استکان

yek dast kārdo čangāl.yek dast estekān

一手 (意訳：一組) のコップ。一手 (意訳：一組) のスプーンとフォーク

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』 : 633)

### ・寝具・家具や関係のある道具のセット

دو دست رختخواب بالای اتاق بود.

do dast raxtexāb bala-ye otāq būd.

寝具は2 手 (意訳：2 セット) が部屋の上にあった。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』 : 633)

این تنوع رنگ بندی در یک دست مبلمان مساله ساز نخواهد بود.

īn tanavvo‘ rang bandī dar yek dast moblemān masale sāz naxāhad būd.

一手 (一セット) のソファセットのこの色の多様性は問題にならない。

(「Sīmāye Xānevāde」)

・衣類のセット

اگر بیاپی می برمت برایت یک دست لباس حسابی می خرم.

agar biāe mī-baramet barayat yek dast lebās-e hesābī mī-xaram.

来てくれれば、連れて行って、一手（意訳：一着）の立派な服を買ってあげる。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』: 633)

・回、度

روی دیوار دو دست رنگ خورده.

rūye dīvār do dast rang xord-e.

壁に2手（意訳：2回）、ペンキが塗られている。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』: 633)

・ゲームの毎回

با دو سه نفر از معلمین دیگر که در همان کافه آمد و شد می کردند یکی دو دست شطرنج می زد.

bā do se nafar az mo‘alemīne dīgar ke dar hamān kāfe āmad-o šod mī-kardand yekī do dast šatranj mī-zad.

そのカフェに通っていた他の教師の2、3人と1手2手（意訳：1回2回）チェスをした。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』: 633)

・建物の助数詞（廃止）

هفت دست خانه ساخته اجاره می دهند.

haft dast xāne sāxt-e ejāre mī-dahand.

7手（意訳：7セット）の家を建てて、賃貸に出している。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne 』: 633)

<古語>

11. 軍隊の翼
12. 勝利。支配
13. ゲームや賭博に勝つこと
14. (政府、大臣) 王位。王座
15. 鳥の助数詞、特に猛禽類
16. 権利
17. (神様の) 力、援助

上記で見たように、日本語とペルシア語では「手」は多くの意味を持っている。両言

語における「手」の基本義はほぼ同じであり、「人体の上肢、肩から指先までの部分」すなわち、具体的な身体部位名称を示している。しかし、その具体的な身体部位から様々な抽象的義が派生し、「人間の手」からメタファー、メトニミーなどによって意味が拡張している。

## 4.2 メタファーによる「手」意味拡張

松本（2000）の分類法によれば、メタファーによる意味拡張の場合は、「手」の意味が「形状」「位置」「機能」の類似性に基づいて派生される。次に、それぞれの場合の用例を分析していくこととする。

### 形状の類似性による意味拡張の用例：

日本語の「手」が形状に拡張されたものとして、「動物の手（猿の手、猫の手）」「植物の葉（八手、四手）」「器物（熊手、孫の手）」「自然現象（火の手）」がある。その中から、「手」から「動物の手」「器物」への拡張はペルシア語でも見られる。「دست میمون/daste meimun/猿の手、دست گربه/daste gorbe/猫の手」「دسته جارو/daste jaru/箒の手」はその例である。しかし、「植物の葉」や「自然現象」への拡張はペルシア語に存在しなく、日本語の特有であると考えられる。次に両言語における「手」から「孫の手」と「دسته جارو/dast-e jārū/箒の手」への意味拡張を例として取り上げる。

日本語：孫の手

ペルシア語：دسته جارو /dast-e jārū/ 箒の手

日本語の例は、「器物」を表す語例である。すなわち、「手」の意味が「人体の手」の意味から「器物」へ拡張されている。『広辞苑』によると「孫の手」は、「長さ 50～60 センチメートルほどの棒の端を手首の形に造り、背中など手の届かない所を搔くに用いる具」という意味である。孫の手の形状が手に似ているため、形状の類似性によるメタファーによって、身体部位の「手」から「器物」の意味に拡張されたと考えられる。一方ペルシア語でも、「دسته جارو /dast-e jārū/ 箒の手」は形状と手の形状の類似性に基づいて作られたものである。「手」の意味は「استعاره/ este'āre/（メタファー）」によって拡張している。

### 位置の類似性による意味拡張の用例：

「手」の形状の類似性による拡張以外に、両言語では、その位置の類似性に基づく拡張もある。つまり、「手」から「動物の前肢（犬の手/دست سگ/dast-e sag/犬の手）」、また、「器物の手（鍋の手）/دسته قابلمه/daste qaablame/鍋の手」はその例である。次に例として、「手」から「動物の前肢」への意味拡張を見てみよう。

日本語：猿の手、猫の手、犬の手

ペルシア語：دست میمون /dast-e meymūn/猿の手、دست گربه/daste gorbe/猫の手、دست سگ/dast-e sag/犬の手

上記の用例では「手」の意味が「人間の手」から「動物の前肢」へ拡張されている。両言語の辞書によれば、「手」の「動物の前肢」の意味が共通している。多くの四足動物の前肢と後足は構造的にほぼ同様であり、両方が足と呼ばれる場合が多い。

しかし、猿の場合は形状も位置も人間の手と類似性が高く、形状や位置によるメタファーが見られる。また、猫や犬の「前足」は人間の「手」と同様に、「頭部に近い二本の肢体」という特徴を持ち、「位置」類似性に基づいた「手」に関するメタファーであると考えられる。このように、「手」が人間から猫や犬へ転用し、その意味が拡張される。

#### 機能の類似性による意味拡張の用例：

物を握ったり、掴んだり、持ったりすることが「手」の基本的な機能である。日本語においては「手」のこの機能の類似性に基づいて、「手」の基本義から「動物の手（猿の手）」「工具（綱手、土手）」「植物の蔓草や新芽（アサガオの手）」へ拡張する場合がある。

一方、ペルシア語では、「手」の機能に基づく意味拡張は、「手」から「動物の手（دست میمون/dast-e meymūn/猿の手）」への意味拡張のみがあり、「工具」及び「植物へど蔓草や新芽」への拡張が見当たらない。

日本語：猿の手、綱手、アサガオの手

ペルシア語：دست میمون /dast-e meymūn/猿の手

ここでは、もう一度、「猿の手」という用例を用いて、日本語とペルシア語における「手」の意味が機能の類似性によっての意味拡張を説明する。

野生動物の中で人間に最も近い動物は「猿」と言われる。「猿」の「手」は「人間」と同じく、伸ばしたり、物を掴んだり、体をひっ搔くことができるという機能を持つ。これが機能の類似性によるメタファー/استعاره/este‘āre/（メタファー）で意味が拡張されていると考えられる。

そして、日本語の「綱手」の場合も、「手」の意味が身体部位の意味から変化し、その機能の類似性によって意味が拡張されてきたと考えられる。「綱手」というのは船を引くためにつなぐ綱であり、形状的に、「人間の手」とは全く違う。だが、人間の「手」と同じように「物を掴む」という機能を持ち、その機能の類似性に基づくメタファーで意味が拡張されていると考えられる。また、「アサガオの手」の場合でも、アサガオの

蔓の巻き付くといった有様が人間の「手」の「掴む」という機能の類似性によるメタファーに基づいての意味拡張であると思われる。

### 4.3 メトニミーによる「手」の意味拡張

身体語彙はメタファーのみならず、メトニミーに基づいても意味が拡張される。前述したように、メトニミーは隣接性(原因と結果、容器と内容物、物と持ち主、産地と産物等の関係)に基づく比喩である。

続いて、メトニミーによる「手」の意味拡張をいくつかの例を提示しながら分析していこうと思う。まず、次の日本語とペルシア語の例を見てみよう。

手の位置から方向へ意味拡張の用例：

日本語：横手、右手、左手、山手、浜手など

ペルシア語：دست باغل/baqal dast/横手、دست چپ/dast-e čap/左手、دست راست/daste rāst/右手、دست بالا/baalaa dast/上手(上の方)、دست پایین/paain dast/下手(下の方)

上記の日本語の「横手」とペルシア語の「دست باغل/baqal dast/横手」は「横の方向」の例では「手」が指す方向を表す空間的隣接関係に基づくメトニミー表現であると思われる。また、「右手」「左手」と「دست چپ/dast-e čap/左手」「دست راست/dast-e rāst/右手」「دست بالا/bālā dast/上手(上の方)」「دست پایین/pāin dast/下手(下の方)」の場合も「手」と「手で指す方向」の関係が「隣接性」、「علاقه مجاورت /‘alāqe mojāverat /隣接性に基づく理由/関係/関係の理由」に基づいている。両言語の用例では「手の位置」から「方向」という意味が派生され、行われた意味拡張は同じであることを認められる。いずれの例でも、「手」が隣接関係に基づいてメトニミーによって、具体的に四方向、すなわち「上、下」「右、左」「横」を表している。

しかし、日本語の「山手」と「浜手」の場合は「山手」は「山の方」、「浜手」は「浜の方、海の方」を指している。この二つの用例をペルシア語に訳したら、「سمت کوه/samt-e kūh/山の方向」「طرف دریا/taṛaf-e daryā/海の方」になる。すなわち、「手」ではなく、「方向」と訳される。つまり、日本語の「山手」「海手」のような例では、「手」が四方向以外の方向を表している。一方、ペルシア語「方向」を表す「دست/dast/手」が四方向、つまり、「上、下」「右、左」「横」のみを表す。それ以外の場合は「سمت، جهت، طرف، سو/samt, jahat, taṛaf, sū/方向、側」で表される。

手から人間への意味拡張の用例：

日本語：売り手、読み手、歌手

ペルシア語：دستیار/dast-yār/助手

上記のような例では、「手」は「部分」として「人」すなわち「全体」を表している。したがって、「部分全体関係」メトニミーによって「手」の意味が拡張されていると

考えられる。「手」の一つの大事な機能は「動作をする」ということである。人間は作業、仕事をするときには、よく「手」を使い、「手」から「人間」への意味拡張はそのことから由来していると考えられる。日本語では、「身体部位詞」、とりわけ「手」を用いて「人」を表す例が多く見られるようである。それに対して、ペルシア語の「身体部位詞」から「人」への意味拡張の用例は大変少ないと思われる。「手」の場合の両言語の対照を見てみよう。

歌手→ 歌を歌うことを職業とする人 → خواننده/xanande  
運転手→ 鉄道車両や自転車を運転する人 → راننده/rānande  
聞き手→ 聞く側の人 → شنونده/šenavande  
語り手→ 話す人 → گوینده/gūyande  
受け手→ 受ける側の人 → گیرنده/gīrande  
買い手→ 買う方の人 → خریدار/xarīdār  
選手→ 職業としてスポーツをする人 → ورزشکار/varzeškār

上記の例を形態的特徴から比較して見れば、日本語の表現は「動詞の連用形」＋「手」という形を持ち、「行為を行う者」を意味する。一方、ペルシア語では、「行為を行う者」を表す場合は、一般に、「現在分詞」＋「انده/ande」「آر/ār」という動詞者名詞の接尾辞などで「動作を行う者」を表現する。しかし、まれに、前述の「دستیار/dast-yār/助手」のような用例では「دست/dast/手」が「動作を行う者」を表す場合もある。両言語の「手」が使用されている用例では「人」すなわち、「動作を行う者」に意味が拡張され、「部分－全体の関係」に基づくメトニミーに基き、意味拡張はほとんど同様であると言える。

#### 手から手書き、筆路への意味拡張の用例：

日本語：手習い、女手

ペルシア語： کردن می کشیدند تا از روی دست هم ببینند.

gardan mī-kešīdand tā az rūye dast-e ham bebīnand./お互い書いているものを見ようと覗き込んでいた。

上記の両言語の例では「手」の原義が「筆路」に拡張されている。「手」と「筆路」の関係は隣接性に基つき、メトニミー (علاقه مجاورت/‘alāqe mojāverat /隣接性に基づく理由/関係/関係の理由) の「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」であると考えられる。

#### 手から種類への意味拡張の用例：

日本語：この手はすぐ品切れになる

ペルシア語： از این دست اخبار زیاد شنیده ایم.

az īn dast axbār zīad šenīde-īm./この手の二ニュースが多く耳に入る。

上記の両言語の表現はいずれも「手」が「種類」を意味する。「手の指先」が「物・方向・その周辺」を指すことから、「手」と隣接関係（علاقه مجاورت/‘alāqe mojāverat/隣接性に基づく理由/関係/関係の理由）にある「種類」を表すようになり、隣接関係に基づくメトニミー「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」であると考えられる。

以上、日本語とペルシア語におけるメトニミーに基づく「手」の意味拡張のいくつかの場合を分析した。次に、メタファーやメトニミーは「手」が用いられた両言語の「慣用句」ではどのように現れているかを、用例を提示しながら分析していく。

#### 4.4 「手」を含んだ慣用句の意味分析

日本語では、「目」に次いで「手」を用いる慣用句が「身体語彙」のなかでは、断然多く、162 例で二番目を占め、全体の約 18.22%になる。「手」が慣用表現の中で広く捉えられる理由は、林（2002）によれば、「手」は「行為」を成り立たせる根本的な「手段」「道具」であり、「何かの行為をする手として」「作業や仕事をする手として」「物を所有する手として」多様に現れてくるからとされている。

日本語とペルシア語では、「手」は古くから広い意味範囲をもって使われてきており、両言語の各辞典では 20 以上の語義を示しているほどである。さらに、両国語に共通して、「手」は人体の左右の肩から指先に至る肢であり、物を持ったり、握ったり、動かしたり、作ったりすることや、様々な行為や作業を成す上での身体上基本的な機能を持っている。

しかし、日常言語では、その一つの意味だけ対応している例は稀である。つまり、文字通りの意味のみならず、文字通りの意味と慣用的な意味の両方が並存するわけである。そのことの原因について、山梨（1988）は「日常的に使われている言葉だけで、常に、現実の世界を伝えていくためには、その状況に応じながら、もとの言葉の意味を革新していくことにより、柔軟な伝達を試みていかなければならない。言葉の意味変化は、日常言語の普遍的な特徴の一つである。ある概念や考えを伝えようとしても、適切な言葉が見つからない場合、当然のことながら、ほかの言葉の意味によるたとえによって、その伝達したい内容を表現する事態も生じる。このような新しい言葉の適用のプロセスは、言葉が新しい意味を獲得していく重要な要因の一つと言える」（p.146）と述べている。山梨が述べている意味の変化はほとんど、前述のメタファーやメトニミーのメカニズムによる作用される。

4.2 と 4.3 節では日本語とペルシア語の「手」のメタファーやメトニミーに基づく意味拡張の分析を行った。次に、まず、本稿で行った日本語における慣用句の分布調査のデータで使われた日本語の「手」に関する慣用句を表 3 でまとめ、そして、様々な慣用句辞典や調査に使用したデータの中から例を提示し、その意味においてはメタファー

やメトニミーがどのように関わっているかを考えていくことにする。そして、その日本語の「手」に対応するペルシア語の「手」の慣用句が、どのように成立するかを明らかにするために、具体的に例を挙げながら、分析を試みる。まず、調査のデータで、使用された日本語の「手」に関する表を見てみよう。

＜表 4＞日本語慣用句の分布調査のデータにおける使用されていた「手」の慣用句<sup>16</sup>

| 手が～                                                | 手に～                                                                                                              | 手の～    | 手も～     | 手を～                                                                                                                                                                                                                               |
|----------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|---------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 手がある＊<br>手が出ない<br>手が届く＊<br>手が伸びる<br>手が離れる<br>手が汚れる | 後手に回る<br>下手に出る<br>手塩にかける＊<br>手玉に取る＊<br>手に余る<br>手に入れる＊<br>手に負えない<br>手に掛かる<br>手に掛ける＊<br>手にする＊<br>手に立ち上る<br>手に取るよう＊ | 手の平を返す | 足も手も出ない | 大手を振る<br>手刀を切る<br>手ぐすねを引く<br>手間を掛ける＊<br>手を上げる＊<br>手を合わす＊<br>手を打つ＊<br>手を掛ける＊<br>手を貸す<br>手を借りる<br>手を染める＊<br>手を出す＊<br>手を突く＊<br>手を尽くす＊<br>手を付ける＊<br>手を通す<br>手を握る＊<br>手を抜く＊<br>手を延ばす<br>手を離す<br>手を引く<br>手を広げる<br>手を回す<br>手を緩める<br>手を汚す |

<sup>16</sup> 表の中では＊は3回以上、繰り返しに使用されていた慣用句を示す。

#### 4.4.1 メタファー、メトニミーと「手」の慣用句

日本語の「手」の機能による派生された諸意味の主なタイプをまとめて見ると次のようになる。<sup>17</sup>

1. ある動作をする人・労力：「手が足りない」など。
2. 所有・支配：「手に入れる」「手にする」など。
3. 手段・方法・策略：「手を尽くす」「手がある」「手が付けられない」など。
4. 手数・手間：「手を掛ける」「手を抜く」「手を省く」「手が省ける」など。
5. 世話：「手が焼ける」「手を煩わす」「手が届く」「手塩に掛ける」など。
6. 腕前：「手が上がる」「手を上げる」「手が落ちる」「手がある」など。
7. 能力：「手に負えない」「手に余る」など。
8. 力・助力：「手を貸す」「手を借りる」「手が届く」など。
9. 暴力：「手が早い」「手を上げる」など。
10. 窃盗：「手を掛ける」「手を出す」「手癖が悪い」など。
11. 同盟・約束・協力・提携：「手を握る」「手を結ぶ」「手を組む」
12. しはじめる・着手・関係：「手を付ける」「手を染める」「手を出す」など。
13. 関係断絶：「手を切る」「手を引く」「手を別る」「手が離れる」「手が切れる」など。
14. 回数（助数詞）：「三手で詰む」など。
15. 手間、細工：「手のこんだ細工」など。
16. 支配：「手の者」など。
17. 傷：「浅手」「痛手」など。
18. わざ：「四十八手」など。
19. 方面、方角：「右手、左手」
20. 文字、筆跡：「この手紙はお母さんの手だ」など。
21. 種類、品質：「その手の話は苦手だ」など。
22. 器具などの手で持つようにできている部分：「鍋の手」など。

次に、上記の日本語の「手」諸意味のタイプの中から使用率が高く、本稿の対象である「名詞＋助詞＋動詞（動詞慣用句）」あるいは、「名詞＋助詞＋形容詞（形容詞慣用句）」という構造を持つ慣用句の用例を考察し、それに対応するペルシア語の「手」の慣用句を分析する。

**手で動作をする人・労力を表す用例：**

**日本語：**

---

<sup>17</sup>同じ表現が複数の意味を持っている場合があるので、同じ表現がいくつかのカテゴリーに含まれたり、異なるメタファー、メトニミーが関わったり場合もある。その例としては「手を打つ」「手を出す」「手が届く」「手を握る」「手を上げる」などがある。

手が足りない（人手が足りない）

中小企業はどれも手が足りなくて困っています。（人手不足で困っている）

（『分野別・日本語の慣用表現』1992）

上記の例では「手」が「人」を表現している。日本語の場合は「手」は「手伝う人」や「作業や役割をする人」つまり、「人間全体」を表し、部分—全体関係に基づくメトニミー表現に当てはまる。その意味は人間が、普段、作業や労働をするとき、「手」を「道具」として使うことから由来していると推測できる。

ペルシア語：

یک دست صدا نداشتن / yek dast sedā nadāštan / 一つの手から音が出ない（意識：みんな協力しないと、一人である大きな動作をやることができない）

امیدوارم همه به کفایشان و نبی برای رفتن پر قدرت (به) جام جهانی کمک کنند، چون این بنده خدا ها زحمت می کشند اما  
یک دست صدا ندارد.

omoīdwaram hame be kafāšīan va nabī barāye raftan-e por qodrat (be) jāme jahānī komak konand, čon īn bande xodā-hā zahmat mī-kešand amā yek dast seda nadārad.

キャファシアンとナビーはすごく頑張っているが、一つの手から音が出ないので、皆は彼らが力強くワールドカップに出場するための手助けてくれるのを願っている。（直訳）

キャファシアンとナビーはすごく頑張っているが、みんな協力しないと彼らは合格するわけではないから、皆は彼らが力強くワールドカップに出場するための手助けてくれるのを願っている。（意識）

（「Hamšahri On Line」2013.11.16）」

上記の「یک دست صدا نداشتن / yek dast sedā nadāštan」は文字通りには「一つの手から音が出ない」という意味がある。例文での考察からも分かるように、「みんな協力しないと、一人である大きな動作をやることができない」ことを意味する。つまり、「一つの手から音が出ない」を通して「みんな協力しないと、一人で、大きな動作をやることができない」と捉えられる。すなわち、文字通りの意味から抽象的な意味が発生している。そこで、この表現は全体的に、「کنایه / kenāye / メタファー」である。しかし、「手」自体は「身体部分」の意味から「身体部位が属する主体」、つまり全体的概念を表す「人」へと拡張され、「部分—全体」（علاقه کل و جزء / alāqe-ye kolyat va jozyiat / 全体—部分あるいは部分—全体）という関係に基づいて拡張し、「مجاز مرسل / majāz-e morsal / メトニミー」としても分類できる。

手で所有・支配を表す用例：

日本語：

手に入れる（自分のものにする）

どんなことがあってもくじけない、あきらめないうで、欲しいものを手に入れようとする  
素子さんは、本当に立派だと思います。

（『向田邦子シナリオ集Ⅲ、幸福』：509）

上記の表現では「手に入れる」とは「欲しいものを所有する」という意味である。この場合は、「手」は「具象」すなわち、「身体部位」から「何かを自分のものにする」の「抽象」へ転義している。「手」は「所有」を表し、「入れる」は「手」を「容器」として見立てるから、メタファーに関わる表現であると考えられる。また、「手」が「所有」を表すため、その意味が隣接関係に基づくメトニミーとしても分類できる。

ペルシア語：

مدال طلای مسعود اسماعیل پور را از دست کسی در آوردند/az dast-e kasī dar āvardan/人の手から取り出す（意識：人の財産や持っているものを詐欺で自分のものにする/他人に占領される/持っているものが他人に奪われる）

مدال طلای مسعود اسماعیل پور را از دستش در آوردند.

medāl-e talā-ye mas'ūd-e esmāil pūr rā az dast-aš dar-āvardand.

マスウード・イスマイリの金メダルが他人に手から取り出された（意識：奪われた）。

（「Simāye Xānevāde」）

この表現は、実際に「マスウード・イスマイリ」という人物は「所有するべきだった金メダルが渡されなかった」ということを表している。この表現は前述の日本語の「手に入れる」場合と同様に、具体的に「手」が「所有」へと拡張し、手の「握る」「掴む」という機能から派生され、隣接関係に基づくメトニミー（علاقه مجاورت / 'alāqe mojāverat / 隣接性に基づく理由/関係/関係の理由による「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」であると考えられる。

ペルシア語では、「手」で「所有」を表す「به دست آوردن/be dast āvardan/手に入れる/入手する」「به دست افتادن/be dast oftādan/手に落ちる」という表現もあるが、これは慣用句ではなく、一般的な動作を表す連語である。

両言語では、手で「所有」や「占領」を表す慣用句が、上述の表現の以外に、「手に握る」「手にする」「手に入る」「手に落ちる」「دست کسی بودن/dast-e kasī būdan/だれかに占領（所有）される」「دست به دست گشتن/dast be dast gaštan/手から手に渡る」「از دست کسی

درآوردن/az dast-e kasī dar-āvardan/誰かに持っているものを奪う」「به دست کسی افتادن/be dast-e kasī oftādan/何かが誰かの手に入る（手に落ちる）」「دست گذاشتن روی چیزی/dast gozāštan roye čizi/何かを占領する」などがある。

### 手で手段・方法・策略を表す用例：

日本語：

手を尽くす

陸から遠ざけようと手を尽くした人たちの心が通じたか、やつれた巨体はきのう、ゆっくり沖へと向かった。

(『朝日新聞、天声人語』 2009.6.2)

上記の「手を尽くす」とは、「物事の実現や解決のために、あらゆる手段を試みる」「可能な限りの手段方法を取る」という慣用的意味を表している。この場合、「手」の解釈には身体性の意味が失われ、「何かに対処する方法、手段」という意味になる。これは「手」の機能によって成立されたメトニミー表現である。林(2007)によれば、「手」と「手段」の関係は「主体－機能」に基づいている。

ペルシア語：

دست بالا کردن/dast bālā kardan/手を上げる（意識：手を尽くす）

به خودم گفتم: زن، تو حالا اول زندگیت هست و داری خودت را با این خیالها... پیر می کنی. باشو دست بالا کن و یک کاری انجام بده.

be xodam goftam; zan, to halā avale zendegīt hast va dārī xodat rā bā īn xīāl-hā... pīr mī konī, pāšo dast bālā kon va yek karī anjām bede.

私は自分自身にこう言った：おーい！女！今はあなたは人生のスタートにいる（まだ若い）…という空想は自らを老いさせるぞ。立ち上がれ、手を上げて（意識：手を尽くして）、何とかをしろ！

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:636)

日本語の「手を尽くす」と対応する「دست بالا کردن/dast bālā kardan/手を上げる」という表現があり、「あらゆる手段を講じて努力する」という慣用的の意味を持つ。この表現では、具体的な動作である「手を上げる」を通じて、抽象的な「あらゆる手段を講じて努力する」を表している。この表現は両者の意味で使用されるがここでは話し手はその抽象的な意味つまり、「معنای دور/ma‘nāye dūr/遠い意味」が考慮しているから「کنایه/kenāye/メタファー」の表現であると考えられる。

手で手数・手間を表す用例：

日本語：

手を抜く（手数を省き、いい加減にことをする）

ああ、あところに彼女はすごかったよ。たとえ超満員でも、客のノリが悪けりゃ、明らかに手を抜いて、ひどい時には曲の途中でステージを降りちまったり... 反対に、テンションが上がれば、予定時間をまるつきり無視して、いつまでも歌い続け...

（『ドラマ 相棒 season 10』：）65

「手を抜く」の「手間・手数を省き、いい加減にことをする」という慣用的意味は二つの比喻に基づき成り立っていると考えられる。この表現では「手」自体は「手間・手数」を表し、隣接関係に基づくメトニミーである。そして、「手を抜く」全体を見ると、「手」は「手間・手数」を表し、「抜く」は「手」すなわち「手間・手数」を「容器」として見立て、メタファー表現であると思われる。つまり、「手を抜く」は全体的に、メトニミーとメタファー両方が関わる表現であると言える。

一方、ペルシア語では「از زیر کار در رفتن/az zire kār dar raftan/しなくてはならないことをやらない」という表現があり、意味的に日本語の「手を抜く」と同じであるが、「دست/dast/手」を含む表現的ではない。また、日本語の「手を上げる」と類似する「دست کشیدن/dast keshidan/手を抜く、手を引く」という慣用句があるが、「やめる、諦める」という意味を持ち、日本語の「手を抜く」とは異なる。

ペルシア語：

روی دست کسی گذاشتن/roye dast-e kasī gozāştan/手の上に置く（意訳：人に手数を掛ける）

الهی گردن طاووس خانم بشکند که این کار را گذاشت روی دست.

elāhī gardan-e tāvūs xānom beškanad ke īn kār rā gozāšt rūye dast-at.

このことをあなたの手の上に置いたターヴウスさんに呪いあれ！（直訳）

あなたにこの手数を掛けさせたターヴウスさんに呪いあれ！（意訳）

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』：657）

上記の「روی دست کسی گذاشتن/roye dast-e kasī gozāştan/手の上に置く」は「手数」を表す表現である。「人の手の上に何かを置く」という文字通りの具体的な意味と、慣用的な意味として「人に手数を掛ける」がある。「人の手の上に何かを置く」はこの表現の「معنای دور/ma'nāye dūr/遠い意味」である。二つの意味の間に写像が起こり、「苦労や手数を掛けられる」という抽象的な意味を表すようになっている。これが「کنایه/kenāye/メタファー」に基づく意味拡張である。

手で世話を表す用例：

日本語：

手を煩わす

生徒が先生の手を煩わせるのは当たり前のことです。

(『分野別・日本語の慣用表現』 1992)

上記の例では、「手を煩わせる」が先生の世話になるのは当然のことを意味している。つまり、「手」を全体の一部として持つ「人/先生」自身が面倒な思いをしているということである。この慣用句は「部分で全体を表す」という関係に基づき成立し、いわゆる隣接関係によるメトニミー表現なのである。

ペルシア語：

なし

手で腕前を表す用例：

日本語：

手を上げる

ゴルフの手を上げる。

(『大辞泉 第一版』 1995)

「手を上げる」という慣用句は三通りの意味を持つ。降参する、屈伏する、そして、もう一つは殴ろうとして手を振り上げる。上記の例文では技術・腕前が上達という意味を持つ。句全体の文字通りの意味が「手の位置を高くする」ことである。慣用句では、具体的な動作である「手の位置を高くする」を通して抽象的な「技能を高度にする」を表し、両者には「下から上へ」という類似性があり、メタファーによって意味が拡張されていると考えられる。

一方ペルシア語では表現的に日本語の「手を上げる」と類似する「دست خود را بالا بردن/dast-e xod rā bālā bordan/手を上げる」という慣用句があるが、「軍隊の敬礼」という意味を持ち、日本語の「手を上げる」とは異なる。意味的に上記の例における「手を上げる」と対応する慣用句は次の表現であると思われる。

ペルシア語：

دست پیدا کردن/dast peydā kardan/手を見つける（意訳：腕前や技量が上達する）

به مرور زمان در گرم کردن مجلس و گریز و دعا و فاتحه دستی پیدا کردم.

be morūr-e zamān dar garm kardan-e mājles va gorīz va do‘ā dast-ī peīdā kardam.

徐々に、宴会、お祈り会、お葬式を盛り上がらせることで手を見つけた（意訳：手が上

がった)。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:641)

上記の例文を見れば分かるように、「دست پیدا کردن dast peīdā kardan」は「腕前や技量が上達する」を意味する。「دست پیدا کردن dast peīdā kardan」の字面の意味は「手を見つける/かせぐ」ということである。この表現全体は「動詞句」であり、その意味つまり、手で何かを見つける意味が「علاقه مجاورت/‘alāqe mojāverat/隣接性に基づく理由/関係/関係の理由」に基づいて拡張し「مجاز مرسل/majāz-e morsal (メトニミー)」である。また、「手」自体と「腕前」の間にも隣接関係があり、「手」自体の意味は「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」によって拡張している。

手で能力を表す用例：

日本語：

手に負えない

矢継ぎ早やの「教材」はどれも一国では手に負えない。

(『朝日新聞、天声人語』 2009.5.3)

「負う」は背中や肩いっぱいには物の重みをつけるという意味を持つ。上記の慣用句では、文字通りには、荷が重くて手の力では負うことができないことを連想させる。このように、文字通りの特徴が、その慣用的の意味に写像され、慣用句も「自分の力ではとても処理できない」という抽象的な意味を表現するようになる。こうして、文字通りの意味からメタファーによって慣用句の意味が成り立つと思われる。

ペルシア語：

از دست کسی ساخته بودن/az dast-e kasī sāxte būdan/ (人の) 手で作られる (意訳：物事をやる能力がある)

به فقرای شهر تا جایی که دستش می رسید کمک می کرد و اگر این کمک از دست خودش ساخته نبود، پولدارهای شهر را وادار می کرد که به طرق مختلف به مردم تهی دست کمک کنند.

be foqarā-ye šahr tā jāi ke dastaš mī-resīd komak mī-kard va agar īn komak az dast-e xod-aš sāxte nabūd, pūldār-hāye šahr rā vādār mī-kard ke be toroq-e moxtalef be mardom-e tohīdast komak konand.

彼は手が行き届く限り、都市部の貧困層を援助していた。そして、自分自身の手で作れない (意訳：手に負えない) 場合は都市の他の豊かな人たちを援助させていた。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:655)

上記の「از دست کسی ساخته بودن/az dast-e kasī sāxte būdan/ (人の) 手で作られる」の文字

通りの「人の手で作られる」具体的な意味から「物事をやる能力」というより抽象的な意味を表すようになっていく。字面の意味を通して、視覚的に捉えにくい「物事をやる能力がある」ことを表している。これは人間が、自然に「手」で物事をやることを連想し、身体的な経験に由来する「کنایه/kenāye/メタファー」の表現であると思われる。

#### 手で力、助力を表す用例：

日本語：

手を借りる

都民の手を借りてこの地を緑化する「海の森」計画が、07年に動き出した。

(『朝日新聞 天声人語』 2009.9.22)

上記の用例における「手を借りる」は「手助けしてもらおう」ことを表す。つまり、「手」で「力、助け」を、「借りる」で「受ける」をそれぞれ意味する。「手を借りる」はもちろん、「手」のみならず、「他人の体全体」を使って、仕事をやるということを表現し、その意味が部分－全体メトニミーに基づく拡張されている。

ペルシア語：

دست به دامن کسی شدن/dast be dāman-e kasī šodan/人のスカートに手を付ける（意識：人に助けや助力を頼む）

بحران اقتصادی انگلیس را دست به دامن چین کرد.

bohrāne eqtesādī, engīlīs rā dast be dāman-e čīn kard.

不景気は、イギリスに中国のスカートに手を付けさせた。（直訳）

不景気は、イギリスに中国からの援助を頼ませた。（意識）

(「Hamšahri On Line」 2013.12.01)

字面からみれば、上記の例文における「دست به دامن کسی شدن/dast be dāman-e kasī šodan」は「人のスカートに手を付ける」ことを表す。これは、昔、皇帝や力を持つ人間、又は金持ちの者に対して膝まづき、そして物を請う際、その当時、富裕層の衣装であったマントやスカートの裾部分を手で掴み頼みごとをしていたことに由来している。そこで、この表現は「کنایه/kenāye/メタファー」である。つまり、具体的な動作である「人のスカートに手を付ける」を通して、抽象的な「人に助けや助力を頼む」が表されている。

#### 手で暴力を表す用例：

日本語：

手を上げる

私は生まれつきの気短かで、よく娘にも手をあげました。それも今日でおしまい

しょう。

(『向田邦子シナリオ集Ⅴ、寺内貫太郎一家』: 580)

上例における「手を上げる」は文字通りの「手を上の方向に上げる」という身体的状況の意味と、「暴力を振るう」という慣用的意味を持つ。この場合、「手を上げる」という身体状態と精神的と気短な状態の結果である「暴力を振るう」ということが同時に生じることがあり、時間的隣接関係に基づくメトニミー表現であると考えられる。

ペルシア語：

دست روی کسی بلند کردن/dast rûye kasī boland kardan/手を人に上げる (意識:手を振り上げ、誰かを殴ろうとする)

کسی که دست روی زن بلند کند، به هر کثافتکاری دیگری هم دست می زند.

kasī ke dast rûye zan boland konad, be har kesāfat kārye dīgarī ham dast mī-zanad.

女性に手を上げる人は、他にもへまをやるはずだ。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:637)

上記の両言語の例文を見れば、分かるように、「手を上げる」と「دست روی کسی بلند کردن/dast rûye kasī boland kardan/手を人に上げる (意識:手を振り上げ、誰かを殴ろうとする)」は表現と意味の面でも、類似している。両方は文字通りの「手を上にあげる」という身体的状態の意味と並んで、「暴力を振るう」といった行為を表す。しかし、上述したように、この表現は日本語では「メトニミー」と見なされるに対して、ペルシア語では「کنایه/kenāye/メタファー」の表現であると考えられる。なぜなら、話し手が実際に言いたい「手を上にあげる」の意味ではなく、後者の比喩的な意味である。すなわち、具体的な動作を通じて、抽象的なことが表されている。

手で窃盗を表す用例：

日本語：

手を出す

こんなこと、生まれて初めて——あたしねえ、スリにあつて、電車ン中で、お金、スラれたことあったけど、人のものに手なんか出したこと、ただの一度も——本当なんです。

(『向田邦子シナリオ集Ⅱ、阿修羅のごとく』: 212)

「手を出す」という慣用句を字面の意味からみれば、「手を一定の方向へ出るようにする」と、「物を盗む」という慣用的意味がある。この場合、字義通りの動作と「物を盗む」ということは手段と目的の関係のメトニミーに基づいて慣用句の意味を発生して

いると考えられる。つまり、「手を出す」という動作を手段として、「物を盗む」という目的を果たすということである。

ペルシア語：

دست کسی کج بودن/dast-e kasī kaj būdan/人の手が曲がっている（意識：盗みをする人だ、手を出す）

مدیر گفت: بر ما مسلّم شده است که او این دزدی را کرده است و حاضر نیستیم در مدرسه بچه ای داشته باشیم که دستش کج است.

modīr goft: bar mā mosalam šode ast ke ū īn dozdi rā karde ast va hāzer nīstīm dar madrese bače-ī dāšte bāšīm ke dast-aš kaj ast.

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:652)

校長先生はこう言った：我々は彼が盗みをしたことを確信している。手を出す（手が曲がっている）子を学校にいさせたくないです。

この例では、「دست کسی کج بودن/dast-e kasī kaj būdan/人の手が曲がっている」は「手の形が崩れ、曲がっている」という意味ではなく、「ものをこっそり取ろうとする時の手の形」との類似性に基づき、「盗みをする人だ」として使われており、抽象度が高く、「کنایه/kenāye/メタファー」表現であると考えられる。

手で同盟・約束・協力・提携を表す用例：

日本語：

手を組む

俺と手を組んで一山あてようじゃないか。

(『大辞林』 2006：172)

ペルシア語：

دست به دست هم دادن dast be dast-e ham dādan/お互いに手を繋ぐ（意識：協力しあう、同盟し協力し合う）

اگر همهٔ بازارچه دست به دست هم بدهند اینها اینقدر نمی توانند به ما ظلم کنند...اولین قدم اتحاد است.  
agar hameye bāzārče dast be dast-e ham bedahand īnhā īnqadr nemī-tavānand be mā zolm konand...avalīn qadam etehād ast.

商店街（の人）の皆が手を繋いだら（意識：同盟し、協力し合ったら）、彼らは私たちがを虐げることができない…これが連合の始まりだ。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:639)

上記の両言語の例文における「手を組む」と「دست به دست هم دادن/dast be dast-e ham dādan/お互いに手を繋ぐ」は「自分の手と他人の手を組むあるいは繋ぐ」という文字通りの意味を表す。その文字通りの行為により、「協力し合う」「同盟し協力し合う」という慣用的意味を表している。

両方の表現はメタファーとメトニミーに関わるものであると思われる。日本語の「手を組む」の場合は、具体的な動作と伴われ、「何らかの手の動き」が「何らかの行為」を表現されるわけで隣接関係に基づくメトニミーであると思われる。また、抽象度が高く、具体的な動作より、その抽象的な意味が想像されるので、メタファー度合いも高いと言える。このような表現はメトニミーに基づくメタファーと呼ばれる場合が多い。

一方、ペルシア語の「دست به دست هم دادن/dast be dast-e ham dādan/お互いに手を繋ぐ」の場合は、「協力と同盟の象徴でもある手を繋ぐ」は「علاقه سمبل یا نماد/alāqe-ye sambol yā namād/象徴やシンボルの「علاقه/alāqe/理由/関係/関係の理由」」に基づく「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」である。また、構成語の意味、つまり、文字通りの意味と比喩的な意味があり、具体的な動作である「دست به دست هم دادن/dast be dast-e ham dādan/お互いに手を繋ぐ」を通じて、「協力しあう」、「同盟し協力し合う」の抽象的なことが表され、「کنایه/kenāye/メタファー」でもある。

日本語とペルシア語でも、「手を組む」と「دست به دست هم دادن/dast be dast-e ham dādan/お互いに手を繋ぐ」以外に、手で同盟・約束・協力・提携を表す「手を握る」「手を結ぶ」「手を組む」「دست به هم (یکدیگر) دادن/dast be ham (yekdīgar) dādan/お互いに手をあげる(手を繋ぐ)」「دست کسی توی دست کسی بودن/daste kasī tūye daste kasī būdan/人の手が他の人の手の中にある(犯罪で協力する)」などという表現がある。

## 手でしはじめる・着手を表す用例：

日本語：

手を付ける

より生きやすい国を目指して、まずは荒れ放題の政治と財政から手を付けたい。

(『朝日新聞、天声人語』 2011.8.14)

上記の例文における「手を付ける」という慣用句における、メタファーとメトニミーが絡み合っていて働いていると考えられる。「手を付ける」は「物事に着手する」「使い始める」と理解することが多い。すなわち、「手をものやある位置におかせる」という具体的な動作より、まず、その抽象的な意味が想像される。そこで、抽象度が高く、メタファー表現と考えられる。そして、その「手を付ける」という具体的な動作と「物事に着手する」「やり始める」ということは手段—目的の関係にある。つまり、「手を付ける」を手段として、「物事に着手する」「やり始める」という目的を果たすということである。それは手段—目的のメトニミーに基づいた意味拡張であると考えられる。

ペルシア語：

دست گذاشتن/dast gozāštan/手を置く（意識：物事に着手する）

راه می افتاد و می رفت در خانه حاجی صابونچی و دست می گذاشت به داد و فریاد.

rāh mī-oftād va mīraft dare xāne-ye hājī sābūnčī va dast mī-gozāšt be dād-o faryād.

ハージサブンチーの家の前に行って、騒動に着手していた（意識：騒動を起こしていた）。

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』:653）

上記の例文では「دست گذاشتن/dast gozāštan/手を置く（意識：物事に着手する）」は日本語の「手を付ける」とほとんど意味が同様であると思われる。人間が普段、ある動作を行うために「手」を使う。そこで、この表現は「動詞句」で、「動作を始める」こととの関係は「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」の「علاقه مجاورت/‘alāqe mojāverat → 隣接性に基づく理由/関係/関係の理由」に基づいている。

手で関係断絶を表す用例：

日本語：

手を切る（関係を絶つ）

あたしねえ、お父さんにハッキリ手を切ってもらうか、さもなかったら、お母さんと別れて..

（『向田邦子シナリオ集Ⅱ、阿修羅のごとく』：34）

手を切るには、「刃物などで手を傷付ける」という文字通りの意味と「今までの関係を絶つ。特に、男女の縁を切る」という慣用的意味がある。この二つの意味には「以前、結びついてたもの、続けていたものなどを分ちはなす」という共通点を見出すことができる。すなわち、上述の例文における「手を切る」の慣用的意味は文字通りの意味からメタファーに基づいて成り立っていると考えられる。日本語では「手を切る」以外に、「手」の慣用表現で、「関係断絶」表す「手を引く」「手を切る」「手を分かつ」「手が離れる」という表現もある。一方、ペルシア語ではその日本語の表現と対応するものは「دست کشیدن dast kešīdan/関係などを絶って、退く。手を引く」のみであると思われる。

ペルシア語：

دست کشیدن/dast kešīdan/手を引く（意識：関係などを絶つ）

طوری قاب قمرخانم را دزدیده که دخترک حاضر است برای خاطر او حتی از مادرش دست بکشد.

toūrī qāpe qamar xānom rā dozdīd-e ke doxtarak hāzer ast barāye xāter-e ū hatā az mādar-aš dast bekešad.

お母さんさえに手を引く（意識：関係を絶つ）ほど、ギャマル夫人の心を掴んでいる。  
（『Farhang-e Fārsye Amīāne』:652）

上記のような例では、「手を引く」は「関係を絶つ」と理解することが多い。つまり、「手を引く」という具体的な動作より、まずこの抽象的な意味が思い浮かび、抽象度が高く、「کنایه/kenāye/メタファー」の表現であると考えられる。

#### 4.5 まとめ

第4章において、日本語の「手」とペルシア語の「دست/dast/手」の意味拡張及びその慣用句の分析を行った。方法として、「手」と「دست/dast/手」を「基本義」と「派生義」の2種類に分け、それぞれの例を提示しながら考察した。そして、両言語において、メタファー、そして、メトニミーによる「手」と「دست/dast/手」の意味拡張について討論した。その結果、両言語では、「手」の意味は「形状の類似性」「位置の類似性」「機能の類似性」、また、機能の「隣接性」に基づいて、意味が拡張されることがわかった。両言語の「手」の意味拡張を「両言語における共通の意味拡張」、「日本語の特有の意味拡張」と「ペルシア語の特有」のものに分けられる。それぞれの例は次のようなものである。

#### 両言語における共通の意味拡張

両言語では「手」の形状に注目し、拡張されたものは「動物の手」や「植物の葉」があり、また、「手の位置」から「方向」への意味拡張されたこともある。「手の位置」から「方向」の拡張はペルシア語より日本語の方が多いことが見られる。

もう一つの両言語の共通の例は「手」から「人」への意味拡張である。

#### 日本語の特有の意味拡張

ペルシア語の場合は、「手の位置」から「方向」へ拡張された語は「右手」「左手」という語である。しかし、日本語では自然のものを含む「山手」、「海手」、「浜手」、「川手」と言った語も「手の位置」から「方向」へ拡張されることはペルシア語では見られないことで、日本語の特有のものであると思われる。もう一つのペルシア語に見られなく、「手」から「傷」へ意味拡張が日本語のみにあるものである。

#### ペルシア語の特有の意味拡張

一方、「手」から「袖」、「介入、干渉、影響、役割」という意味拡張はペルシア語だけにある例である。

#### 両言語における「手」に関する慣用表現の意味考察の結果

次に、日本語の「手」に関する「慣用句」とそれと対照するペルシア語の「手」の慣

用表現の意味拡張について討論した。方法としては、日本語の「手」の機能による派生された諸意味の主なタイプを「手で動作をする人・労力を表す用例」「手で所有・支配を表す用例」「手で手段・方法・策略を表す用例」「手で手数・手間を表す用例」「手で世話を表す用例」「手で腕前を表す用例」「手で能力を表す用例」「手で助力を表す用例」「手で暴力を表す用例」「手で窃盗を表す用例」「手ではじめる・手着を表す用例」「手で関係断絶を表す用例」に分類し、それと対照するペルシア語の例を提示しながら意味分析を行った。その結果は、「目」の慣用表現と同様に、日本語では、メトニミーによる意味拡張がほとんどであるに対して、ペルシア語では、「کنایه/kenay/メタファー」の方が多かった。提示した日本語の例の場合は 14 の用例の中から 8 例はメトニミー、4 例はメタファー、2 例はメタファーとメトニミーの両方が関わっている表現であった。一方、ペルシア語の場合は、13 例の中から、7 例は「کنایه/kenaye/メタファー」、5 例は「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」、1 つは両方に関わる用例であり、両言語において、意味拡張は異なりをみせる。

## 第5章：日本語とペルシア語の「口」を含んだ慣用句の対照

### 5.1 「口」の意味分析

日本語の話者の実言語運用の調査の結果に基づけば、「目」と「手」の次に最も使用率が高かったのは「口」という身体語彙に関する慣用句であり、全体の9.78%を占めている。

本章では日本語とペルシア語の「口」に関する慣用句を取り上げ、対照を行うこととする。両言語における「口」の慣用句には、どのような類似点や相違点が存在しているかを明らかにするためには、「口」の指し示すものを明確にする必要があると思われる。そこで、まず具体的に、両言語における「口」の意味を検討する。そして、その構成素である「口」を含む慣用句表現を取り上げ、その慣用句全体の意味成立にメタファーやメトニミーがどのように影響するかを精査する。

『日本語国語大辞典』、『大辞林』、『大辞泉』、『広辞苑』、『日本語大辞典』、といった各日本国語大辞典も「口」の見出しのもとに記述されている意味を参考とし、日本語における「口」の基本的意味と派生的意味が辞書でどのように記述されているかをみてみよう。

#### 5.1.1 日本語の場合

##### 【「口」の基本義】

『大辞泉（第一版）』（1995）によると「口」の基本義は次のとおりである。

- ・動物の消化器系の開口部で、食物を取り入れる器官。
- ・人間では顔面の下部にあつて、口唇・口蓋・口底に囲まれ、中に歯・舌・などがある。発声にも関係する。

##### ・口腔

また、『広辞苑（第六版）』（2008）では「口」は次のように定義されている。

- ・動物が体内に植物を摂取する、あな状の器官。
- ・高等動物では、唇・歯・舌などをそなえて消化管につながり、また人類などでは発声するのに使う。
- ・鳥類では嘴となる。

そして、『日本国語大辞典 第二版』（2001）における「口」の基本義の意味分類は次の通りである。

- ・人や動物の顔の下部にあり、飲食物をとり、声を発するための器官。

##### ・口腔

- ・鳥の口腔

以上の定義から見ると、各辞典における「口」の基本義はほぼ同じであり、＜飲食物を摂る人間と動物の一つの器官＞、＜声を発するための器官＞、＜鳥の嘴＞、＜口腔＞

は「口」の定義である。しかし、その意味から様々な抽象的な意義が派生し、意味拡張がなされている。『大辞林（第三版）』（2008）は「口」の派生義を次のように分類する。

### 【「口」の派生義と典型的意味】

#### 1. 話すこと。声を出してものを言うこと。

- ・話す時に使うものとしての口。「～を開けば嫁の悪口ばかり」
- ・話す動作。声に出すこと。また、その言葉。「～で言うほど簡単ではない」
- ・（文章などによらず）直接話すこと。口頭。「～で伝える」
- ・うわさ。評判。風説。「世間の～を気にする」
- ・話し方。話し方のよしあしや多寡。「～が悪い」
- ・呼び出し。誘い。「～がかかる」

#### 2. 飲食すること。

- ・飲食する時に使うものとしての口。「～を付ける」
- ・飲食物を味わうものとしての口。また、味覚。「～に合う」「～あたり」
- ・生活のために必要な量の食事をとるものとしての口。また、食事する人数。「～を減らす」
- ・飲食する動作。飲み食いすること。「酒は～にしない」

#### 3. 通り抜けることができる空間。（複合語としても用いる。多くの場合は「ぐち」となる）。

- ・穴やすき間。「傷～」「船腹に～があく」
- ・ものを出し入れする所。また、そこをふさぐもの。「瓶の～」「～がかたくて抜けない」
- ・人の出入りする所。戸口。「～が狭い」「非常～」

#### 4・物事の初め。最初。

「序の～」「宵の～」

#### 5. 物事を分類するときの、その、一つ一つの類。種類の一。

「飲める～」「そっちの～がだめなら、別の～に当たってみよう」

#### 6. 入っておさまる所。

「嫁の～をさがす」「就職～」

#### 7. 馬の口につける縄。

「馬の～をとる」

## (接尾) 助数詞

1. 口に飲み物を入れる回数を数えるのに用いる。「一〜で食べる」
2. 刀剣などを数えるのに用いる。「太刀一〜」
3. 多くの人から金銭を集める時の、だしてもら単位を数えるのに用いる。「一〜五千円で加入できる」

### 5.1.2 ペルシア語の場合

ペルシア語の場合、日本語の「口」に対応するものとして「dahān/dahan دهان, دهان」という言葉がある。本節では、『Farhang-e Moīn』『Loqat nāme-ye Dehxodā』『Farhang-e Fārsye Amīāne (ペルシア語俗語大辞典)』『Farhang-e bozorge soxan』といったペルシア語辞典を参考とし、ペルシア語の「dahān/dahan دهان, دهان」の基本的意味と派生的意味が辞書で次のように記述されていた。

#### 【「dahān/dahan دهان, دهان/口」の基本義】

- ・人間と動物の頭部にある身体部位で、歯と舌がその中にある。
- ・人間と動物の顔の下にあるあな状の部位、発声器官と飲食物を取り入れる部分。
- ・唇によって、外につながる消化器官の上部であり、歯、舌などをそなえ、食物はその中に入り、嚙んでから、食道によって胃に入る。発声器官。次の例において、「口」は基本義で使用されている。

همه افراد حداقل یک بار هم که شده تنفس از طریق دهان را تجربه کرده اند.

hame afrād hadeaqal yek bār ham ke šode, tanaffos az tarīq-e dahān rā tajrobe karde-and.

誰もが少なくとも一度は、口からの呼吸を経験している。

(「Simaye Xanevade」)

#### 【「dahān/dahan دهان, دهان/口」の派生義と典型的意味】

##### 1. 気鳴楽器、歌、歌声の助数詞

برای اینکه از سرِ تقصیراتت بگذرم یک دهن آواز بخوان

barāye īnke az sar-e taqsīrātāt bogzaram yek dahan āvāz bexān.

君の過失を許すから、一口 (意訳：一曲) 歌ってくれ。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』: 724)

چه بگویم؟ بگویم از پشت تلفن برای من یک دهن نی لبک بزنی که دلم گرفته؟

če begūyam? begūyam az pošt-e telefon barāye man yek dahan ney labak bezan ke delam gerefte?

私は何と言えばよいのか？私が意気消沈しているからといって、電話越しに、私に一口

(意訳：一曲) 葦笛を鳴らしてくれと言ってよいものか？

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』：724)

## 2. 話し方/話す能力

درویش دهننت خیلی گرم است.

darvīš dahan-et xeylī garm ast.

ダルビッシュ！君は口がとても暖かいです。(直訳)

ダルビッシュ！君の話し方がとても魅力的です/君は興味深く話す。(意訳)

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』：724)

## 3. 飲食物を味わうものとしての口

بفرمائید خربزه زرندي است، دهننتان را شیرین کنید.

befarmāyed xarboze-ye zarand-i ast, dahan-etān rā šīrīn konīd.

ザランドのメロンです。どうぞ、口を甘くして (意訳：召し上がれ)

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』：726)

## 4. 食器や物の口部。形態が口に類似するもの。物を出し入れする所。出入りする所。

آن ها را درون یک ظرف شیشه ای دهان گشاد یا سفالی بریزید.

ānhā rā darūn-e yek zarf-e šīše-īye dahān gošād yā sofā-lī berīzīd.

それら（材料）を口が広いガラス食器あるいは陶器に入れてください。

(「Hamšahri On Line 2008.03.16」)

- دهانه بطری/dahān-eye botrī/瓶の口
- دهانه غار/dahān-eye qār/洞窟の入り口
- دهانه کوه/dahān-eye kūh/山の口
- دهانه رودخانه/dahān-eye rūdxaneh/河口

## 5. 複合語として用いられる口

- دهان بند/dahān band/さるぐつわ
- دهان دره/dahān dare/あくび
- دهان دریده/dahān darīde/口汚い
- دهان لق/dahān laq/口が軽い

上記に述べた、日本語の「口」とペルシア語の「دهن/دهان/dahan/dahān/口」の「基本義」はほとんどが同義であり、食物を取り入れたり発声したりする器官を表している。しかし、両言語では「言語行為」と「摂食行為」という「口」の主な機能に注目され、隣接性によるメトニミーに基づいて「口」から「摂食行為」及び「言語行為」へ意味が拡張

され、日本語では、「話すこと」「声を出してものを言うこと」「飲食すること」、そして、ペルシア語では、「話し方・話す能力」「飲食物を味わうものとしての口」へに拡張されている。

また、両言語では、「口」の形状の類似性にも注目され、メタファーに基づいて、身体部位である「口」から「通り抜けることができる空間・物を出し入れする所」、「食器や物の出し入れをする所」という意味へ拡張されたこともある。「瓶の～」「非常～」「دهانه دهانه/داهانه غار/dahān-*eye* qār/洞窟の口」はその例である。

「物事の初め。最初：序の口」「種類の一つ：飲める口」「入っておさまる所：就職口」は日本語特有のもので、「口」から「気鳴楽器、歌、歌声の助数詞」という意味拡張はペルシア語の「口」の特有の意味拡張である。

上記の点から見ると、両言語の「口」の意味拡張では類似点があるが、「口」を含む語の拡張された範囲は、日本語はペルシア語に比べて広い考えられる。

## 5.2 「口」を含んだ慣用句の意味分析

日本語において、「口」の意味拡張について、有菌（2005）は、「口」の意味拡張（省略）、行為を行う際の道具（つまり身体部位）によって「行為」を表し、さらにはある行為を行う際に要求される、「人」「能力」「方法」などへ意味が拡張している」（p.494）と述べている。有菌が挙げる「口」の意味拡張で、「人」への意味拡張以外のものは、ほとんどの場合においてペルシア語でも存在している。一方、「口」から「気鳴楽器、歌、歌声」への意味拡張は日本語には見られず、ペルシア語特有のものであると思われる。

本節では、まず、本稿で行った日本語における慣用句の分布調査のデータで使用された日本語の「口」に関する慣用句を表4でまとめ、そして、様々な慣用句辞典や調査に使用したデータの中から例を提示し、その意味において、メタファーやメトニミーがどのように関わっているかを考察する。そして、その日本語の「口」に対応するペルシア語の「دهان/دهن/dahan/dahān/口」の慣用表現が、どのように成立するかを明らかにするため、具体的に例を挙げながら分析を試みる。まず、調査したデータで使用された日本語の「口」に関する表を見てみよう。

＜表 5＞日本語慣用句の分布調査のデータにおける使用されていた「口」の慣用句<sup>18</sup>

| 口が～                                                                                   | 口に～                                              | 口の～    | 口から           | 口を～                                                                                                                 |
|---------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|--------|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 口が裂けても<br>口が腐っても<br>口がうるさい<br>口がおごる<br>口が軽い<br>口が堅い<br>口が掛かる<br>口が悪い<br>口を過ぎる<br>口が重い | 口にする＊<br>口に出す<br>口に合う<br>口に蜜あり 腹<br>に剣あり<br>口に上る | 口の端に昇る | 口から先に生<br>まれる | 口を封じる<br>口を利く＊<br>口をつぐむ<br>口を濁す<br>口を滑らす<br>口を開く<br>口火を切る<br>口をつぐむ<br>口と鼻を塞ぐ<br>口を衝いて出<br>る<br>口を出す<br>口を挟む<br>口を抜く |

次に、日本語の「口」に関する慣用句をその典型機能に基づいて、「摂食行為」を表すものと、「言語行為」を表すものに分け、そして、その意味拡張とそれに対応するペルシア語の慣用表現の意味拡張を考察する。

### 5.2.1 「摂食行為」に関する慣用表現

「摂食行為」に関する慣用句において、「口」が「摂食行為を行う人間」を表す表現と、「口」が「味覚」を表す表現に分けられる。それぞれの例としては次のようなものがある。

#### 5.2.1.1 「口」が「摂食行為を行う人間」を表す用例<sup>19</sup>：

日本語：

口を減らす（摂食者を少なくする）

増えすぎた口を減らす、口減らし都市というイメージは、ちょっと衝撃的ではある。

「有菌（2005）」

この用例では、「口を減らす」は「摂食する人を減少させる」という意味を表している。「口」がその持ち主、つまり、「摂食を行う人間」を表現している。すなわち、「口」

<sup>18</sup> 表の中では＊は10回以上、繰り返しに使用されていた慣用句を示す。

<sup>19</sup> 「口」から「摂食を行う人間」への意味拡張の例は少ない。

の意味が、部分－全体関係に基づいて「人」を表している。従って、メトニミーによって慣用的意味が成立しているといえる。

#### ペルシア語：

なし

前述したようにペルシア語では、「دهن/دهان/dahan/dahān/口」から「摂食を行う人」への意味拡張は存在しない。しかし、上述の日本語の「口を減らす」をペルシア語に訳すと「نان خور را کم کردن/nān xor-e zīād-ī rā kam kardan/パンを食べる人を減らす（意識：扶養人を減らす）」になり、「نان خور・نانخور/nān xor/パンを食べる人（意識：扶養人）」という部分は慣用的な意味を持つ。次の用例では、

پدرم آب و ملکی دارد، اما نان خورش خیلی زیاد است.

pedaram ābo melkī dārad, amā nān xor-āš zīād ast.

父親は、地所や財産を持っているが、彼のパンを食べている人（意識：扶養人）も多い。

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』:1395）

「نان خور・نانخور/nān xor」は本来「パンを食べる人」という意味である。この具体的な意味から生じて、抽象的な「扶養者」という意味が表され、両者には、「他人の支えを得ている」という類似性がある。また、日常言語ではその両者の「文字通りの意味」と「抽象的な意味」が使用されるが、「パンを食べる人」は「معنای نزدیک/ma‘nāye nazdīk/近い意味」で、「扶養者」は「معنای دور/ma‘nāye dūr/遠い意味」である。「معنای نزدیک/ma‘nāye nazdīk/近い意味」を通じて、「معنای دور/ma‘nāye dūr/遠い意味」が理解され、「کنایه/kenāye/メタファー」によって意味が拡張されている表現であると考えられる。

#### 5.2.1.2 「口」は「味覚」を表す用例：

日本語：

口にする（食べる/言う）

フランス料理なんて普段口にすることがないので、感激しています。

（『分野別・日本語の慣用表現』 1992）

「口にする」とは「口に出して言う」と「食べる」という二通りの意味を持つ。つまり、「口にする」という表現は「言語行為」と「摂食行為」という口の二つの典型機能を結合的に表現している。田中（2002）は、「口にする」という形式では、動詞「する」がスキーマ的な行為しか表さないにも関わらず、それにより特定の行為、すなわち、「言語行為」と「摂食行為」を表現全体で表すと述べている。

上記の例文を見ればわかるように、ここでは、「口にする」は後者の意味を表し、摂食行為に焦点が当たっている。「口」が「容器」に例えられ、「口の中への実体の移動」

という意味を表し、「内—外」という空間的方向性を基盤とするメタファーが生じていると考えられる。

ペルシア語では、日本語の「口にする」と対照する「دهن زدن/dahan zadan/口に触れる（口に入れる/口にする）」という表現があるが、これについては後述することとする。

**口が奢る**（高級な物ばかり食べて、食べ物に贅沢になる）

節子：後でね、あら、すし富、味が落ちたんじゃない？

ちよ：アンタの口がおごったのよ

（『向田邦子シナリオ集VI、一話完結傑作選』：109）

上記の「口が奢った」という表現でも、「口」はその機能である「味覚」、そして、句全体の慣用的意味「食べ物に贅沢になる」ことを表している。前述のように、「口」は味覚を働かせる器官であり、その一つの主な機能は「食物をとること」である。ここでは、「口」の意味が基本語からその機能である「味覚」に、メトニミーによって拡張され、慣用的な意味が成立している。

日本語の上記の二つの表現は「口」によって「摂食行為」が表されている例である。それ以外に、「口を濡らす」「口を糊する」「口に合う」「口が肥える」「口に絶つ」などが「摂食行為」に関わる表現である。ペルシア語の「口」の慣用表現の中でもそのような例が見られる。例えば、「دهن خود را شیرین کردن/dahan-e xod rā šīrīn kardan/口を甘くする（甘いものやお菓子を口にする）」「دهن زدن/dahan zadan/口に触れる（口に入れる/口にする）」「دهن کسی آب افتادن/dahan-e kasī āb oftādan/人の口に水が出る（美味しそうで、よだれが出る）」「از دهن افتادن/az dahan oftadan/口から落ちる（食物が冷えて、不味くなる）」。

ペルシア語：

دهن زدن/dahan zadan/口に触れる（意訳：口に入れる/口にする/食べる）

(خطاب به مهمانان:) این چه جور غذا خوردنی بود؟ من همان وقت فهمیدم شامم خراب شده و شما نمی توانید دهن یز نید.  
(xatāb be mīhmānān:)īn če jūr qazā xordan-ī būd?man hamān vaqt fahmīdam šāmam xarāb  
šod-e va šomā nemī-tavānīd dahan bezanīd

（客に対してこう言う：）そんなに食べれないものだった？あなたたちがそれを口に触れさせることができなかったので（意訳：口に入れようとしなかったので）、夕食がまずかったのだとあのとき私も氣きました。

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』：726）

「دهن زدن/dahan zadan」は文字通りには「口に触れる」という意味がある。そこで、「口を何かに触れさせること」を通して「何かを食べる・口にする」ことを連想させ、このような文字通りの特徴が慣用句に写像される。すなわち、文字通りの意味から慣用的な

意味が成立し、「کنایه /kenāye/メタファー」の表現であると思われる。

### 5.2.2 「言語行為」に関する慣用表現

日本語とペルシア語では、「摂食行為」を表す表現に比べて「言語行為」を表す表現が圧倒的に多い。

「口が堅い」「口がほぐれる」「口を割る」「口が軽い」「口が重い」「口がすべる」「口が悪い」「دهن باز کردن/dahān bāz kardan/口を開く（意識：話し始める）」「دهن کسی لق/از دهن کسی پریدن/dahan-e kasī laq būdan/人の口が緩い（意識：口が軽い）」「از دهن کسی گرمی داشتن/dahān-e garmī daštan/口が暖かい（意識：口がうまい）」などが「言語行為」を表す慣用表現である。

日本語の「口」の「言語行為」を基にする慣用表現は、そのほとんどが「談話」「軽薄・軽率」「雄弁」「慎重」「膾炙」「介入」「箝口・緘黙」「漏洩」「一致」「口論」「強調」という概念と関わっているものである。次に、それぞれの用例を提示しながら分析を行う。

#### 軽薄・軽率に関わる用例：

「口が悪い」「口がしやすい」「口が軽い」「口がうるさい」などのような慣用句は、軽々しく、慎重さが無い言動を表す表現である。次に、例として「口が悪い」と「口が軽い」における意味拡張を見てみよう。

#### 日本語：

口が悪い（とかく悪くいう傾向がある）

ほかに言いようがないのかね。あいつの口が悪いのにはまいるよ。

（『分野別・日本語の慣用表現』 1992）

このうち「口が悪い」は、「相手の気持ちを傷つけることを平気で言う」という意味を表現している。ここでは「口」は話し方を表している。すなわち、「言語行為」が要求する「話し方」へ拡張している。

身体部位を用い、その典型行為（典型機能）を中心に「行為」のフレームに基づくメトニミーによつての意味拡張を考察した有蘭（2006）によれば、「行為」のフレームは、それに用いられる道具、その道具を用いる行為者、その行為を行う際に要求される技術や能力、その行為を行う方法、その行為によつて生じる副産物などという諸要素から形成されている。そして、行為を行う際に、身体部位が道具として機能するため、「道具」としての身体部位を表す形式で、行為フレーム内の他の要素を表すことができるものとしている。「口」の場合は「言語行為フレーム」を背景として、「口」は「身体」、「言語行為」、そして、その産物である「言語表現」との密接な関わりを持っている。

上記の「口が悪い」という表現では「言語行為を行うのが悪い」、「口」は、「言語行為」を行う際の「方法」、つまり「話し方」を表し、メトニミーによってその意味が拡張している。

### 口が軽い

あの方は見るからに口が軽そうでしたから遺書のことをすぐ教えてくれる筈です...

(『ドラマ 相棒 season 10』: )21

上記の用例では「口が軽い」という表現では、メタファーとメトニミーが絡み合って働いた結果として分析することができる。「口が軽い」はまず、「口を開ける動作が速い」という文字通りの意味が理解される。しかし、慣用的な意味として「秘密にすべき事とて口外しがちな性格であり、言うべきでないことまで話してしまう」という意味を持っている。すなわち、より一般的な意味から特定の意味へ、つまり、「口を開ける動作の速さ」から「言語行為の速さ」へのメタファーによる意味拡張が生じている。また、「口が軽い」の文字通りの意味である「言語行為を行うのが速い」ということを原因として、「秘密などをすぐ人に漏らす」という結果が生じ、「原因—結果」に基づくメトニミーでもあると考えられる。

### ペルシア語：

بد دهن/bad dahan būdan/口が悪い

上記の慣用表現は日本語の「口が悪い」と対応しており、「口の悪い、口ぎたない」という意味を表す。

این یوسف چقدر بد دهن است! می گفت: داماد از آن دزد های بی شرف است!

īn yūsuf čeqadr bad dahan ast!mī-goft dāmād az ān dozd-hāye bī šaraf ast.

ユーソフはどれだけ口の悪い奴なんだ！新郎のことを不名誉な泥棒だと言っていた！

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:140)

日本語の表現と同様に、上記のペルシア語の用例でも、「دهن/dahan/口」は「話し方」を表している。これは、「علاقه آلیت/’ alāqe-ye ālyat /手段や道具の理由/関係/関係の理由 (主体—手段)」に基づく、「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」による意味拡張である。つまり、「口」の意味がその機能である「話し/話し方」に拡張している。

دهن کسی لاق/bad dahan-e kasī laq būdan/人の口が緩い (意識：口が軽い)

اشتباه از این دهن لاق بود! عجیب نیست او همیشه دهن لاق است.

eštebāh az īn dahan laq būd!ajīb nīst,ū hamīše dahan laq ast.

過ちは、こいつの口の軽さだ！おかしいことではない！彼/彼女はいつも口が緩いんだ！（意訳：口が軽いんだ！）

（「Sīmāye Xānevāde」）

上記の「دهن کسی لق بودن/dahan-e kasī laq būdan」は文字通りには「口が緩くて、ぐらぐらしている状態にある」という意味がある。例文での考察からも分かるように、「物言いが軽率であり、秘密などを不用意に口外する」ことを意味する。つまり、「口が緩くて、ぐらぐらしている状態にある」を通して「物事の発言が軽率であり、秘密などを不用意に口外する」と捉えられる。すなわち、文字通りの意味から抽象的な意味が発生している。そのため、この表現は全体的に、「کنایه/kenāye/メタファー」となる。

また、「دهن کسی چفت و بست نداشتن/dahan-e kasī čeft-o bast nadaštan」「دهن لقی کردن/dahan laq-ī kardan」もペルシア語では「口が軽い」と対応する表現として用いられている。

談話に関わる用例：（口裏を合わせる・口を合わせる）

日本語：

口を合わせる

関係者の証言はどうも口を合わせている疑いがある。（打ち合わせをしてから証言しているようだ）

（『分野別・日本語の慣用表現』 1992）

「口を合わせる」は表現全体としては「話の内容や意見を一致させる」という意味を表しており、「口」は言語行為の結果生じる副産物、つまり、「話の内容/意見」を表す。ここでは、「意見を一致する」ことが言語行為の結果であり、「原因—結果」メトニミーによる意味拡張であると考えられる。

ペルシア語：

なし

ペルシア語では、「口」の慣用表現の中では、「話の内容や意見を一致させる」という意味を表す表現が存在しないが、日本語の「口を合わせる」とほぼ対応する「ساخت و پاخت/sāxt-o pāxt kardan/共謀する・談合をやる」という一般的な表現がある。しかし、ペルシア語のこの表現の意味は、日本語の「口を合わせる」より意味が広く、「談合」以外に「共謀」の意味も表す。

مهندسین و شرکت پیمانکار با هم ساخت و پاخت کرده اند و به مردم می گویند بروید از شورای قبل پولتان را بگیرید.  
mohandesīn va šerkat-e peīmankār bā ham sāxt-o pāxt karde-and va be mardom mī-gūyand  
beravīd az šorā-ye qabl pūletān rā begīrīd.

エンジニアたちと請負業者は口を合わせ、人々に、「あなたたちの（支払った）お金を前の議会から取り戻してください。」と言っている。

（「Sīmāye Xānevāde」）

### 雄弁に関わる用例：

日本語：

口がうまい（言葉たくみに相手をその気にさせる）

とにかく口のうまい人で、いつの間にか契約書に判を押させられていた。

（『分野別・日本語の慣用表現』 1992）

「口の（が）うまい」は、「話し方が巧みで、人の関心を引くようなこと」を指す。すなわち、「言語行為を行うのが上手なこと」を表している。ここでは、「言語行為」の意味は隣接関係に基づくメトニミーによって、「話術/話力」に拡張されている。一方、ペルシア語では「口が上手い」と意味的に対応する「چرب زبانی کردن・چرب زبانی/čarb zabānī・čarb zabānī kardān/口のうまい」という慣用表現がある。例としては、

ペルシア語：

چرب زبانی کردن・چرب زبانی/čarb zabānī・čarb zabānī kardān/油っこく舌/油っこく舌をする/油っこく能弁（意訳：口のうまい）

وقتی سوار ماشینم شد،خودش را مریم معرفی کرد و با چرب زبانی اعتمادم را جلب کرد و طرح دوستی ریخت.  
vaqtī savāre māšīnam šod,xodaš rā Maryam mo' arefī kard va bā čarb zabānī etemādam rā jalb kard va tarhe dūst-ī rīxt.

彼女が私の車に乗り込んできたとき、彼女は自身をマリヤムという名前で紹介し、油っこい舌（意訳：口の上手さ）で私の信頼を得て付き合おうとした。

（「Hamšahri On Line」 2013.9.27）

上記の「چرب زبانی کردن・چرب زبانی/čarb zabānī・čarb zabānī kardān」は意味的に日本語の「口が上手い」と類似しているが、この表現では、「人の関心を引くこと」を行う器官は「口」ではなく、「舌/能弁」と見なされている。

「چرب زبانی کردن・چرب زبانی/čarb zabānī・čarb zabānī kardān/口のうまい」には「油っこい舌」という文字通りの具体的な意味と、慣用的な意味として「人の関心を引くこと」がある。「舌が油っこい」はこの表現の「معنای نزدیک/ma'nāye nazdīk/近い意味」で、「人の関心を引くこと」はその「معنای دور/ma'nāye dūr/遠い意味」である。二つの意味の間に写像が起こり、「能弁」という抽象的な意味を表すようになっている。これは「کنایه/kenāye/メタファー」に基づく意味拡張である。

慎重に関わる用例：

日本語：

口が堅い

口が堅いのだけが私の取り柄<sup>え</sup>です。

(『分野別・日本語の慣用表現』 1992)

上記の用例における「口が堅い」は、字義通りの意味である「口を堅く閉じて、他者によって開かせることが困難である。」と「言語行為を容易に行わない。」という慣用的意味を表す。この場合、前者の意味と後者の意味は原因と結果の関係にあると考えられ、「秘密をむやみに口外しない」という慣用的意味が、原因—結果のメトニミーに基づいて成り立っているわけである。

他にも「口が堅い」以外に「口が重い」「口が腐っても」「口が裂けても」「口を慎む」などが「慎重さ」に関わる表現として挙げられる。

ペルシア語：

دهن کسی قُرس بودن/dahan-e kasī qors būdan/口が堅い

ペルシア語では日本語の「口が堅い」と対応する「دهن کسی قُرس بودن/dahan-e kasī qors būdan/口が堅い」という慣用表現がある。

فاطی گفت : یک چیزی بگویم قسم می خورید ( به کسی ) نگوئید؟ من گفتم : به جان تو نمی گویم، به جان تو که عزیز تر از جان خودم است... اسدالله میرزا گفت : این پسر مثل خود من می ماند؛ خاطرت جمع باشد، دهنش از دهن همه ما قُرس تر است.

Fātī goft: yek čīzī begūyam qasam mī-xorīd (be kasī) nagūīd? man goftam: be jān-e to nemī-gūyam, be jān-e to ke azīz-tar az jān-e xodam ast...asadollah mīrāzā goft: īn pesar mesl-e xode man mī-mānad ; xāterat jān bāšad , dahanaš az dahan-e hameye mā qorstar ast.

ファティはこう言った：私が話したら（誰にも）言わないと誓う？

私は言った：自らの命より愛おしい君の命にかけて誓うよ。

アサドッラーミールザーは言った：こいつも私と同じようなものだ；安心して！私たちの誰よりも口が堅いよ。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』 :727)

ペルシア語の「دهن کسی قُرس بودن/dahan-e kasī qors būdan/口が堅い」という表現には、日本語の「口が堅い」と同様に、「口が強く、しっかり閉じている」と「言ってはなら

ないことを他言しない。また、そのような性質である」という意味を持つ。ここでは、「口が強く、しっかり閉じている」の文字通りの意味、つまり「معنای نزدیک/ma‘nāye nazdīk/近い意味」を通して、「معنای دور/ma‘nāye dūr/遠い意味」つまり、抽象的な意味の「言っ  
てはならないことを他言しない。また、そのような性質である」が捉えられ、「کنایه/kenāye/  
メタファー」に基づく意味拡張だと考えられる。

### 膾炙（かいしゃ）に関わる用例：

「口にのぼる」、「口の端にのぼる」のような慣用表現は「膾炙」すなわち、広く世間  
に知られ渡ることを表している。次にその用例を取り上げる。

#### 日本語：

##### 口にのぼる

その言葉を口にのせ、吟味し、よさそうだと胸にしまい込む。

（『朝日新聞、天声人語』 2011.1.23）

上記の「口にのぼる」は、「うわさになる。話題になる」という意味を表す。この慣  
用句では、「口」が「容器」として見なされている。田中（2002）は、「口」は、それ自  
体が容器としても、身体という容器の一部としても捉えられるとの考察を行い、「口を  
閉ざす」「口を開く」のような表現では、容器、つまり「口」の開閉に焦点が当てられ  
ているが、「口に出す」「口にのぼる」のような表現では容器の外への内容物の「移動」  
（またはその否定）が焦点化されていると述べている。ここでは、「容器の外への内容  
物の移動」が「話題になる」という二つの事柄が時間的に連続し、メトニミーに基づく  
慣用的意味が成立していると考えられる。

#### ペルシア語：

دهن به دهن گشتن/dahan be dahan gaštan/口から口へ回る（意訳：口にのぼる）

ペルシア語でも、「広く世間に知られ渡ること」を意味する「دهن/dahan/口」の慣用表  
現が見られる。「دهن به دهن گشتن/dahan be dahan gaštan/口から口へ回る（意訳：口にのぼる）」  
「توی دهن مردم انداختن/tūye dahan-e mardom andāxtan/世人の口の中に落とす（意訳：世人の  
口にのぼらせる）」がその例である。

داستان اختلاف شدید آنها در تمام محله دهن به دهن می گشت.

dāstān-e extelāf-e šadīd-e ānhā dar tamām-e mahale dahan be dahan mī-gašt.

彼らの激しい対立の話は、口から口へと回っていた（意訳：口にのぼっていた）。

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』 :725）

上記の表現では「口」が「話し広まること」を意味しているが、実際には「口」は「話すこと」や「発言すること」の「手段や道具」であり、ここでは、「علاقه آیت/alāqye ālyat /手段や道具の理由/関係/関係の理由」(主体—手段)に基づいてその意味が拡張しているため、メトニミー (مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー) であると考えられる。

### 介入に関わる用例：

「口」を用いた身体語彙慣用句表現の中では「口を出す」「口を挟む」「口を入れる」などのような表現が「他人が話している間に発言して話を邪魔する」という意味を表している。

#### 日本語：

##### 口を出す

ああ、もうやかましか、<sup>おなご</sup>女子がいちいち男の仕事に口（を）出すな！

(『山田洋次シナリオ集 (同時代ライブラリー76)、「息子・家族」』：156)

##### 口を挟む

その侃々諤々に口をはさませてもらえば、英語重視が日本語軽視を誘わないよう、気を付けたい。

(『朝日新聞、天声人語』 2011.6.17)

上記の「口を出す」と「口を挟む」は、「他人の話の途中で、話に割り込んで意見を言ったり、言語表現を発する」ことを表す。両表現では「口」が「言語」及び「意見」を、「出す」が「相手に示す」、「挟む」が「間に割り込む」ことを表している。すなわち、句全体は連合した形ではなく、句の構成要素の意味が慣用的意味の部分をそれぞれ引き受けているのである。

「口を出す」でも「口を挟む」でも、句全体が「言語行為」、「口」自体が「言語表現」を表すと理解される。両方では、「原因—結果」に基づくメトニミーの作用により慣用的な意味が生まれている。つまり、原因を通じて言語行為の結果である「他人の話に割り込み介入する」と認識するメトニミーが作用したと考えられる。

#### ペルシア語：

##### なし

5.1.2 で触れたように、ペルシア語では、「口」から「話・発言」の意味への拡張がほとんど起こらない。ペルシア語においては、「口」自体に、「他人が話している間に発言

して話を邪魔する」という例は見当たらないが、しかし、意味的には上記の日本語に相当する「توی حرف کسی دودن/tūye harf-e kasī davīdan/人の話の中に走り出す（意識：人の話の中に割り込む）」「پردن میان حرف کسی/parīdan mīān-e harf-e kasī/人の話の中に飛び込む（意識：人の話の中に割り込む）」「حرف کسی را بردن/harf-e kasī rā borīdan/人の話を切る」といった慣用表現が存在している。

**توی حرف کسی دودن**/tūye harf-e kasī davīdan/人の話の中に走り出す（意識：人の話の中に割り込む）

شرکت کننده دیگری به میان صحبت‌های او دويد ( و ) گفت، من و تو نماينده سَمَر هستيم، اگر ما برنده شويم يعنى سمر سربلند و برنده شده..

šerkat konande-ye dīgar-ī be mīān-e soḥbat-hāye ū davīd (va) goft, man va to namāyande-ye samar hastīm, agar mā barande šavīm, yānī samar sarboland va barande šode...

他の参加者は、彼/彼女の話の中に走り出して（意識：話の中に割り込んで）、こう言った「我々は、サマルの代表者だ、もし我々が勝てば、サマルには栄誉がもたらされ、勝利したという意味だ。」と...

（「Hamšahri On Line」 2014.02.02）

ペルシア語では上記の「توی حرف کسی دودن/tūye harf-e kasī davīdan/人の話の中に走り出す（意識：話の中に割り込んで）」は「کنایه/kenšye/メタファー」と見なされる。

「توی حرف کسی دودن/tūye harf-e kasī davīdan」は文字通りでは「人が話している中に走り出す」という意味となる。つまり、人が話しているときに、他の者が走り出したら、話し手の話が切断されるという意味から生じて、抽象的な「人が話している途中で、横から言葉を入れる」こと、すなわち、「言葉を割り込ませる」ことを表し、両者には「話の切断」という共通点がある。ここでは、文字通りの意味から抽象的な意味へ「کنایه/kenaye/メタファー」により発生していることになる。

**箝口・緘黙に関わる用例：**

日本語：

口を閉ざす

迂闊に刺激すると、却って口を閉ざす恐れがある。あの年頃は難しいからな。

（『麒麟の翼』：121）

「口を閉ざす」は文字通りの「口を閉める」と「沈黙を守り、一切しゃべらない」という慣用句の意味を持っている。つまり、句全体で表す「口の開閉」という「口」自体の動きの意味を通して、「沈黙を守る」という慣用的意味が表される。ここでは、「口の

開閉」が「沈黙を守る」ことと時間的に隣接し、表現全体の意味がメトニミーに基づく意味拡張だと考えられる。「口」の慣用句の中では、「口を閉ざす」以外に、「箝口・緘黙」を表す「口をつぐむ」「口を慎む」「口を閉ざす」「口を拭う」「口を封じる」「口を塞ぐ」「口を結ぶ」という表現がある。

ペルシア語：

دهن خود را بستن/dahan-e xod rā bastan/口を閉ざす（意識：沈黙、秘密を守り、一切しゃべらない）

ペルシア語では、「دهن خود را بستن/dahan-e xod rā bastan/口を閉ざす」「دهن خود را چفت کردن/dahan-e xod rā čeft kardan/口を掛け金で閉める」「دهن کسی را بستن/dahan-e kasī rā bastan/人の口を封じる」「دهن خود را باز نکردن/dahan-e xod rā bāz nakardan/口を開かない」「زیب دهان/zībe dahān-e xod rā kešīdan/口のチャックを閉める」などが「箝口・緘黙」を表す。その中で、「دهن خود را بستن/dahan-e xod rā bastan/口を閉ざす」は日本語の「口を閉ざす」とほぼ同じ意味を持つ。

آقای مظفری همه اش سفارش می کرد که دهنمان را ببندیم. نمی خواست پیش پیش قضیه درز کند.  
āqāye mozaferī hame-aš sefāreš mī-kard ke dahan-e-mān rā bebandīm.nem-ixāst pīš pīš qazyē darz konad.

モザッファリーさんは、あらかじめストーリーが分かってしまうのが嫌で、私たちが口を閉ざすように常々指示していた。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:725)

ここでは、具体的な動作である「口を閉める」を通じて、抽象的な「沈黙を守り、一切しゃべらない」ことを表し、両者には「口を閉めて、活動しない」という類似性がある。そこで、この表現が「کنایه/kenāye/メタファー」によって意味拡張されている。

漏洩に関わる用例：

「口が滑る」「口に出す」「口を割る」などは、密事などが漏れること、秘密を漏らすことを表す表現である。

口が滑る

右京：アポを取るとき、そんなことを申し上げんですか？

尊：云ったかな.... ？

釜田：云ったよ、きみ！

尊：口が滑って、そんなようなこと云っちゃったかも.... 誤解させたならば謝ります。

(『ドラマ 相棒 season 10』：)14

「滑る」とは「物の表面をなめらかに動く」ことを意味する。ここから、「口が滑る」ことは「口がなめらかに動く」という文字通りの意味になる。「動作の速さでコントロールは不可能」という共通点に基づいて、「口が滑る」という具体的な口の動作の意味から、言語行為の「言うべきでないことまで言う。言うつもりでないことをうっかり言ってしまうたり、書いてしまったりする」という抽象的な意味にメタファーによって拡張する。さらに、「動作の速さ」ということを「原因」として「コントロールが不可能になる」という結果が生じ、メトニミーが働いているように思われる。そのため、「口が滑る」がメタファーとメトニミー両方に関わる表現であると考えることができる。

ペルシア語：

از دهن کسی پریدن /az dahan-e kasī parīdan/口から飛び出る（意訳：言うてはいけないことをうっかり言ってしまう）

「از دهن کسی پریدن /az dahan-e kasī parīdan/口から飛び出る」「از دهن کسی رفتن /az dahan-e kasī dar raftan/口からそれて出る」などの表現が「言うべきでないことを言ってしまう」ことを表す慣用表現である。

ناگهان ساکت شد مثل اینکه این کلمات را نمی خواست بگوید، ولی از دهانش پریده بود.

nāghān sāket šod, mesle īnke īn kalamāt rā nem-īxast begūyad, valī az dahanaš parīde būd.

突然、彼/彼女は黙り込んだ。そんなことを言いたくなかったようであったが、口から飛び出てしまった（意訳：うっかり言ってしまった）のである。

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』:728）

上記の「از دهن کسی پریدن /az dahan-e kasī parīdan/口から飛び出る」は字義通りの「口からつばや食べ物が勢いよく外へ出る」と「言うてはいけないことを、うっかり言ってしまう」とい比喩的な意味を持つが、話し手に対しては後者の意味が意図されている。これは、人が何かを食べるとき、あるいは話すとき、無意識に口から何か飛んで来ることを連想し、身体的な経験から由来している「کنایه /kenāye/メタファー」の表現であると思われる。

一致に関わる用例：

日本語：

口を揃える

各国代表が口を揃えて地球環境の保護を訴えた。（各国代表の誰もが…）

（『分野別・日本語の慣用表現』 1992）

「口を揃える」では「口」は身体部位と因果的關係である「言語表現」の意味となり、句全体は「複数の人が同時に同じことを言う」という慣用的意味を持っている。ここで

は、慣用的な意味は「口」の字義的な意味に時間的に隣接し、メトニミー的に拡張している。

ペルシア語：

なし

上記の日本語の「口を揃える」では、「口」は「話し・発言・意見」を表し、全体として「発言・意見が一致する」を表す。前述したように、ペルシア語では「口」の意味は「話し・発言・意見」に拡張しないので、「口」の慣用表現の中では「一致」を表す表現が存在しない。しかし、「一致する・一致させる」という意味を表す「یک کاسه کردن/yeḵ kāse kardan/一つのボウルにする（入れる）」という慣用表現があり、「話し」及び「意見」などにも使われる。例えば、

یک کاسه کردن/yeḵ kāse kardan/一つのボウルに入れる（意訳：口を揃える）

حرفهایمان را یک کاسه کنیم، که به مادر چه بگوئیم.

harf-hā-yemān rā yeḵ kāse konīm, ke be mādar če begūim.

お母さんに何と言うべきか、話を一つのボウルに入れよう！（意訳：口を揃えよう！）

（「Sīmāye Xānevāde」）

上記の「یک کاسه کردن/yeḵ kāse kardan」は、文字通りには「一つのボウルに入れる」ということであり、「いくつかの食べ残された食べ物あるいは、料理を一つのボウルに入れる」という意味から発生する。しかし、ここでは、目に見える「種類の異なるものを一緒にして均一にする」ことを通して、目に見えない「一致する・一致させる」ことを表している。この二つの間に「一緒になる」という共通点が「کنایه/kenāye/メタファー」に派生したと思われる。

口論に関わる用例：

日本語：

口角泡を飛ばす

両チームの応援者は口角泡を飛ばしながら激論を交わしている。

「口角泡を飛ばす」は、「口からつばを飛ばす」という文字通りの動作としての意味と、「夢中になり、激しい口調で話したり、議論したり様子」という慣用的意味の二つの意味を持つ。というのは、「口角泡を飛ばす」の表す字義通りの動作と「激しく議論する」ということが同時に生じる場合が多く、また時間的に隣接しているため、メトニミーに基づく意味拡張である。一方、ペルシア語では、表現的に、「口角泡を飛ばす」に類似する「دهن کسی کف کردن/dahan-e kasī kaf kardan/口が泡立つ」という慣用表現がある。

しかし、意味的に、日本語の表現とは少し異なり、「非常に怒る、いきおどる」という意味を表す。

ペルシア語：

دهن خود را جر دادن/dahan-e xod rā jer dādan/口を引裂く（意訳：口論や叫びながら相手に対して汚い言葉を使う）

چته این قدر دهننت را جر میدهی؟ من ازت گوشت می خواهم (ادامه حذف)

čete īn qādr dahan-et rā jer mī-dahī?man azat gūšt mī-xāham.(edāme hazf)

どうしてこんなにも口を引裂く（意訳：叫んで汚い言葉を使う）の？私は、君から肉をもらおうと...（後略）

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:726)

この表現が日本語の上記の「口角泡を飛ばす」と同様の「口論」を表している。しかし、その字義通りの意味からもある程度分かるように、ペルシア語の表現は日本語の表現より激しく、口論や叫びながら相手に対して汚い言葉を使うという意味も表している。

「جر دادن/jer dādan」は「引っ張って裂く。無理に裂く」という意味を持つ。この慣用表現には「口を引っ張って裂く」ということから、「口を通常より大きくして口論し、叫びながら相手に対して汚い言葉を使う」ことを連想させる。このような字義通りの特徴が慣用句に写像され、抽象的な意味を表すようになる。こうして、「جر دادن/jer dādan/引き裂く」という文字通りの意味から「کنایه/kenāye/メタファー」によって慣用表現の意味が成立していると思われる。ここでは、表現全体の拡張によって意味が決まっている。

強調・誇張に関わる用例：

「口を極める」「口を尽くす」のような慣用句は、「強調」という意味を表す表現である。

日本語：

口を極める

口を極めて此思立を止めたのである。

(『日本語大辞典 第二版』 2001)

「口を極める」は表現全体としては「ありたけの言葉を尽くして言う。あらゆる言い方でいろいろと述べる」の意味を表している。「口」は「言語表現」を表しており、「極める」は「最高の水準まで上げる」という表現内容に関わるものである。ここでも、「原因—結果」のメトニミーに基づいて、言語行為の結果である「極限にまで言い立てる」ということに焦点が当てられている。

ペルシア語：

なし

ペルシア語では、日本語の「口を極める」に対応する慣用表現がない。「誉めたり」、「けなしたり」するときに、最大級の言葉を使う様を表す「اغراق کردن/eqrāq kardan/誇張する」と「مبالغه کردن/mobāleqe kardan/誇張する」があるが、慣用表現ではなく一般的な動詞句である。

نباید درباره منافع فوری این روش درمانی اغراق کرد.

nabāyad dar bāreye manāfe' e forye īn raveše darmānī eqrāq kard.

この治療方法の迅速性の利点について、口を極めるべきではない。

(「Hamšahri On Line」 2013.12.20)

### 5.2.3 その他

#### 感情と関わるもの

日本語の「口」の慣用表現の中では、上述の「摂食行為」や「言語行為」を表すもの以外に、精神的な状況に関わる「口元がゆるむ」(満足感)、「口元を歪める」(不機嫌)

「開いた口が塞がらない」(<sup>あぜん</sup>咄然)という表現もある。次の例として、「開いた口が塞がらない」における意味拡張を考察する。

日本語：

開いた口が塞がらない

ごちそうになっているくせに「まずい」と文句をつけるのだから、開いた口が塞がらないね。

(『分野別・日本語の慣用表現』 1992)

「開いた口が塞がらない」は「あきれかえる様、あつけにとられる様」という意味となり、上の例は「あきれて何も言えないほど常識を知らない人だ」の意味を表している。この表現には、「口を開けたままである」の字義通りの意味と「あきれてものが言えない」という慣用的な意味がある。つまり、前者は身体的状況、後者は精神状態を表し、この二つの事柄が時間的に隣接しているため、メトニミーによる意味拡張といえる。

ペルシア語

ペルシア語における「口」の慣用表現の中には、「感情に関わる」表現は多く存在していない。しかし、上記の日本語の「開いた口が塞がらない」に対応する「دهان کسی باز/داهان کسی باز/dahān-e kasī bāz māndan/人の口が開いたままになる」という表現があり、「驚きのあ

まり口が開く、咄然とする」という意味を表す。この表現が「突然のことや、意外なことに驚く様」を表すので、ほとんどが「دهان کسی از تعجب باز ماندن/dahān-e kasī az ta'ajob bāz māndan/人の口が驚きで開かれた」という形で用いられている。

دهان کسی باز ماندن/dahān-e kasi bāz māndan/口が開いたままになる（意訳：突然のことや意外なことに驚く）

وقتی این خبر را به خانواده محترم دادم، دهان همه از تعجب باز ماند. خبر این بود: به اصغر زاپاس ماشین نو دادند، یک سمند صفر صفر صفر!!

vaqti īn xabar rā be xānevāde-ye mohtaram dadam, dahān-e hame az ta'ajob bāz mānd. xabr īn būd: be asqar zāpās māšīn-e noū dadand, yek samand-e sefr-e sefr-e sefr!!

この知らせを敬愛する家族に知らせると、驚きのあまり皆の口は開いたままになった。知らせはこうであった：アスガル・ザパスさんに新車が与えられたが、ピカピカの新車のサマンドだよ！

（「Hamšahri On Line」 2009.01.08）

この慣用表現では、具体的な動作である「口が開放した状態」になる。つまり、「دهان معنای باز ماندن/dahān-e kasi bāz māndan/口が開いたままになる」の近い意味（معنای نزدیک/ma'nāye nazdik）を通じて、抽象的な「突然のことや意外なことに驚く様」の遠い意味（معنای دور/ma'nāye dūr）が表されている。その慣用的な意味が、不意の出来事に驚いたときに思わず「口が開いたままになる」という身体的な状況になる「کنایه /kenāye/メタファー」によって成り立っている。

### 5.3 まとめ

第5章において、日本語の「口」とペルシア語の「دهان/dahān/口」の意味拡張と慣用句の成立について言及した。方法として、まず、「口」と「دهان/dahān/口」の意味を、「基本義」と「派生義」の2種類に分け、それぞれの例を提示しながら考察した。その結果、両言語では、「口」の基本義はほとんど同義であり、「人間と動物の顔の下にあるあな状の部位、発声器官と飲食物を取り入れる部分であり、唇、歯、舌などを備える器官」となっている。そして身体部位とする基本義から、メタファーやメトニミーによって意味が拡張されていることが分かった。

「手」の意味拡張と同様に、両言語の「口」の意味拡張を「両言語における共通の意味拡張」、「日本語特有の意味拡張」及び「ペルシア語特有」に分けることができる。それぞれの例は次のようなものである。

## 両言語における共通の意味拡張

両言語では「言語行為」と「摂食行為」という口の主な機能に注目され、その意味が隣接性によるメトニミーに基づいて「基本義」から「摂食行為」及び「言語行為」へ拡張されている。日本語では「口」の意味が「話すこと」、ペルシア語では、「話し方・話す能力」に拡張されたものが見える。「口で言うほど...」「口が悪い」「دهان گرم داشتن/dahān-e garm dāštan/口が暖かい（話し方が魅力的だ）」がその例となる。

また、両言語の「口を付ける」「دهن زدن/dahan zadan/口に入れる・口にする」などの例が、口のもう一つの機能である「摂食行為」による意味拡張である。

両言語では、「口」の形状の類似性にも注目され、メタファーに基づいて、身体部位である「口」から「通り抜けることができる空間・物を出し入れする所」、「食器や物を出し入れをする所」という意味へ拡張されたこともある。「瓶の～」「非常～」「دهانه بطری/dahān-eye botrī/瓶の口」「دهانه غار/dahān-eye qār/洞窟の口」はその例である。

## 日本語の特有の意味拡張

日本語では、身体部位「口」からの意味拡張がペルシア語に比べて多い。つまり、日本語の「口」のいくつかの意味拡張がペルシア語には見当たらない。日本語の「物事の初め。最初：序の口」「種類の一つ：飲める口」「入っておさまる所：就職口」がペルシア語では存在しない「口」の意味拡張の例であり、日本語特有のものであると思われる。

## ペルシア語の特有の意味拡張

一方、「口」から「気鳴楽器」「歌」「歌声の助数詞」という意味拡張はペルシア語の「口」の特有の意味拡張である。

## 両言語における「口」に関する慣用表現の意味考察の結果

両言語では、「口」自体の「基本義」と「派生義」を提示し、その次に、日本語の「口」に関する「慣用句」とそれと対応するペルシア語の「口」の慣用表現の意味拡張について考察を行った。方法としては、日本語の「口」の慣用表現をその典型的機能に基づき、「摂食行為」を表すものと「言語行為」を表すもの、そして、その他のこの二つに含まれないものに分類し、メタファーやメトニミーによる意味拡張の考察を行い、それぞれの表現に対応するペルシア語の表現を提示し、意味の分析を行った。その結果として、「摂食行為」を表す日本語の「口」は、「人」や「味覚」に拡張するのに対して、ペルシア語においては、「味覚」のみを表していた。すなわち、ペルシア語では「口」から「人」へ拡張が存在しない。そして、「言語行為」の場合、日本語では「話す能力/技術」、「話し方」、「話（の内容）」に拡張され、ペルシア語では、「話す能力/技術」、「話し方」への意味拡張が発生していた。つまり、ペルシア語では、「口」から「話そのもの」への意味拡張がなされていたことが明らかとなった。また、「目」と「手」の慣用表現と

同様に、日本語では、メトニミーによる意味拡張が多くを占めるのに対し、ペルシア語では「کنایه/kenāye/メタファー」の方が多く見られた。

## 第6章：日本語とペルシア語の「身」を含んだ慣用句の対照

### 6.1 「身」の意味分析

日本語の話者の実言語運用の調査結果に基づくと、「身」に関する慣用句は9.67%の使用率を占め、その用例は86に次いで、「目」「手」「口」の次いで、4番目となっている。

一般的に、身体語彙というのは、身体の各部位の名称である。林（2002）によれば、「身体語彙」というのは、基本的に身体の各部位名であり、「目」「鼻」「口」「耳」のように、体の特定の部位や器官と、「顔」「頭」「胸」「腹」のように、一定した部分を指している。しかし、「全身部」に属する「身」「血」「骨」のような身体語彙に関してはこの二つのカテゴリーに含まれるとは言い難い。実際、その名称からも分かるように、「全身部」に属する身体語彙は「血」や「骨」のように、全身にわたり捉えられる性格のものであるか、又は、「身」のように、「身体」そのものを指すものがある。

本章では、「全身部」に属する身体語彙の中でも、「身」に絞って考察を行うこととする。具体的には、まず日本語とペルシア語における様々な辞典に基づいて、「身」の意味を検討する。そして、日本語の「身」に関する慣用表現の用例を取り上げ、メタファーやメトニミーなどの認知言語学の手法を用い、そしてペルシア語の慣用表現と照らし合わせ、その意味拡張を追及する。

『日本語国語大辞典』、『大辞林』、『大辞泉』、『広辞苑』、『日本語大辞典』、『明鏡国語辞典』といった各日本国語大辞典も「身」の見出しのもとに記述されている意味を参照にし、日本語における「身」の基本的意味と派生的意味が辞書でどのように記述されているかを見てみよう。

#### 6.1.1 日本語の場合

日本語では「身」「体」「身体」「肉体」という言葉が同義語である。「体」は日常会話では最も一般的な言い方で、幅広く使われている。そして、「身体」は公的な文章や熟語を作る場合などに使用されることが多い。「肉体」は生身の人間や性的な欲望の対象として用いられる。「身」「体」「身体」「肉体」の中で慣用表現が多いのは「身」である。林（2002）によれば、「体」や「身体」は、対象を身体的な、かつ肉体的な観点から捉え、それに対して、「身」は同じ対象でも、主に、概念・抽象的な観点から捉えているようである。すなわち、「体」や「身体」の場合は「人間の肉体」が具体的な対象として、つまり、「目に見え、手に触られる」ものとして捉えるに対して、「身」は主に、抽象的な対象、つまり、「目に見えなく、手に触れられない」ものとして捉える。次に、その「基本義」と「派生義」が辞書でどのように記述されているかを見てみよう。

#### 【「身」の基本義】

##### <名>

- ・ 生きている人または、動物のからだ。「茂みに～を隠す」「～を犠牲にする」
- ・ 我が身。自分自身「～を犠牲にする」「信仰に～を捧げる」
- ・ 身体。肉体「～をよじって笑う」

### 【「身」の派生義】

#### 1. 社会的存在としての自分のありようを言う語。

- ・ 地位。身分。分際「流浪の～となる」「～のほどを知れ」
- ・ 立場「他人の～になって考える」
- ・ 身持ち「～が修まらない」

#### 2. 自分が何かをやろうとする心。誠心。「勉強に～が入らない」

#### 3. あるものの本体部分。付属部分や表面部分に対していう。

- ・ 皮や骨に対し、食べられる部分。肉「魚の～をむしる」
- ・ 容器の、ふたに対して、ものを入れる部分。また、ふた付きの鏡などで、ふたに対して、本体の方。「～とふたとが合わない」
- ・ 刃の、<sup>さや</sup>鞘に収まっている刃の部分。刃身「～が鞘に入らない」
- ・ 木の、皮に包まれた部分。
- ・ 衣服の袖・襟などを除き、胴体を覆う部分

#### 4. 身振り「少し案じる～ありてうなづき」

#### 5. (財布のなかみの意か) 金銭を言う、盗人仲間の隠語

### <代>

- ・ 一人称の人代名詞。自称。中世、近世において、男子がやや優越感を持って、自分を指している語。
- ・ 二人称の代名詞。対称。接続語「お」「おん」を伴って、相手を指して言う。「御身」

### 6.1.2 ペルシア語の場合

一方、日本語の「身」に対応するペルシア語の「身」が、ペルシア語では何を意味しているかを『Farhang-e Moīn』『Loqat nāme-ye Dehxodā』『Farhang-e Fārsye Amīāne (ペルシア語俗語大辞典)』『Farhang-e Amīd』といったペルシア語辞典を参考にした上で、次のようにまとめる。

ペルシア語の場合、人間の体を指す言葉には、「بدن/badan/身・体・肉体・身体」「تن/tan/体・身体」「جسم/jesm/体・肉体」「اندام/andām/体」「جثه/jose/体・体格」「پیکر/peykar/体・肉

体」「کالبد/kālbad/身体」「تنه/tane/体・身体」「قلب/qāleb/肉体」という言葉が挙げられる。しかし、それぞれが日本語の「身」とは大きく違い、身体的かつ肉体的な意味のみを表し、抽象的な観点から捉えられないと思われる。実際に、ペルシア語では、「身」の肉体的な側面と抽象的な側面が区別され、それぞれが独立的に名づけられている。そのため、上述のペルシア語の言葉が日本語の「身」と完全に対応するとは言い難く、また慣用句表現の中に現れることが非常に少なくなっている。しかし、ペルシア語においては、「جان/jān」という言葉があり、日本語の「身」の抽象的な側面とある程度対応していると言える。次にそれぞれの基本的意味と派生的意味が辞書でどのように記述されているかを見てみよう。

### 【「بادن/badan」の基本義】

『Farhang-e Moīn』では、「بادن/badan/身・体・肉体・身体」とは「生きている人間や他の生物の体。身体。体。肉体」と定義されている。この定義によれば、「بادن/badan/身・体・肉体・身体」は頭から足までをまとめている語である。それに対して、『Farhang-e Dehxoda』では、「بادن/badan/身・体・肉体・身体」とは「頭以外の全身」とあり、「سر/sar/頭」を「بادن/badan/身・体・肉体・身体」と区別としている。

### 【「بادن/badan」の派生義】

1. 衣服の胴体を覆う部分。身丈。<sup>20</sup>
2. 容器、機械やものの本体の部分。  
 「بادنه خودرو/badan-e-ye xodro/車体」  
 「بادنه شمع/badan-e-ye šam'/ろうそくの本体」  
 「بادنه درخت/badan-e-ye deraxt/木の幹」

### 【「جان/jān」の基本義】

1. 身体がそれによって生きている力。
2. 魂。靈魂。精神。

### 【「جان/jān」の派生義】

1. 我が身。自分自身。

ازش طلاق بگیر، جانت را خلاص کن.

azaš talāq begīr jān-at rā xalās kon.

彼と離婚して、身を解き放って！

<sup>20</sup> これが古典ペルシア語で使用されていたが、現代ペルシア語では使われなくなり、そのかわりに「تنه/tane/体・身体」が使用されている。例として、「کت نیم تنه/kote nīm tane/半身コート」

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:361)

## 2. 体、身体

بس که به طرف او تیر انداختند تمام جانش را خونین و مالین کردند.

bas ke be taraf-e ū tīr andāxtand tamām-e jān-aš rā xūnīn va mālīn kardand.

彼/彼女はあまりにも銃弾を浴びすぎたため、全身を血だらけにされていた。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:361)

## 3. 体格。体力。力

خیلی درب و داغون بود، یک اسکلت، جان نداشت راه برود.

xeylī darbo daqūn būd, yek eskelet jān nadāšt rāh beravad.

(彼/彼女は) とても具合が悪く、歩く気力がない骸骨のようだった。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:361)

## 4. 親愛な気持ちを表す。親愛な者。可愛い人

برادر جان ؛ بچه جان ؛ علی جان

barādar jān, bače jān, alī jān

親愛な兄、親愛な子供、親愛なアリー

## 5. 呼びかけに対しての愛情のこもった返事として

صدا کردم : بابا

گفت: جان ( یا جان بابا)

sedā kardam: bābā

goft: jān ( ya jan-e bābā)

こう呼びかけた：お父さん！

こう言った：(はい) 私の愛しい者！

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:361)

## 6. 疑問符

人の声が聞こえづらい場合は疑問符として使われ、もう一度、言ったことを繰り返してという意味を表すためにも用いられる。

جان؟ چی گفتید؟ بلندتر بگوئید، درست نشنیدم.

jān?čī goftīd?bolandtar begūīd,dorost našnīdam.

何ですか？何と言いましたか？大きい声で言ってください。きちんと聞こえなかった。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:361)

上述したことをまとめて見ると次のようになる。日本語の「身」が「全身」を指すに  
対して、ペルシア語では、「بدن/badan/身・体・肉体・身体」は「سر/sar/頭」を含まない。  
つまり、「頭」と「体」が区別されている。

そして、日本語の「身」とペルシア語では二つの語、つまり、「بدن/badan/身・体・肉  
体・身体」と「جان/jān/生命・命・魂」が対応する。

両言語では、機器や品物の本体部分と人間の体の類似さに注目され、「身」の形など  
から、メタファーによってそれに類似した「容器の本体」や「衣服の胴」への意味拡張  
されている。また、「身」や「جان/jān/生命・命・魂」から、メトニミーに基づいて「自  
分」への意味拡張は共通している。しかし、日本語のメトニミーによる「身から地位・  
身分・分際へ」「身から立場へ」「身から身持ちへ」「身から誠心へ」「身から身振りへ」  
「身から金銭へ」「身から自称へ」「身から対称へ」のような意味拡張はペルシア語の  
「جان/jān/生命・命・魂」の表現では存在しなく、日本語特有の意味拡張であると言え  
る。

一方、ペルシア語では「بدن/badan/身・体・肉体・身体」の場合は、意味拡張はわずか  
で、基本義から「衣服の胴体を覆う部分」「身丈と容器、機械やものの本体の部分」の  
みに拡張する。「بدن/badan/身・体・肉体・身体」に比べて、「جان/jān/生命・命・魂」の意  
味拡張が多い。その中で「جان/jān/生命・命・魂から体格、体力、力へ」「جان/jān/生命・  
命・魂から親愛な気持ち、親愛な者へ」「جان/jān/生命・命・魂から愛情のこもった返事  
へ」「جان/jān/生命・命・魂から疑問符へ」の意味拡張がペルシア語特有であり、日本語  
にの「身」の意味拡張では見当たらないことである。

## 6.2 「身」を含んだ慣用句の意味分析

本節では、まず、本稿で行った日本語における慣用句の分布調査のデータで使用され  
た日本語の「身」に関する慣用句を表5でまとめ、そして、様々な慣用句辞典や調査に  
使用したデータの中から例文を提示し、その意味において、メタファーやメトニミーが  
どのように関わっているかを考察する。そして、その日本語の「身」に対応するペルシ  
ア語の慣用表現を、具体的な例文を提示しながら分析する。まず、調査したデータで使  
用された日本語の「身」に関する表を見てみることにする。

＜表 6＞ 日本語慣用句の分布調査のデータにおける使用されていた「身」の慣用句<sup>21</sup>

| 身から～             | 身が～            | 身に～                                                       | 身の～          | 身も～        | 身を～                                                                                                                                                                           |
|------------------|----------------|-----------------------------------------------------------|--------------|------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 身から出た<br>さび<br>錆 | 身が入る＊<br>肩身が狭い | 身に覚えが<br>ない＊<br>身に沁みる<br>＊<br>身に付く＊<br>身に付ける<br>＊<br>身になる | 身の置き所<br>がない | 身も蓋もな<br>い | 身を誤る＊<br>身を固める<br>身を切る<br>身を切られ<br>る<br>身を削る<br>身を沈める<br>身を捨てる<br>身を立てる<br>身を縮める<br>身を挺する<br>身を投ずる<br>身を投げる<br>身を引く＊<br>身を潜める<br>身を任せる<br>身を持ち崩<br>す<br>身を以て<br>身を焼く<br>身を寄せる |

### 6.2.1 日本語における「身」の用法に基づく慣用句の分類

林（2002）は「身」を使った慣用表現をその用法を中心に、「こころ」「身分・地位」「立場・境遇」「生活・生き方」「自分」を表すものに分類している。本節では、林の分類に基づいて、「身」の慣用表現における意味拡張の考察を行う。

#### 1. こころに関わる表現

「身を焼く」「身を粉にする」「身が軽い」「身が入る」「身を入れる」「身に沁みる」「身を焦がす」「身を尽くす」「身を砕く」「身を削る」などにおける「身」は「心としての身」であり、意志や感情などの精神活動に関わる慣用句である。「身」を含む精神化された意味を持つ表現が何を比喻しているか考えてみると、主に、「感銘」「苦労・努力」「真剣」「恋慕や高ぶる感情」などに分類することができる。次にそれぞれの例を提

<sup>21</sup> 表の中では＊は5回ぐらい、繰り返しに使用されていた慣用句を示す。

示し、意味拡張を考察する。

### 感銘を表す用例：

日本語：

身に沁みる（深く心に感じる）

阪神大震災で助け合いの大切さが身にしみた。

（『朝日新聞、天声人語』2009.1.31）

「身に沁みる」は、「深い感銘を受ける。深く心に感じる」という慣用句としての意味を持つ。この表現では、「身」は「心」を表し、意味には「人間の体。身体としての身」から「心」の「人間の体の中に宿る」という「心」の特性に基づき、メタファーによる「物事の内面」を表すようになる。「沁みる」は本来「深いところに達する」という意味であり、この慣用句では、具体的な動作である「深いところに至る」を通じて、抽象的な「深く感ずる」ことを表し、両者には「外面から内面へ」という類似性が見られ、そのため、「身に沁みる」という慣用句はメタファーによる意味拡張がなされている。

### ペルシア語：

なし

一方、ペルシア語では、「بدن/badan」と【جان/jān】の慣用表現の中では「感銘」を表す表現が見当たらない。しかし、日本語の「身に沁みる」にある程度対応する「با پوست و گوشت و استخوان حس کردن/ba pūsto gūšto ostoxān hes kardan/肌、肉と骨で感じる（意識：深く感じられる）」という表現がある。

این نامزد انتخابات ریاست جمهوری افزود: ( حذف ) مشکلات و معضلات این استان را با پوست و گوشت و استخوان خود حس کردم.

īn namzad-e entexābāt-e rīāsāt-e jomhūrī afzūd: (hazf) moškelāt va mo‘zalāt-e īn ostān rā bā pūst-o gūšt-o ostoxān-e xod hes kardan.

この大統領選挙の候補はこう言った：この州の難題や諸問題が肌、肉と骨で感じた（意識：深く感じた）。

（「Hamšahrī On Līne」2013.06.04）

「با پوست و گوشت و استخوان حس کردن/ba pūsto gūšto ostoxān hes kardan/肌、肉と骨で感じる」は、字義通りの行為の意味とおよそ「あることを全身で感じる」つまり、「あることを深く感じる」という慣用的意味になる。この場合、「肌、肉と骨で感じる」という行為と「あることを全身で感じる/深く感じる」という行為は「علاقه کل و جزء / ‘alāqe-ye kolīyat

va jozīyat →部分－全体」の関係にあり、「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」であると考えられる。つまり、「پوست/pūst/肌」「گوشت/gūšt/肉」「استخوان/ostoxān/骨」以外にも全身を構成する要素もあるわけであることから、「پوست و گوشت و استخوان/ pūsto gūšto ostoxān/肌、肉と骨」は「全身」の一部分ということになる。

### 苦労・努力・心配を表す用例：

#### 日本語：

身を削る（やせるほど非常な苦労や心通をする）

今の東電には、食べ放題ではなく質素な昼定食が似合う。身を削る努力を求めたい。

（『朝日新聞、天声人語』2011.9.15）

「身を削る」は字義通りには「体から一部を取る」という意味を持つ。この慣用句では、「刃物などで体の表面を、そぎ取る」から、大変な痛みや苦労が連想される。このような字義通りの特徴が、慣用句に写像され、「大変な苦労をしたり、広く心を痛めたりする」という抽象的な意味を表すようになり、字義通りの意味からメタファーによって慣用的な意味が成り立っていると考えられる。この表現では、句全体の意味拡張によって意味が決まってくる。

「身を削る」以外に、「身を粉にする」「身を砕く」という表現が大変な苦労を表している。

#### ペルシア語：

前述したように、ペルシア語では、「بدن/badan/身・体・肉体・身体」を含む慣用表現はわずかである。そこで、「苦労・努力・心配」を表す慣用表現は「بدن/badan/身・体・肉体・身体」の慣用表現の中では見当たらない。しかし、「جان/jān」、そして、「بدن/badan/身・体・肉体・身体」と同意である «تن/tan/体・身体» を含む次の表現が該当する。

«تن کسی لرزیدن/tan-e kasī larzīdan/身が震える（意識：あまりの心配で体が震える）» 「جان از هفت لای کسی در آمدن/jān az haft lāye kasī dar āmandan/大変な苦労をしたり、ひどく心を痛めたりする» «جان سگ کندن/jān-e sag kandan/非常に苦労しながら生活する/非常に苦しみなから生きる» «جان کُردی کندن/jān-e kordī kandan/非常に苦労しながら尽力する» «جان کسی به لبش آمدن/jān-e kasī be labaš āmadan/非常に苦労しながら何かをやっていく» «جان کسی را گرفتار/jān-e kasī rā gereftan/死ぬほど人を苦しむ» «جان کندن/jān kandan/苦労をいとわず尽力する» などが「苦労・努力・心配」を表す表現である。その中から、「جان کندن/jān kandan/苦労をいとわず尽力する」という表現が上述の日本語の「身を削る」と対応表現と言える。

«جان کندن/jān kandan/死に瀕する（意識：身を削る、苦しむ、大変苦労をいとわず尽力する）»

هر روز صبح تا غروب جان می‌کنند تا آذوقه زمستانشان را فراهم کنند.

har rûz sobh tā qorûb jān mī-kandand tā āzūqe-ye zemestān-e-šan rā farāham konand.

(彼ら/彼女らは) 毎日、朝から夕方まで、身を削って、冬のために食糧を集めていた。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』:366)

上記の「جان/جَان/jān kandan」という表現には「亡くなる数分前の最後の体の動きや苦勞」「亡くなる前の最終的に大変な数瞬間」という構成語の意味と、「大変な苦勞をいとわず尽力する」という慣用的意味がある。この二つの意味には「大変苦勞する」という共通点を見出すことができる。つまり、「亡くなる数分前の最後の体の動き、苦勞や大変な数瞬間」は「جان/جَان/jān kandan」の「معنای نزدیک/ma‘nāye nazdīk/近い意味」であり、「大変な苦勞をいとわず尽力する」という意味がその「معنای دور/ma‘nāye dūr/遠い意味」である。従って、「جان/جَان/jān kandan」の慣用的意味は、字義通りの意味から「کنایه/kenāye/メタファー」に基づき成り立っていると考えられる。

#### 真剣を表す用例：

日本語：

身が入る（熱心にやる、ある物事に一心になる）

でもねえ、公ちゃん、気になって勉強に身が入らないっていったから、家賃は同じだし。

(『向田邦子シナリオ集IV、冬の運動会』：300)

「身が入る」には「身が特定の環境に移る」という字義通りの意味がある。この慣用句は字義通りの意味が、抽象化され、「熱中する。一生懸命になる」というような感情を表している。山梨（1988）によれば、この種の慣用句は、感情の主体の肉体的な兆候のモデルに基づいている表現である。そこで、「身が入る」というような慣用句では、肉体的、生理的なモデルを介して、感情が間接的に表現される。これが感情と生理的影響のメトニミー関係に基づく意味拡張であると考えられる。

#### ペルシア語：

ペルシア語でも「真剣さ」を表す「از جان خود مایه گذاشتن/az jān-e xod māye gozāštan/命を挙げるほど真剣にやる」「از جان و دل انجام دادن/az jān-o del anjām dadan/あるいは、با جان و دل انجام دادن/bā jān-o del anjām dādan/心や命でやる（意識：純粋にやる、全身全霊でやる）」という表現が「جان/jān」に関わる表現の中に見える。その中から、「از جان و دل انجام دادن/az jān-o del anjām dadan/あるいは、با جان و دل انجام دادن/bā jān-o del anjām dādan/心や命でやる（意識：純粋にやる、全身全霊でやる）」は上記の日本語の「身が入る」と対応すると

考えられる。

دل انجام دادن/از جان و دل انجام دادن/あるいは、دل انجام دادن/با جان و دل انجام دادن/anjām dādan/心や命でやる（意識：純粋にやる、全身全霊でやる）

هر کمکی از من بر بیاید از جان و دل می کنم.

har komakī az man bar bīyayad az jān-o del mī-konam.

私にできる手伝いは、心や命（意識：（意識：全身全霊））でやらせていただきます。

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』:369）

上記の例文においての「دل انجام دادن/از جان و دل انجام دادن/あるいは、دل انجام دادن/با جان و دل انجام دادن」をペルシア語に直訳すると「心でやる/全身でやる」という字義通りの意味があり、その慣用的な意味が「純粋にやる」である。この場合は「心でやる」と「純粋にやる」という行為は「علاقه کل و جزء / ‘alāqe-ye kolīyat va jozīyat →部分－全体の関係」にあると考えられる。つまり、あることを純粋にやるために、「心」が大事な要素であるが、「心」のみならず、「全身」が必要であるわけで、「心でやる」は「純粋にやる」ことの一部分であり、「علاقه کل و جزء / ‘alāqe-ye kolīyat va jozīyat →部分－全体」に基づく「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」によって意味拡張であると考えられる。

恋慕や高ぶる感情を表す用例：

日本語：

身を焦がす（激しく恋する。あることだけを一心に思う）

寝ても覚めてもあなたのことを思い、身を焦がしております。

（『分野別・日本語の慣用表現』 1992）

身を焼く（激しく思いつめ、悩む）

晩秋の雨の日に酒に酔い、声を張りあげて泣く田口さんの回想が出てくる。身を焼くのような望郷であり、わが子に届かぬ手の慟哭でもあったろう。

（『朝日新聞、天声人語』 2009.3.12）

上記の「身を焦がす」は、「恋しさに思い悩む。恋慕の情が抑えられず、もだえ苦しむ」、「身を焼く」が「苦しさに耐えられないほど激しく、人を恋したり、悩んだりする」という意味を持ち、恋心や高ぶる感情の過程を表す表現である。

両表現は火と関係する表現である。激しい感情を表すときには、燎原の火の燃え広がりや火山の噴出などのイメージが関与していると思われる。つまり、具体的な動作である「燎原の火の燃え広がりや火山の噴出など」を通じて、抽象的な「激しく恋する、激しく思いつめ、悩む」という意味を表している。両者には「激しさでコントロールでき

なくなる」という類似性があり、メタファーによる意味拡張であると考えられる。

#### ペルシア語：

一方、ペルシア語の「جان/jān」に関わる表現の中では「جان کسی بسته به جان کسی یا چیزی/jān-e kasī baste be jān-e kasī yā čīzī būdan/人の命が人や物にかかわる」「جان کسی بودن/jān-e kasī būdan-o jān-e folan kas/命がその人の存在に関わるほど、人を可愛がる」「جان کسی در رفتن/jān-e kasī dar raftan/死ぬほど人を恋したり、可愛がる」などが「激しく人や物を可愛がったり、恋したりする」を表す表現となっている。その中において、日本語の上述の「身を焦がす」や「身を焼く」とは「جان کسی در رفتن/jān-e kasī dar raftan/死ぬほど人や物を恋したり、可愛がる」に対応すると思われる。

جان کسی در رفتن/jān-e kasī dar raftan/魂が体からでる、命を捧げる（意識：身を焦がす、死ぬほど人を可愛がったり、愛したりする）

علی برای این بچه جانش در می رفت.

Alī barāye īn bače jān-aš dar mī-raft.

アリーはこの子に命を捧げていた。（直訳）

アリーはこの子に身を焦がす思いでした。（意識）

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』:365）

上記の例文における「جان کسی در رفتن/jān-e kasī dar raftan」を直訳すれば、「魂が体から出る/命を捧げる（死ぬ）」という意味を持つが、例文からも分かるように、ここでは、「大変可愛がったり、愛したりする」ことを意味する。字義通りの意味では「جان/jaan」は「命」を意味しているが、「命」は人間にとっては一番大事なものであるという考えから、その大事なものを溺愛する、可愛がる、愛する」という抽象的な意味が派生している。

ここでは、「魂が体から出る/命を捧げる（死ぬ）」の文字通りの意味、つまり「معنای/ma'nāye nazdīk/近い意味」を通して、「معنای دور/ma'nāye dūr/遠い意味」つまり、抽象的な意味の「大変可愛がったり、愛したりする」が捉えられ、「کنایه/kenāye/メタファー」に基づく意味拡張だと考えられる。

## 2. 身分・地位に関わる表現

#### 日本語：

身を立てる（ある職業で生活を成り立たせる）

裸一貫から身を立てた人で、「銀行の私物化というけどね、もともと私物なんだから」と臆面もなかった。

上記の「身を立てる」は、「仕事・学問・芸術などに専念し、その道で一角の者となる。地位を築く」という意味を表している。この表現ではメタファー、メトニミーが絡み合っていると思われる。「身」が「身分や地位」を表し隣接関係に基づくメトニミーによってその意味が拡張している。「立てる」は本来、「物を一定の所に、立てにまっすぐにする」という意味を表す。ここから、「身を立てる」ことは「身体をまっすぐ起き立った状態にする」という字義通りの意味になる。この慣用句では、具体的な動作である「立てる」を通じて抽象的な「地位を築く」ことを表現している。両者には「下から上へ」という類似性があり、メタファーによる意味拡張であると考えられる。

日本語では「身を立てる」以外に、「身を起こす」「身を落とす」「身を沈める」という慣用句でも、「身」は「身分や地位」を表している。

#### ペルシア語：

なし

ペルシア語では「بدن/badan/身・体・肉体・身体」や「جان/jān」に関わる表現の中では「身分・地位」を表す表現が存在しない。しかし、日本語の「身を立てる」「身を起こす」「身を落とす」「身を沈める」などのような表現における「身」が、をペルシア語ではどのように表現されるかを明らかにするため、上記の慣用句をペルシア語に直訳すると次のようになる。

身を立てる→ خود را بلند کردن /xod rā boland kardan/ 自分を立てる

意味： موقعیت اجتماعی خود را ساختن /mouqe‘īyte ejtemā‘īye xod rā sāxtan/社会における 自分の地位を築く。

身を起こす→ خود را بیدار کردن (بیدار کردن) /xod rā boland kardan (bīdār kardan)/ 自分を起こす

意味： موقعیت اجتماعی خود را ارتقاء دادن /mouqe‘īyte ejtemā‘īye xod rā erteqā dadan/ 自分の社会的な地位を向上させる。

身を落とす→ خود را انداختن (پست کردن) /xod rā andaxtan (past kardan)/ 自分を落とす

意味： خود را در وضعیت و شرایط بدی قرار دادن /xod rā dar vaz‘īyat va šarāyet-e bad-ī qarār dādan/ 自分を落ちぶれた境遇に置く。

身を沈める→ خود را غرق کردن /xod rā qarq kardan/ 自分を沈める

意味： خود را در وضعیت و شرایط بدی قرار دادن /xod rā dar vaz‘īyat va šarāyet-e badī qarār dadan/ 自分を落ちぶれた境涯に置く。

上記の表現を見れば分かるように、日本語の「身」はペルシア語では「بدن/badan」や【「جان/jān」ではなく「自分自身/خود」あるいは、「自分自身の状況」に訳される。つまり、日本語の「身分・地位」を表す「身」の慣用表現はペルシア語の「自分」や「自分の状況」と対応すると考えられ、慣用表現ではなく、一般的な表現になると思われる。

### 3. 立場・境遇に関わる表現

日本語：

身になる（相手の立場になって考える。その人の立場に立って考える）

太一郎：そうはいかないから迷惑してるんだ。部長の弟さん、蒲田<sup>かまた</sup>で工員してるそうですね。そういわれる身になって考えろ。

（『向田邦子シナリオ集Ⅲ、幸福』：396）

上例における「身になる」にはメトニミー、メタファーが絡み合っていて働いていると思われる。句全体は「その身になりかわる。真剣に思う心になる」という意味を持ち、人の持つ「立場・境遇」を顕著に示している。ここでは、「身」の意味はメトニミーによって「立場や境遇」へと拡張される。また、動詞の「なる」は「別の物・状態に変わる」を示す。物理的な行為を通して「その身になりかわる」ことを表し、両者には「変更」という類似性があり、メタファーによる意味拡張である。

「身になる」以外に、「身に余る」「身に過ぎる」「身の置きどころがない」「身も蓋もない」などは「立場・境遇」という概念と関わる慣用表現である。

ペルシア語：

なし

上述のような意味拡張はペルシア語の「بدن/badan/身・体・肉体・身体」や「جان/jān」に関わる表現では見当たらない。しかし、上記の日本語の表現はペルシア語ではどのように記述されるかを見てみよう。

身になる→ خود را جای دیگری گذاشتن /xod rā jāye dīgarī gozāštan/自分をその人の代わりに置く  
意味：その人の立場に立って考える。

身に余る/身に過ぎる→ از حد ظرفیت کسی خارج بودن /az had-e zarfiyat-e kasī xārej būdan/人の容量を超えている

意味：処遇が人の能力や身分を超える。

身の置きどころがない→ آب شدن /āb šodan/溶ける

意味：恥ずかしさのあまり、いなくなりたい気持ちである。

身も蓋もない→ رُک و پوست کنده /rok-o pūst kand-e būdan/素直で、皮をむいだまま  
意味：素直に（話す）/素直な（話し）

上記のペルシア語の表現は意味的に日本語の表現とは対応するものの、ペルシア語においては「آب شدن/āb šodan」や「جان/ĵān」に関わる表現とは言えない。また、その中で、「آب شدن/āb šodan/溶ける（意識：恥ずかしさのあまり、いなくなりたい気持ちである）」と「رُک و پوست کنده /rok-o pūst kand-e būdan/素直で、皮をむいだまま（意識：素直に話す/素直な話し）」のみ、慣用表現で、残りは一般的な表現となっている。

上述の表現の中から「آب شدن/āb šodan/溶ける（意識：恥ずかしさのあまり、いなくなりたい気持ちである）」を例として取り上げその意味を考察してみよう。

آب شدن/āb šodan/溶ける（意識：恥ずかしさのあまり、消えていなくなりたい気持ちである）

هی به طرف من حمله ور می شد که مرا ماچ بکند،توی آن شلوغی،میان مردم از خجالت آب می شدم.  
hey be taraf-e man hamlevar mī-šod ke marā mač bokonad,tūye ān šolūqī,mīān-e mardom.az  
xejālat āb mī-šodam.

あのような賑やかな所、そして人々の中で、彼は私の方に向かってきて、キスしようとしたので、私は恥ずかしくて溶けてしまいそうだった（意識：消えていなくなりたい気持ちだった）。

（『Farhang-e Fārsye Amīāne』：8）

上例の「آب شدن/āb šodan/溶ける」の字義通りの意味は「ある固形物、例えば、氷、蠟燭などが熱などによって液状になり、なくなる」という意味を持つ。しかし、上記の表現では、「恥ずかしさのあまりに、消えていなくなりたい」ということを表している。ここでは、「溶ける」と「いなくなる」の間に類似性が想像され、「いなくなる」の代わりに「溶ける」が使用され、その意味が「علاقه شباهت/ ‘alāqe-ye šebāhat →類似さの「علاقه/’alāqe/理由/関係/関係の理由」による「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」によって拡張されている。

#### 4. 人生・生活や生き方に関わる表現

日本語：

身を誤る（正しくない生き方をする）

門倉：このまま突っ走ったら、お前は必ず身を誤る。

（『向田邦子シナリオ集Ⅰ、あ・うん』：268）

上記の「身を誤る」では「身」はメトニミーによって「生活、生き方」を表すようになる。「誤る」は「正しい筋道からはずれる」という意味から「やり方や判断を間違う」

というような意味の展開が推測される。慣用句の全体的な意味は「人生でなすべきことや進むべき方向を間違う」ことを表し、メトニミーによるものと判断される。

「身を誤る」以外に、「身」を含む「身を持する」「身を持ち崩す」「身が持たない」などという慣用句も「生活や生き方」に関する表現である。

#### ペルシア語：

ペルシア語では「جان/jān」を含んだ「با جان خود بازی کردن/bā jān-e xod bāzī kardan/自分の命と遊ぶ（意識：自分の生命を危険にさらす）」「جان کنن/jān kandan/死に瀕する（意識：苦しむ、苦しい生活ややり方を持ち続ける）」「جانش را نداشتن/jān-aš rā nadāštan/命がない（意識：体力がない）」という表現があり、日本語と全く同じ概念を表すという意味ではないが、日本語の「身を誤る」「身を持する」「身が持たない」と対応すると思われる。例として、「با جان خود بازی کردن/bā jān-e xod bāzī kardan/自分の命と遊ぶ（意識：自分の生命を危険にさらす）」における意味拡張を見てみよう。

#### با جان خود بازی کردن/bā jān-e xod bāzī kardan/自分の命と遊ぶ（意識：自分の生命を危険にさらす）

با جان خودشان دارند بازی می کنند، می بینی؟ تفنگها به طرفشان نشانه رفته، اما (آنها) هیچ ترس و واهمه ای ندارند، کار خودشان را می کنند.

bā jān-e xod-e-šān bāzī mī-konand, mī-bīnī? tofanqā be tarafešān nešāne raft-e, amā (ānha) hič tars-o vāheme-ī nadārand, kār-e xodešān rā mī-konand.

（彼ら/彼女らは）自分の命と遊んでいますが（意識：自分の生命を危険にさらしています）、分かりますか？銃口が彼ら（彼女ら）の方に向けられているというのに、（彼ら/彼女ら）が恐れを抱くことなく、やりたいことをやっている。

(『Farhang-e Fārsye Amīāne』：367)

以上の文章では「با جان خود بازی کردن/bā jān-e xod bāzī kardan」は「استعاره تبعیه /este‘āre tabaīye/追隨メタファー」である。前述したように<sup>22</sup>、意味拡張は「形容詞」あるいは「動詞」に発生するなら、「استعاره تبعیه /este‘āre tabaīye」つまり、「追隨メタファー」と呼ばれる。ここでは「جان/jaan/生命・命」は「現実的」の「主体」と想像され、動詞の「بازی کردن/bāzī kardan/遊ぶ」は「استعاره تبعیه /este‘āre tabaīye/追隨メタファー」に基づいて「危険にさらす」に拡張されている。

## 5. 自分に関わる表現

日本語：

身に付ける

---

<sup>22</sup> 25 ページの 2.2.1.3.3

①体に密着させるように所持する

お守りを身に付ける。

(『大辞泉 第一版』 1995)

②衣服を着る

赤を身につけた男性は、女性からより魅力的に見える

(『朝日新聞、天声人語』 2010.8.18)

③知識・学問・技術などを習得する

早くから記事に親しみ、おぼれないだけの知恵を身につけてほしいとも思う。

(『朝日新聞、天声人語』 2009.3.22)

上記の例文を見れば分かるように、「身に付ける」とは、「体に密着させるように所持する」及び「知識・学問・技術などを習得する」そして、「衣服を着る」という三通りの意味を持つ。

それぞれの用例では具体的な「身」自体が「自分、自身」へ拡張し、隣接関係に基づくメトニミーである。しかし、「身に付く」は、全体としてメタファーに関わる表現としても認められる。「付ける」は「ぴったりとくっつけて離れない状態にする」という意味を持つ。①と②の例では、「離れない」という共通点に基づいて、「身に付く」は字義通りの「体にくっつける」状態を表す具体的な意味から、「所持する」「着る」という抽象的な意味を表すようになり、メタファーに基づいてできたものである。

また、③の例の場合は、目に見え、具体的な動作である「二つのものを離れない状態にする」ことを通して、目には見えない抽象的な「知識・技術などを自分のものとする」ことを表している。これは「体に何かがつくと、どこでも持参する」ということを連想し、身体的な経験から由来していると思われ、メタファーによる意味拡張であると考えられる。

「身に覚えがない」「身に付く」「身につまされる」「身も世もない」「身を捨てる」「身に掛かる」「身を売る」「身を殺して仁を成す」「身を沈める」「身を任せる」「身を以て」「身を棄す」「身から出た錆」「身を抓む」などでも、「身」は「自分、自身」を表している。

ペルシア語：

一方、ペルシア語では、「بدن/badan/身・体・肉体・身体」を含む慣用表現の中では「自分」への意味拡張が存在しない。しかし、微妙に、「جان/jān」と「تن/tan/体・身体」を含む次のような表現の中では「自分」に関わる表現が見ることができる。例えば、「تن فروشی کردن/tan forūši kardan/身を売る」「از جان گذاشتن/az jān gozaštan/命（自分）を犠牲にする（意

訳：一身を捧げる)」のような表現においては「تن/tan/体・身体」と「جان/jān」は「自分、自身、自分の命」を表している。その用例は以下のとおりとなる。

از جان گزشتن/az jān gozaštan/命（自分）を犠牲にする（意識：一身を捧げる）

پلیس عراقی برای حفاظت از زائرین از جان گزشت.

polīc-e ‘arāq-ī baraye hefāzat az zāerīn az jān-aš gozašt.

イラク人の警察が巡礼者保護に命（自分）を犠牲にする（意識：一身を捧げ）

（「Sīmāye Xānevāde」）

以上の文章では「از جان گزشتن/az jān gozaštan」は「استعاره تبعیه/este‘āre tabaīye/追隨メタファー」である。ここでは、意味拡張が「動詞」に派生している。

この表現の動詞は「گزشتن/gozaštan」であり、「放棄する」という意味を持っている。上記の例では「جان/jaan/生命・命」は「現実的」の「主体」と想像され、動詞の「گزشتن/gozaštan/放棄する」は「استعاره تبعیه/este‘āre tabaīye/追隨メタファー」に基づいて「犠牲にする」に拡張されている。

### 6.3 まとめ

以上、第6章では、日本語の「身」とそれに対応するペルシア語の身体語彙の意味を、「基本義」と「派生義」の2種類に分け、それぞれの例を提示しながら考察を行った。その結果、日本語の「身」が「全身」を指し示すのに対して、ペルシア語では、「بدن/badan/身・体・肉体・身体」（「تن/tan/体・身体」「جسم/jesm/体・肉体」「اندام/andām/体」「جثه/jose/体・体格」「پیکر/peykar/体・肉体」「کالبد/kālbad/身体」「تنه/tane/体・身体」「قلب/qāleb/肉体」）は「سر/sar/頭」の頭部を含んでいなかった。つまり、「頭」と「体」が切り離され、考えられていることになる。また、日本語の「身」が「体」を具体的な対象として捉える以外に、抽象的な対象としても捉えている一方、ペルシア語においては、人間の体を目指す「بدن/badan/身・体・肉体・身体」（「تن/tan/体・身体」「جسم/jesm/体・肉体」「اندام/andām/体」「جثه/jose/体・体格」「پیکر/peykar/体・肉体」「کالبد/kālbad/身体」「تنه/tane/体・身体」「قلب/qāleb/肉体」）などといった言葉は、日本語の「身」とは大きく異なっており、身体的かつ肉体的な意味のみを表し、抽象的な観点から捉えられていないことが明らかとなった。また、ペルシア語では、「身」の肉体的な側面と抽象的な側面は区別され、それぞれが独立的に名づけられていた。ペルシア語において、この「身」の肉体的な側面を表す場合、「بدن/badan/身・体・肉体・身体」（「تن/tan/体・身体」「جسم/jesm/体・肉体」「اندام/andām/体」「جثه/jose/体・体格」「پیکر/peykar/体・肉体」「کالبد/kālbad/身体」「تنه/tane/体・身体」「قلب/qāleb/肉体」）が用いられており、そして、抽象的な側面を表す場合は「جان/jān/生命・命・魂」という言葉が使用されているが、両言語では基本義はほとんど同義であり、「人または、

動物の体・肉体」を表している。しかし、派生義の場合は両方においては、意味拡張がほとんど異なっており、対応する場合がごく僅かとなっている。

前章と同様に、次に、両言語の「身」の意味拡張も「両言語における共通の意味拡張」、「日本語の特有の意味拡張」と「ペルシア語の特有の意味拡張」に分けると次のようになる。

### 両言語における共通の意味拡張

両言語では、機器や品物の本体部分と人間の体の類似さに注目され、「身」の形などから、メタファーによってそれに類似した「容器の本体」や「衣服の胴」への意味拡張されている。それぞれの例は次のようである。

#### 「身」から「容器の本体」への例

日本語：身からでた錆

ペルシア語：بدنه ماشین/badan-e-ye māšīn/車体

#### 「身」から「衣服の本体」への例

日本語：日本語：本身、四つ身、三つ身、一つ身

ペルシア語：ペルシア語では「بدن/badan/身・体・肉体・身体」から「服」への意味拡張は古典ペルシア語で使用されていたが、現代ペルシア語では使われなくなっているが、「身」から「بدن/badan/身・体・肉体・身体」の同義である「تن/tan/体・身体」への意味拡張が使用されている。その例は、「نیم تنه/nīm tane/半身キャミソール」である。

上記の類似さに基づく意味拡張以外の、両言語では「身」や「جان/jān/生命・命・魂」から、隣接性のメトニミーに基づいて「自分」への意味拡張は共通している。例として、

#### 「身」から「自分」への例

日本語：黙っている方が身のためだぞ。

ペルシア語：ازش طلاق بگیر،جانت را خلاص کن./azaš talāq begīr, jān-at rā xalās kon./彼と離婚して、身を解き放って！

### 日本語の特有の意味拡張

身体語彙「身」に係る日本語における意味拡張の絶対数は、ペルシア語よりもはるかに多いものとなっている。その中で、次のような意味拡張はペルシア語の「جان/jān/生命・命・魂」の表現では存在しなく、日本語の特有の意味拡張であると言える。

- ・身から地位・身分・分際へ
- ・身から立場へ
- ・身から身持ちへ
- ・身から誠心へ

- ・身から身振りへ
- ・身から金銭へ
- ・身から自称へ
- ・身から対称へ

### ペルシア語の特有の意味拡張

ペルシア語では「بدن/badan/身・体・肉体・身体」「تن/tan/体・身体」「جسم/jesm/体・肉体」「اندام/andām/体」「جثه/jose/体・体格」「پیکر/peykar/体・肉体」「کالبد/kālbād/身体」「تنه/tane/体・身体」「قلب/qāleb/肉体」の場合は、意味拡張はわずかで、基本義から「衣服の胴体を覆う部分」「身丈と容器、機械やものの本体の部分」のみに拡張する。「بدن/badan/身・体・肉体・身体」に比べて、「جان/jān/生命・命・魂」の意味拡張が多い。その中で次のようなものがペルシア語の特有の意味拡張であり、日本語にの「身」の意味拡張では見当たらないことである。

- ・جان/jān/生命・命・魂から体格、体力、力へ
- ・جان/jān/生命・命・魂から親愛な気持ち、親愛な者へ
- ・جان/jān/生命・命・魂から愛情のこもった返事へ
- ・جان/jān/生命・命・魂から疑問符へ

上記の「両言語における共通の意味拡張」、「日本語の特有の意味拡張」と「ペルシア語の特有の意味拡張」を見れば、両言語の意味拡張は対応する場合が少ないことが分かる。

### 両言語における「身」に関する慣用表現の意味考察の結果

本章では、両言語における、「身」自体の「基本義」と「派生義」を提示し、その次に、日本語の「身」に関する「慣用句」とそれと対応するペルシア語の慣用表現の意味拡張について考察を行った。方法としては、林（2002）に従い、日本語の「身」の用法を中心に、それに関する慣用句を「こころ」「身分・地位」「立場・境遇」「生活・生き方」「自分」を表すものに分類した。そして、「こころ」に関する表現を「感銘」「苦労・努力」「真剣」「恋慕や高ぶる感情」に分類し、メタファーやメトニミーによる意味拡張の考察を行い、それぞれの表現に対応するペルシア語の表現を提示し、意味の分析を行った。

その結果として、「こころ」の下位分類として挙げた「感銘を表す表現」以外に、ペルシア語でも、「苦労・努力・心配を表す表現」「真剣を表す表現」「恋慕や高ぶる感情を表す表現」があり、日本語の「身」とペルシア語の「جان/jān/生命・命・魂」が精神的な側面と結ぶついていることが分かった。

そして、林（2002）が挙げている「身」に関する慣用表現の五つの分類の中では「身分・地位」や「立場・境遇」への意味拡張はペルシア語の「بدن/badan/身・体・肉体・身

体」(「تن/tan/体・身体」「جسم/jesm/体・肉体」「اندام/andām/体」「جثه/jose/体・体格」「پیکر/peykar/体・肉体」「کالبد/kālbād/身体」「تنه/tane/体・身体」「قالب/qāleb/肉体」)や「جان/jān/生命・命・魂」の慣用表現では見当たらない。つまり、「身」から「身分・地位」や「立場・境遇」への意味拡張は日本語の特有の意味拡張であることが明らかになった。

前章の「目」「手」「口」を含む慣用句では、日本語の場合はメトニミーによる意味拡張が多くを占めたのに対し、ペルシア語では「کنایه/kenāye/メタファー」の方が多く見られた。しかし、「身」を含む慣用句では、日本語でもペルシア語と同様に「メタファー」と「メトニミー」の使用がほとんど同様であった。

## 第7章：結論

### 7.1 本論文のまとめ

冒頭で述べたように、本論文は「日本語とペルシア語における意味拡張のプロセスを考察し、それぞれの相違点と類似点を明らかにすること」、「頻繁に使用されている身体語彙慣用句に焦点を当て、身体語彙慣用句が慣用句表現の中でどのように捉えられ、どのような認識や感情などを結びついているのかを追求すること」、「認知モデルにおけるメタファー、メトニミーの理論に基づいて、日本語の慣用句をペルシア語における「目」「手」「口」「身」の身体語彙慣用句の意味と対照し、両国における身体語彙慣用句がどのように捉えられかを考察すること」、そして、最後に、「両言語の「目」「手」「口」「身」を含む慣用句を対照した後に、日本語のイラン人学習者にとってどのような意味領域の慣用句が覚えにくいかを明らかにすること」を目的とした。

以上の目的を踏まえ、本稿では、日本語とペルシア語の身体部位詞「目」「手」「口」「身」の意味拡張について考察するとともに、その慣用句の例を対照し、分析を行った。ここで、今一度、その内容を振り返ってみる。

まず、第1章を序論とし、本稿の研究動機と研究目的、そして研究範囲とその方法や調査結果、研究対象、論文構成などの考え方を説明した。また、本稿の研究手段として用いた認知言語学の基本知識である「プロトタイプ」「イメージスキーマ」「メタファー」「メトニミー」「シネクドキー」「フレーム」についても紹介した。

続いて本論に進むこととなるが、まず、第2章では、日本語とペルシア語における意味拡張のプロセス、つまり、両言語における比喩的意味の作られ方の特徴やパターンについて論じた。その方法として、まず、日本語の拡張の仕組みとしてのメタファー、メトニミー、シネクドキーという3種類の比喩を取り上げ、そして、その定義と用例を考察し、それぞれに基づく慣用的意味の成り立ちを分析した。そして次に、ペルシア語における意味拡張の過程を紹介した。その結果を下記の表の通りにまとめている。

<表 7> 日本語とペルシア語における意味拡張のプロセス

| 日本語 <sup>23</sup> | ペルシア語                           |
|-------------------|---------------------------------|
| メタファー             | مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー |
| メトニミー             | تشبيه/tašbīh/シミレ                |

<sup>23</sup> 従来の理論の中で、「～のような」「～みたいな」の明示的な表現を用いて、あるものを別ものに喩える「シミレ（直喩）」と呼ばれる場合もある。しかし、時代が進むと、「シミレ（直喩）」は「比喩」として扱われなくなってきている。

|        |                                                                                                                                                                                                   |
|--------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| シネクドキー | استعاره/este‘āre/メタファー<br><ul style="list-style-type: none"> <li>• استعاره مصرحه/este‘āre mosarahe</li> <li>• استعاره مكنيه/este‘āre maknīye</li> <li>• استعاره تبعيه/este‘āre tabaīye</li> </ul> |
|        | اسناد مجازی/ esnād-e majāzī/偽りに、何かを何かに帰する                                                                                                                                                         |
|        | كنايه/kenāye/メタファー                                                                                                                                                                                |

両言語の意味拡張プロセスを考察した結果、いくつかのことが明らかになった。まず、上記の表を見れば分かるように、日本語では、「～のような」「～みたいな」の明示的表現を用いることであるものを別ものに喩える表現、つまり、「シミレ（直喩）」が比喻として扱われなくなってきたことに対して、ペルシア語では「تشبيه/tašbīh/シミレ」は言葉の一つのあや「レトリック」として取り扱われている。また、ペルシア語では、日本語のメタファーと対応する 2 種類のメタファー（استعاره/este‘āre/メタファー・كنايه/kenāye/メタファー）が存在している。

日本語においては、意味拡張が「形態素・語」、あるいは「句」のレベルで派生する場合、これらはメタファー、メトニミー、シネクドキーと呼ばれている。しかし、ペルシア語においては、メトニミーが日本語と同様のものであり、そして「語」の意味拡張がなされた場合であっても、又、それが「句」のレベルにまで派生するものであっても、「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」と呼ばれる。しかし、メタファーの場合は、ペルシア語では「形態素・語」と「句」が区別されている。つまり、日本語のメタファーと対応する 2 種類のメタファー（استعاره/este‘āre/メタファー・كنايه/kenāye/メタファー）がペルシア語には存在しており、意味拡張が「語」に派生する場合には「استعاره/este‘āre/メタファー（استعاره مصرحه/este‘āre mosarahe・استعاره مكنيه/este‘āre maknīye・استعاره تبعيه/este‘āre tabaīye）」となり、又、意味拡張が「表現の全体」に派生する場合は「كنايه/kenāye/メタファー」となる。

シネクドキーに関しては、日本における言語学者の考え方が統一的ではなく、山梨（1988）のような言語学者は、シネクドキーをメトニミーの一種と捉え、メタファーとメトニミーを二本柱する立場に立っているが、靱山（2002）はシネクドキーをメトニミーから区別し、日本語の喩をメタファー、メトニミー、シネクドキーに分類している。一方、日本語のシネクドキーは、ペルシア語の「علاقه عام و خاص/ ‘alāqe-ye ām-o xās → 固有—公共」の関係に基づく「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」に対応すると考えられている。すなわち、ペルシア語では「シネクドキー」が「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」の一種と捉えられているのである。

一方、ペルシア語における「اسناد مجازی/ esnād-e majāzī/偽りに、何かを何かに帰する」

による意味拡張は、ペルシア語特有のものであり、日本語では存在しないものと考えられる。例えば、

شرع، برگشاده طومار حکم این گناه خوانده

šar', bargošāde tūmār hokme īn gonāh xānd

聖法は巻物を開き、この罪の判決を読む

「動詞」の「読む」は「現実的」であるがその「主体」との関係が「仮想的」で、現実では不可能なことである。つまり、現実では、「主体」は「動詞」の意味に基づく行為を行うことができない。

続いて、両言語の慣用的表現の分類とその特徴について考察を行った。日本語の慣用句は慣用表現の一部として、品詞別の特徴に基づく「動詞慣用句」「形容詞慣用句」「名詞慣用句」、語彙的な特徴に基づいて「身体語彙の慣用句」「心情語彙慣用句」「漢語語彙の慣用句」「洋語語彙慣用句」、そして、形式上に基づく「比喻形式の慣用句」「否定形式の慣用句」「かさね形式の慣用句」という下位分類がなされていることが分かった。

一方、日本語では慣用句、つまり、一般の共通理解として、習慣的に二つ以上の語が結合した形で使われている。全体である特定の意味を表すものとして定義されるものはペルシア語では、別の名前と呼ばれ、「前置詞＋名詞＋動詞」、あるいは、「具象名詞/抽象名詞＋動詞」という形で作られ、前者は「عبارت فعلی/ebārat-e fe'li/動詞句」、後者は「مركب fe'l-e morakkab /複合動詞」と呼ばれる。それぞれをレトリックの観点から考察すると、場合によっては「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」、「استعاره/este'āre/メタファー」、「کنایه/kenāye/メタファー」などに見なされることとなる。そのため、本稿では「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」や「استعاره/ este'āre/メタファー」、そして「کنایه/ kenāye/メタファー」として確定されているものが日本語の「慣用句」と対照するということを明らかにした。

第3章では、日本語とペルシア語の「目」を含んだ慣用句の対照を行った。方法としては、まず、日本語の「目」とペルシア語の「چشم/češm・čašm/目」の意味を「基本義」と「派生義」の2種類に分け、それぞれの用例を提示しながら考察を行った。その結果、ペルシア語における「目」を含む語の拡張範囲が、日本語の拡張範囲より狭いということが明らかになった。ここでまとめとして、その結果を改めて整理し、両言語の「目」の意味拡張を「両言語における共通の意味拡張」、「日本語の特有の意味拡張」と「ペルシア語の特有」のものに分けて整理することとする。

## 両言語における「目」の意味拡張

日本語とペルシア語には「目」の形状に着目し拡張がなされたものとして、次のようなものがある。ペルシア語では、「ペルシア文字における形状が目 に 似たもの : (و:vāv) (ف:fā) (ق:qāf) (ه:he)」のような場合は「目」と「(و:vāv) (ف:fā) (ق:qāf) (ه:he)」

という文字の類似性に基づく「استعاره/este‘āre/メタファー」による意味の拡張である。

一方、日本語では、「魚の目」「網の目」などのような例は形状が目 に 似たものである。つまり、日本語では「病気の名前」「道具」も拡張される範囲に含まれる。

また、両言語においては「目」から賽やサイコロの面にに付けられた数を示す点へ派生が共通しており、「目」から「眼差し、目付き」への意味拡張は、日本語、ペルシア語の両方に見られるものである。

上述した両言語における形状や位置の類似性による共通の意味拡張以外に、日本語では「目」から「線状に一列に並んだものの間にできたすきまや凸凹」「のこぎりの歯や、やすり・すりばちなどの表面に付けた筋」「囲碁で、連結が完全な石で囲んである空点」「物差し・はかりなどに数量を示すために付けたしるし」「木材の切口に現れる年輪の線。木目」「文様または紋所の名。方形またはひし形の中心に点を一つ打った形のもの」へと語は派生しているが、これは日本語特有のものであり、ペルシア語にはそのような意味の語はない。そのため、日本語では「目」の形状の類似性によるメタファーの拡張がなされる範囲は、ペルシア語のそれより広いと考えられる。

形状や位置の類似性による意味拡張以外に、「目」の機能の隣接性に基づいて派生した語もあり、「物を見る能力。眼力」「見ること。見えること」「注意して見ること。注意」「見分ける力。洞察力」「見たときの印象。外観」はその例である。これも、日本語だけの意味拡張であり、ペルシア語では存在していない。

一方、「目」から「邪視の害」「望・希望・期待」「受諾・承諾・応諾」「愛すべき・貴重・親愛」「面前・御前」「睡眠（うたた寝）の単位」への意味拡張がペルシア語特有のものであり、この点で、両言語における意味拡張は異なりを見せている。

「邪視の害」「受諾・承諾・応諾」「愛すべき・貴重・親愛」「面前・御前」の「目」のような派生義は日本語にはない。これは、文化や社会の違いにより、生じたものであると考えられる。

## 両言語における「目」に関する慣用表現の意味考察の結果

最後に、具体的な事例を通して、日本語の「目」に関する慣用句とそれと対照するペルシア語の「目」の慣用表現意味拡張の考察を行った。

多義的な「目」の意味を分析する方法としては、日本語の「目」の意味を、「視覚器官としての側面」と「視覚機能の側面」、そして、この二つの範疇に含まれない「その他」のものに分けた。次に、「視覚器官としての側面」を「喜びを表す表現」「驚きを表す表現」「怒りを表す表現」「感動を表す表現」「寛容を表す表現」「軽蔑、憎しみ、嫉妬を表す表現」に分類し、その事例を提示しながら、意味拡張の分析を行った。また、「視覚機能の側面」を「視線を表す表現」「眼力を表す表現」「視界を表す表現」に、そして、「その他」を「注意・関心を表す表現」「睡眠を表す表現」に下位分類し、その慣用句の意味拡張を考察した。その結果として、次のことが明らかになった。

この章において提示した事例を見れば分かるように、日本語では、「目」に関する慣用表現において、メトニミーによる意味拡張がほとんどであるのに対して、ペルシア語ではメトニミーによる意味拡張が少なく、「کنایه/kenāye/メタファー」、「استعاره/este‘āre/メタファー」による意味拡張が多く見られる。日本語の例の場合は 16 の用例の中から 12 例はメトニミー、3 例はメタファー、1 例はメタファーとメトニミーの両方が関わっている表現であった。一方、ペルシア語の場合は、16 例の中から、11 例は「کنایه/kenāye/メタファー」、2 例は「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」、3 つはペルシア語の特有の「اسناد مجازی/esnād-e majāzī」による意味拡張であった。

また、両言語における表現の構成用語は類似的であったとしても、日本語ではメトニミー、ペルシア語ではメタファー、又は、ペルシア語ではメトニミー、日本語ではメタファーと見なされるケースもあった。例として、「目を盗む」と「چشم خود را نزدین/češm-e xod rā dozdīdan/（自分の）目を盗む」という表現は、双方の構成用語に差異がなく、共に「目」は「視線」を表現している。しかし、日本語では「部分—全体」のメトニミーと見なされ、ペルシア語では「استعاره تبعیه/este‘āre tabaīye/追隨メタファー」として認められている。

また、第 3 章で、用いられた両言語の「目」を含む慣用句の用例を「類似する表現で、類似する意味を持つ」、「類似する表現で異なる意味を持つ」、「異なる表現で、類似する意味を持つ」また、それぞれに含まれない「それぞれの独自の表現」に分類できる。第 3 章に使用されたそれぞれの例を下記の通りまとめる。

<表 8>第 3 章に使用された「目」と「چشم/češm・čašm/目」を含む慣用表現の対照

| 類似する表現で、類似する意味の例                                                                                                                                                                                                                                                                    | 類似する表現で、異なる意味の例                                                                                                                                                                                                                                       | 異なる表現で、類似する意味の例                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | それぞれの独自の表現の例                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・目を輝かす→ چشم برق زدن /barq zadan-e češm/目が輝く</li> <li>・目を丸くする→ چشمهای کسی گرد شدن /češm-hāye kasī gerd šodan/目が丸くなる</li> <li>・目をつぶる→ چشم را هم گذاشتن /češm rā ham gozāštan/目を閉じる</li> <li>・目が行く→ چشمهای کسی دویدن /češm-hāye kasī</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・目が飛び出る→ چشمهای کسی در آمدن /češm-hāye kasī dar āmadan/目が飛び出る</li> <li>・目頭が熱くなる→ چشم کسی گرم شدن /češm-e kasī garm šodan/目が温かくなる</li> <li>・目を盗む→ چشم خود را نزدین /češm-e xod rā dozdīdan/（自分の）目を盗む</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・目を三角にする→ چشم غره رفتن /češm qorre raftan/怒りに満ちた目で見ると</li> <li>・目頭が熱くなる→ آب در چشم آمدن /āb dar češm āmadan/目に水が来る</li> <li>・白い目で見ると→ چشم بدین کسی را ندانستن /češm-e dīdan-e kasī rā nadāštan/人を見る目が無い</li> <li>・目が高い→ چشم کسی کیمیا بودن /češm-e kasī kīmīya</li> </ul> | <p>日本語：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・目が堅い</li> <li>・目を射る</li> <li>・目尻を下げる</li> <li>・目を極める</li> <li>・目を白黒にさせる</li> </ul> <p>ペルシア語：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・چشم خود را دوختن /češm-e xod ra dūxtan/目を縫う（じっと見つめる）</li> <li>・چشمهای خود را چشمهای</li> </ul> |

|                                                                                                                                                                                 |  |                                                                                                                                                                                                                                                                   |                                                                                                                                                                                                                                |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| davīdan/目が走る<br>・目を落とす→چشم<br>انداختن/češm andāxtan/目を<br>投げる<br>・目をやる→چشم<br>پلکاندن/češm pelekandan/目<br>を回す<br>・目を離せない→چشم<br>نداشتن/češm bar-nadaštan/<br>何かや誰かをじっと見<br>つめる |  | būdan/錬金術の目を持つ<br>(一目でよいものと悪<br>いものを区別する能力<br>を持つ)<br>・目を浮かぶ→به چشم کسی<br>خوردن/be češm-e kasī<br>خوردan/目に当たる(目に<br>とまる)<br>・目を配る→دو تا چشم<br>داشتن دو تایی دیگر هم قرض<br>گرفتن/ do tā češm daštan do<br>tāye dīgar ham qarz<br>kardan/二つの目を持つ<br>て、別の二つ目も借りる | دراندن/češm-hāye xod rā<br>darandan/目を破れるほ<br>ど大きくする<br>・چشم کسی را پر کردن/<br>češm-e kasī rā por kardan/<br>人の目をいっぱいにする<br>・چشم کسی به چیزی بودن<br>/češm-e kasī be čīzī būdan/<br>何かに目がある(何かが<br>気に入り、ずっとそのも<br>のを欲しいという感じ) |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

これは、人間として、両言語の話者の身体的経験に共通点が見られるが、その経験を話者はどのように認識するか、それに対して、どのような想像や見方を持っているか、また、これらが身体的経験のみならず、文化や歴史などにも影響を受けていることがわかる。

第4章において、日本語の「手」とペルシア語の「دست/dast/手」の意味拡張及びその慣用句の分析を行った。方法として、「手」と「دست/dast/手」を「基本義」と「派生義」の2種類に分け、それぞれの例を提示しながら分析を行った。そして、両言語における、メタファー、そしてメトニミーによる日本語「手」とペルシア語の「دست/dast/手」の意味拡張について考察した。

## 両言語における「手」の意味拡張

両言語において、メタファー、そして、メトニミーによる「手」と「دست/dast/手」の意味拡張について精査した結果、次のことが明らかになった。

まず、両言語では「手」の形状性に注目され、それに基づく意味拡張が見られる。日本語の「手」の形状を拡張したものとして、「動物の手」「植物の葉」「器物」「自然現象」がある。ペルシア語でも、「手」から「動物の手」や「器物」への意味拡張があるが、「植物の葉」や「自然現象」への拡張は、ペルシア語においては存在しておらず、日本語特有の意味拡張であると考えられる。そのため、日本語における「形状の類似性に基づいた意味拡張」はペルシア語より広いと言える。

そして、「手」の位置の類似性による拡張がある。両言語においては、「手」から「動

物の前肢」、及び「器物の手」への意味拡張が、「手」の位置の類似性に基づいて拡張されているものであり、日本語とペルシア語両方の類似点であると考えられる。

一方、「手」の「位置」から「方向」への意味拡張はペルシア語より日本語の方が多いことが分かる。ペルシア語の場合は、「手の位置」から「方向」へ拡張された語は「右手」「左手」「دست بالا/bālā dast/上手（上の方）」「دست پایین/pāīn dast/下手（下の方）」という語となる。しかし、日本語では「手」から「方向」への意味拡張はより多くの語を有しており、自然を対象とする「山手」、「海手」、「浜手」、「川手」などといった語も「手の位置」から「方向」へ拡張されることはペルシア語では認められないものであり、日本語特有のものであると思われる。

次に、手の機能の類似性によるメタファーの拡張は、日本語の場合は「動物の手」、「工具」、「植物の蔓草と新芽」などが含まれているのに対して、ペルシア語では「手」から「動物の手」に限定され、「工具」、「植物の蔓草と新芽」への拡張は存在しない。このように、日本語とペルシア語では意味拡張が異なり、この場合でも、ペルシア語に対して、日本語の方がより広い傾向を示している。

また、「手」から「人」への意味拡張は、日本語においては多く見られるに対し、ペルシア語では「手」から「人」への派生した語があまりない。更に、もう一つ、ペルシア語においてはまったく見られず、日本語のみに存在するものとして、「手」から「傷」への意味拡張があった。

一方、「手」から「袖」、「介入、干渉、影響、役割」という意味拡張はペルシア語だけにある例であり、この点でも両言語において意味拡張は異なりを見せた。

上述した意味拡張の語彙を見てみると、「手」を含む語の意味拡張は日本語の方がペルシア語より範囲が広いということが分かる。

## 両言語における「手」に関する慣用表現の意味考察の結果

次に、日本語の「手」に関する「慣用句」とそれと対照するペルシア語の「手」の慣用表現の意味拡張について討論を行った。方法としては、日本語の「手」の機能による派生された諸意味の主なタイプを「手で動作をする人・労力を表す用例」「手で所有・支配を表す用例」「手で手段・方法・策略を表す用例」「手で手数・手間を表す用例」「手で世話を表す用例」「手で腕前を表す用例」「手で能力を表す用例」「手で助力を表す用例」「手で暴力を表す用例」「手で窃盗を表す用例」「手ではじめる・手着を表す用例」「手で関係断絶を表す用例」に分類し、それと対照するペルシア語の例を提示しながら意味分析を行った。

その結果は、「目」の慣用表現と同様に、日本語では、「手」に関する慣用表現において、メトニミーによる意味拡張がほとんどであるのに対して、ペルシア語ではメトニミーによる意味拡張が少なく、「کنایه/kenāye/メタファー」、「استعاره/este‘āre/メタファー」による意味拡張した範囲が広いことが明らかになった。提示した日本語の例の場合は 14

の用例の中から 8 例はメトニミー、4 例はメタファー、2 例はメタファーとメトニミーの両方が関わっている表現であった。一方、ペルシア語の場合は、13 例の中から、7 例は「کنایه/kenaye/メタファー」、5 例は「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」、1 つは両方に関わる用例であり、両言語において、意味拡張は異なりをみせる。

また、第 4 章で、用いられた両言語の「手」を含む慣用句の用例を「類似する表現で、類似する意味を持つ」、「類似する表現で異なる意味を持つ」と、又、「異なる表現で、類似する意味を持つ」また、それぞれに含まれない「それぞれの独自の表現」に分類できる。第 4 章に使用されたそれぞれの例を下記の通りまとめる。

<表 9> 第 4 章に使用された「手」と「دست/dast/手」を含む慣用表現の対照

| 類似する表現で、類似する意味の例                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | 類似する表現で、異なる意味の例                                                                                       | 異なる表現で、類似する意味の例                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | それぞれの独自の表現の例                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>• 手を上げる→ دست روی dast rūye kasī/ کسی بلند کردن boland kardan/手を振り上げ、誰かを殴ろうとする</li> <li>• 手を組む/手を握る/手を結ぶ→ دست به دست هم دادن dast be dast-e ham dādan/お互いに手を繋ぐ</li> <li>• 手を引く→ دست کشیدن/ dast keshidan/手を引く</li> <li>• 手に落ちる→ دست به کسی افتادن be dast-e kasī oftādan/何かが誰かの手に入る（手に落ちる）</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 手を抜く→ دست کشیدن/ dast keshidan/手を抜く、手を引く（関係などを退く）</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 手が足りない→ یک دست yek dast sedā صدا نداشتن nadāstan/一つの手から音が出ない</li> <li>• 手を尽くす→ دست بالا کردن dast bālā kardan/手を上げる</li> <li>• 手を上げる→ دست پیدا کردن dast peydā kardan/手を見つける</li> <li>• 手に負えない→ از دست بودن az dast-e kasī sāxte būdan/（人の）手で作られる（物事をやる能力がある）</li> <li>• 手を借りる→ دست به دامن کسی شدن dast be dāman-e kasī šodan/人のスカートに手を付ける</li> <li>• 手を出す→ دست کسی کج بودن dast-e kasī kaj būdan/人の手が曲がっている（盗みをする人だ）</li> </ul> | <p>日本語：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 手に入れる</li> <li>• 手にする</li> </ul> <p>ペルシア語：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• از دست کسی در آوردن/az dast-e kasī dar āvardan/人の手から取り出す</li> <li>• دست گذاشتن روی چیزی/ dast gozāstan roye čizi/何かを占領する</li> <li>• دست کسی بودن/ dast-e kasī būdan/だれかに占領（所有）される</li> <li>• دست به دست گشتن/ dast be dast gaštan/手から手に渡る</li> <li>• روی دست کسی گذاشتن/ roye dast-e kasī gozāstan/人に手数を掛ける</li> </ul> |

|  |  |                                                                                                                                                              |  |
|--|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
|  |  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 手を付ける → دست گذاشتن/dast gozāštan/手を置く（物事に着手する）</li> <li>・ 手を切る → دست کشیدن/dast kešīdan/関係などを絶って、退く。手を引く</li> </ul> |  |
|--|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|

引き続き第5章では、日本語の「口」とペルシア語の「دهان/dahān/口」の意味とそれを含む慣用句の意味拡張について言及した。方法として、まず、「口」と「دهان/dahān/口」の意味を、「基本義」と「派生義」の2種類に分け、それぞれの例を提示しながら考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

### 両言語における「口」の意味拡張

両言語では、「口」の基本義はほとんど同義であり、「人間と動物の顔の下にある穴状の部位、発声器官と飲食物を取り入れる部分であり、唇、歯、舌などを備える器官」となっている。これについても、身体部位に基づく基本義から、メタファーやメトニミーへの意味拡張されていることが分かった。

「口」と「دهان/dahān/口」の意味拡張を考察してみると、両言語ではその「言語行為」と「摂食行為」という口の主な機能に注目され、隣接性によるメトニミーに基づいて「口」から「摂食行為」及び「言語行為」へ意味が拡張された語があり、これはとりわけ日本語において多く存在している。具体的に、日本語では「口」の意味が「話すこと」「声を出してものを言うこと」、ペルシア語では、「話し方・話す能力」に拡張されたものが見られる。

そして、日本語では「口」から「飲食すること」へ、ペルシア語では「口」から「飲食物を味わうものとしての口」への拡張が口のもう一つの機能である「摂食行為」による拡張となっている。

また、両言語では、「口」の形状の類似性にも注目され、メタファーに基づく身体部位である「口」から「通り抜けることができる空間・物を出し入れする所」、「食器や物の出し入れをする所」という意味へ拡張されたこともある。「瓶の～」「非常～」「دهانه دهانه/دهانه غار/dahān-aye qār/洞窟の口」はその例である。

日本語では、身体部位「口」からの意味拡張がペルシア語に比べて多い。つまり、日本語の「口」のいくつかの意味拡張がペルシア語には見当たらない。「物事の初め。最初：序の口」「種類の一つ：飲める口」「入っておさまる所：就職口」は日本語特有のもので、ペルシア語ではそのような意味の語が存在しない。

一方、「口」から「気鳴楽器、歌、歌声の助数詞」という意味拡張はペルシア語の「口」の特有の意味拡張である。

上記の点から見ると、両言語の「口」の意味拡張では類似点があるが、「口」を含む語の拡張された範囲は、ペルシア語は日本語より狭いと考えられる。

### 両言語における「口」に関する慣用表現の意味考察の結果

次に、日本語の「口」に関する「慣用句」とそれと対応するペルシア語の「口」の慣用表現の意味拡張について考察を行った。方法としては、日本語の「口」の慣用表現をその典型的機能に基づき、「摂食行為」を表すもの、「言語行為」を表すものその他のこの二つに含まれないものに分類した。そして、この二つに含まれない「その他」のものに分類した。メタファーやメトニミーによる意味拡張を精査し、それぞれの表現に対応するペルシア語の表現を提示し、意味の分析を行った。ここでは、まとめとして、分析結果を次のように整理する。

まず、「摂食行為」を表す日本語の「口」は、「人」や「味覚」に拡張するのに対して、ペルシア語においては、「味覚」のみを表していた。すなわち、ペルシア語では「口」から「人」へ拡張が存在しない。

そして、「言語行為」の場合、日本語では「口」が「話す能力/技術」、「話し方」、「話（の内容）」に拡張され、一方、ペルシア語では、「話す能力/技術」、「話し方」への意味拡張へと発生していた。つまり、ペルシア語では、「口を奢る」「口を出す」「口を揃える」などのような表現、すなわち、「口」から「話そのもの・発言」へと派生した表現がないことが明らかとなった。

また、「目」と「手」の慣用表現と同様に、日本語における「口」を含む慣用句では、メトニミーによる意味拡張が多くを占めるのに対し、ペルシア語では「کنایه/kenāye/メタファー」の方が多く見られた。提示した日本語の例の場合は 17 の用例中から 14 例はメトニミー、1 例はメタファー、2 例はメタファーとメトニミーの両方が関わっている表現であった。一方、ペルシア語の場合は、13 例中から、11 例は「کنایه/kenāye/メタファー」、2 例は「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」であった。

第 5 章で、用いられた両言語の「口」を含む慣用句の用例を「類似する表現で、類似する意味を持つ」、「類似する表現で異なる意味を持つ」、「異なる表現で、類似する意味を持つ」また、それぞれに含まれない「それぞれの独自の表現」に分類できる。第 5 章に使用されたそれぞれの例を下記の通りまとめる。

＜表 10＞ 第 4 章に使用された「口」と「دهان/dahān/口」を含む慣用表現の対照

| 類似する表現で、類似する意味の例                                                                                                                                                                                                                                                                              | 類似する表現で、異なる意味の例                                                                                                       | 異なる表現で、類似する意味の例                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | それぞれの独自の表現の例                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 口 が 悪 い → بد دهن /bad dahan būdan/口が悪い</li> <li>・ 口 が 堅 い → دهن کسی /dahān-e kasī qors būdan/口が堅い</li> <li>・ 口 を 閉 ざ す → دهن خود را /dahān-e xod rā bastan/口を閉ざす</li> <li>・ 開いた口が塞がらない → دهان کسی باز /dahān-e kasī bāz māndan/口が開いたままになる</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 口角泡を飛ばす → دهن کف کردن /dahān-e kasī kaf kardan/口が泡立つ（非常に怒る、いきおどる）</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 口 に す る → دهن زدن /dahān-e zadān/口に触れる（口に入れる/口にすする）</li> <li>・ 口 が 軽 い → دهن کسی لق /dahān-e kasī laq būdan/口が軽い（口が緩くて、ぐらぐらしている状態にある） / دهن کسی چفت و بست نداشتن /dahān-e kasī čeft-o bast nadaštan</li> <li>・ 口 が う ま い → چرب زبانی /čarb zabānī • دهان گرمی داشتن /dahān-e garmī daštan/口が暖かい（口がうまい）</li> <li>・ 口 に の ぼ る → دهن به دهن گشتن /dahān be dahan gaštan/口から口へ回る</li> <li>・ 口 を 閉 ざ す → دهن خود را بستن /dahān-e xod rā bastan • 口 を 閉 ざ す زیپ دهان خود را کشیدن /dahān-e xod rā kešīdan • 口 の チ ャ ッ ク を 閉 め る /دهن خود را باز نکردن /dahān-e xod rā</li> </ul> | <p>日本語：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 口を減らす</li> <li>・ 口にする（言う）</li> <li>・ 口が奢る</li> <li>・ 口を合わせる</li> <li>・ 口を出す</li> <li>・ 口を挟む</li> <li>・ 口を揃える</li> <li>・ 口を極める</li> <li>・ 口を濡らす</li> <li>・ 口に合う</li> <li>・ 口が肥える</li> <li>・ 口を糊する</li> </ul> <p>ペルシア語：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ دهن خود را شیرین کردن /dahān-e xod rā šīrīn kardan/口を甘くする（甘いものやお菓子を口にする）</li> <li>・ دهن کسی آب افتادن /dahān-e kasī āb oftādan/人の口から水が出る（美味しそうで、よだれが出る）</li> <li>・ از دهن افتادن /az dahan oftādan/口から落ちる（食物が冷えて、不味くなる）</li> <li>・ دهان باز کردن /dahān bāz kardan/口を開く（話し始める）</li> </ul> |

|  |  |                                                                                                                                                             |  |
|--|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
|  |  | bāz nakardan/口を開かない<br>・ 口が滑る→ از دهن کسی<br>پزیدن/az dahan-e kasī<br>parīdan/口から飛び出る<br>・ 口角泡を飛ばす→ دهن<br>خود را جر دادن/dahan-e xod<br>rā jer dādan/口を引裂く |  |
|--|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|

最後に、第6章では、日本語とペルシア語の「身」を含んだ慣用句の対比を行った。方法として、まず、日本語の「身」とそれに対応するペルシア語の身体語彙の意味を、「基本義」と「派生義」の2種類に分け、それぞれの例を提示しながら考察した。その結果として、次のことが明らかになった。

まず、日本語においては「身」が「全身」を指すに対して、ペルシア語では、「بدن/badan/身・体・肉体・身体」は「سر/sar/頭」を含んでいない。つまり、「頭」と「体」が区別されていることが分かった。

また、日本語の「身」は「体」、つまり、具体的な対象として捉える以外に、抽象的な対象としても捉えることができるのに対して、ペルシア語では、人間の体を指す「بدن/badan/身・体・肉体・身体」という言葉は日本語の「身」とは大きく違い、身体的、肉体的な意味のみを表し、抽象的な観点から捉えられない。一方ペルシア語では、「身」の肉体的な側面と抽象的な側面が区別され、それぞれが独立的に名づけられ、肉体的な側面を表す場合は「بدن/badan/身・体・肉体・身体」、そして、抽象的な側面を表す場合は「جان/jān/生命・命・魂」という言葉が使用される。両言語では基本義はほとんど同義であり、「人、又は動物の体・肉体」を表すが、派生義の場合では意味拡張がほとんど異なっていることが明らかとなった。

また、両言語では、機器や品物の本体部分と人間の体の類似性に注目され、「身」の形などから、メタファーによってそれに類似した「容器の本体」や「衣服の胴」への意味拡張されている。

そして、類似性に基づく意味拡張以外においては、両言語ともに「身」や「جان/jān/生命・命・魂」が、メトニミーに基づいて「自分・自身」へと意味拡張することが共通している。

日本語における身体語彙「身」から生じる意味拡張は、ペルシア語のよりも多い。その中で、メトニミーによる「身から地位・身分・分際へ」「身から立場へ」「身から身持ちへ」「身から誠心へ」「身から身振りへ」「身から金銭へ」「身から自称へ」「身から対称へ」のような意味拡張はペルシア語の「جان/jān/生命・命・魂」の表現では存在がなく、日本語特有の意味拡張であると言える。

一方、ペルシア語の「بدن/badan/身・体・肉体・身体」の場合、その意味拡張はわずかで

あり、基本義から「衣服の胴体を覆う部分」「身丈と容器、機械やものの本体の部分」のみに拡張する。「بدن/badan/身・体・肉体・身体」に比べて、「جان/jān/生命・命・魂」の意味拡張が多いが、その中でも「جان/jān/生命・命・魂から体格、体力、力へ」「جان/jān/生命・命・魂から親愛な気持ち、親愛な者へ」「جان/jān/生命・命・魂から愛情のこもった返事へ」「جان/jān/生命・命・魂から疑問符へ」の意味拡張はペルシア語特有であり、日本語ではこの「身」の意味拡張は見当たらない。

ここまでの日本語の「身」とペルシア語の「بدن/badan/身・体・肉体・身体」「جان/jān/生命・命・魂」の意味考察により、両言語では意味拡張は対応する場合が少ないことが分かった。

### 両言語における「身」に関する慣用表現の意味考察の結果

最後に、日本語の「身」を含む「慣用句」とそれに対応するペルシア語の慣用表現の意味拡張について考察を行った。方法としては、林（2002）に従い、日本語の「身」の用法を中心に、それに関する慣用句を「ところ」「身分・地位」「立場・境遇」「生活・生き方」「自分」を表すものに分類した。そして、「ところ」に関する表現を「感銘」「苦勞・努力」「真剣」「恋慕や高ぶる感情」へと下位分類し、メタファーやメトニミーによる意味拡張の考察を行い、それぞれの表現に対応するペルシア語の表現を提示し、意味の分析を行った。

その結果として、まず、日本語の「身」とペルシア語の「جان/jān/生命・命・魂」は「ところ」つまり、精神的な側面と結び付けられていることが分かった。具体的には、両言語の「身に沁みる」「身に沁みる」「身を粉にする」「身を砕く」「身が入る」「身を焦がす」「身を焼く」「تن کسی لرزیدن/tan-e kasī larzīdan/身が震える（あまりの心配で体が震える）」「جان از هفت لای کسی در آمدن/jān az haft lāye kasī dar āmandan/大変な苦勞をしたり、ひどく心を痛めたりする」「از جان خود مایه گذاشتن/az jān-e xod māye gozāštan/命を挙げるほど真剣にやる」「از جان و دل انجام دادن/az jān-o del anjām dadan/あるいは、با جان و دل انجام دادن/bā jān-o del anjām dādan/全身全霊でやる」などがその例である。

また、林（2002）が挙げている「身」に関する慣用表現の五つの分類の中では「身分・地位」や「立場・境遇」への意味拡張はペルシア語の「بدن/badan/身・体・肉体・身体」や「جان/jān/生命・命・魂」の慣用表現では見当たらない。つまり、「身」から「身分・地位」や「立場・境遇」への意味拡張は日本語の特有意味拡張である。多くの場合は「身分・地位」や「立場・境遇」を表す「身」を含む日本語の慣用句はペルシア語では「جان/jān」ではなく「自分自身/خود」あるいは、「自分自身の状況」という語と対応することが明らかにになった。

前章までの「目」「手」「口」を含む慣用句では、日本語の場合ではメトニミーによる意味拡張が多くを占めたのに対し、ペルシア語では「کنایه/kenāye/メタファー」の方が多く見られた。しかし、「身」を含む慣用句では、「メタファー」と「メトニミー」の使用が両言

語において見られる。提示した日本語の例の場合は7の用例の中から2例はメトニミー、4例はメタファー、1例はメタファーとメトニミーの両方が関わっている表現であった。一方、ペルシア語の場合は、7例の中から、4例は「کنایه/kenaye/隠喩」、3例は「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」であった。

第6章では、日本語の「身」とペルシア語の「بدن/badan/身・体・肉体・身体」「جان/jān/生命・命・魂」自体の異なる意味拡張の影響もあり、それぞれの語を含む慣用表現の意味拡張も異なりを見せている。そのため、前章と違い、「類似する表現で、類似する意味の例」「類似する表現で、異なる意味の例」が存在せず、「異なる表現で、類似する意味の例」と「それぞれの独自の表現の例」があった。第6章で使用されたそれぞれの例を下記の通りまとめる。

<表 11> 第4章に使用された「身」と「بدن/badan/身・体・肉体・身体」「جان/jān/生命・命・魂」を含む慣用表現の対照

| 異なる表現で、類似する意味の例                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | それぞれの独自の表現の例                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>・身を削る/身を粉にする/身を砕く→ جان از هفت لای /jān az haft lāye kasī dar āmandan/大変な苦勞をしたり、ひどく心を痛めたりする・جان سگ /jān-e sag kandan/非常に苦勞しながら生活する/非常に苦しみながら生きる・جان کُردی کنن /jān-e kordī kandan/非常に苦勞しながら尽力する・جان کسی به لیش /jān-e kasī be labaš āmadan/非常に苦勞しながら何かをやっていく</p> <p>・身が入る→ از جان خود مایه گذاشتن /az jān-e xod māye gozāštan/命を上げるほど真剣にやる・از جان و دل انجام دادن /az jān-o del anjām dadan/あるいは、با جان و دل انجام دادن /bā jān-o del anjām dādan/純粋にやる（心や命でやる）</p> <p>身を焦がす/身を焼く→ جان کسی بسته به جان کسی یا چیزی /jān-e kasī baste be jān-e kasī yā čīzī būdan/人の命が人や物にかかわる・جان کسی بودن و جان فلان کس /jān-e kasī būdan-o jān-e folan kas/命がその人の存在に関わるほど、人を可愛がる・جان کسی در رفتن /jān-e kasī dar raftan/死ぬほど人を恋したり、可愛がる</p> <p>・身を誤る/身を持ち崩す/身が持たない→ با جان خود بازی کردن /bā jān-e xod bāzī kardan/自分の生命を危険にさらす（自分の命と遊ぶ）</p> | <p>日本語：</p> <p>・身に沁みる・身を立てる・身を起こす・身を落とす/身を沈める・身になる・身に付ける・身に覚えがない・身に付く・身につまされる・身も世もない・身を捨てる・身に掛かる・身を売る・身を殺して仁を成す・身を沈める・身を任せる・身を以て・身を襄す・身から出た錆・身を抓む</p> <p>ペルシア語：</p> <p>・از جان گذاشتن /az jān gozāštan/一身を捧げる（命（自分）を犠牲にする）</p> <p>・با جان خود بازی کردن /bā jān-e xod bāzī kardan/自分の生命を危険にさらす（自分の命と遊ぶ）</p> |

以上、日本語とペルシア語において、「目」と「چشم/češm・čašm/目」、「口」と「دهان/dahān/口」、「手」と「دست/dast/手」、「身」と「بدن/badan/身・体・肉体・身体」「جان/jān/生命・命・魂」を含む慣用表現の分析結果を振り返った。

それぞれを含む語の拡張された範囲を比較した場合、日本語はペルシア語より広く、両言語において、意味拡張が一樣ではないと考えられる。多くの場合は日本語では派生する意味拡張がペルシア語では存在しない。例えば、「手」あるいは「口」から「人間」への派生した語、また、「手」から「自然現象」へ、「手」から「傷の程度」へのなどの派生した語が見当たらないことである。一方、ペルシア語でも、日本語に存在しない意味拡張があるが、日本語に比べて、少ない。

また、第3、4、5、6章において使用された日本語とペルシア語の「目」、「口」、「手」、「身」を含む用例のメタファーとメトニミーによる意味拡張を比較した場合、全103例中は、日本語は54例、ペルシア語は49例を占めていた。そして、メタファー/「کنایه/kenāye/メタファー」による意味拡張は日本語では12例、ペルシア語では33例であった。一方、メトニミー/「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」による意味拡張では、日本語の例は36例、ペルシア語は12例となり両言語では異なる意味拡張を示した。つまり、日本語では、メトニミーによる意味拡張が多くあるのに対して、ペルシア語では、کنایه/kenāye/メタファーによる意味拡張が多い。

また、メタファーとメトニミーの両方に関わる用例は日本語では6例、ペルシア語では1例であった。そして、ペルシア語特有のものである「اسناد مجازی/ esnād-e majāzī」による意味拡張が3例あった。

このような意味拡張の異なりは、日本語を第二言語として習得するペルシア語母語学習者には障害になる一つの原因であると思われる。とりわけ、母語に存在しない意味拡張はペルシア語を母国語とする話者及び日本語学習者にとっては大変習得しづらいものとなっているが、それは母語の特性が干渉している影響ではないかと考えられる。

我々は第二言語習得の際に、当然ながら、第一母語を基盤とし、それに影響を受ける。第二言語教育では、母語に影響を受けることが「母語からの転移 (transfer from L1)」と呼ばれる。母語の特性が良い方向へ働く場合は、その習得を促進させるので、「正の転移 (positive transfer)」と呼ばれているが、母語の特性が第二言語習得の悪い方向に働く場合は「負の転移 (negative transfer)」、若しくは「干渉 (interference)」と呼ばれ、習得を遅延させる一つの原因であると考えられている。

もう一つは文化や歴史の要因であると考えられる。上述のことから、人間として、両言語の話者の身体的経験には共通点が見られるが、その経験を話者はどのように認識するか、それに対して、どのような想像や見方を持っているか、身体的経験のみならず、文化や歴史などにも影響を受けることがわかる。日本語やペルシア語の慣用句は、いずれ

もその母語話者の日常生活の実践から発生したものである。実際に、慣用句は民族や国家が長い歴史を通じて築き上げてきたものであり、それぞれの固有の使用言語に写し出される。つまり、言語と文化が結び付けている。そこで、日本語の慣用句を学ぶとき慣用句の構成と形式、変化と使用以外に言葉と文化や社会の関係も深層から認識し、理解する必要があると考えられる。

## 7.2 今後の課題

本稿では、身体部位詞「目」「手」「口」「身」を含む日本語とペルシア語の「慣用表現」を研究対象とし、認知言語学の観点から、分析を行ってきた。それぞれの「語自体」の意味拡張も若干探求したものの、本稿の主たる探求対象ではないため、更なる究明が今後の課題となる。

上述の日本語とペルシア語の意味拡張の異なりは、ただ単に認知言語学の観点からの派生だけではなく、両言語において派生した意味の違いを比較すると、歴史の流れや社会環境、文化などの諸要因の影響を受けた話者の土台や見方などの影響もあると考えられる。だが、本稿では、この点について詳しく究明してない。しかしながら、このことをさらに、詳しく究明する必要があると思われ、これも今後の課題として検討していくべき、興味深い問題であろう。

## 参考文献

### 日本語文献

- 尼ヶ崎彬（2008）『ことばと身体』勁草書房
- 有藺智美（2005）「身体部位（「手」、「口」）を含む慣用表現の意味分類」『日本語認知言語学会論文集』第5巻、pp.487-497 日本認知言語学会
- 有藺智美（2006）「分解可能な慣用表現における身体部位詞の意味拡張」『日本語認知言語学会論文集』第6巻、pp.1-11
- 有藺智美（2007）「身体部位詞を構成要素に持つ—日本語慣用表現の統合的凍結性—」『言葉と文化』第8号 pp.139-156 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻
- 有藺智美（2008）「「顔」の意味拡張に対する認知的考察」『言葉と文化』第9号、pp.287-301 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻
- 有藺智美（2013）「行為のフレームに基づく「目」、「耳」、「鼻」の意味拡張—知覚行為から高次認識行為へ—」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第25巻、第1号、pp.123-141
- 英和対照（2009—2011）『天声人語』原書房
- 池上義彦・河上誓作（訳）（1993）『認知意味論』紀伊國屋書店（原典：George Lakoff 1987 WOMEN, FIRE, AND DANGEROUS THINGS The University of Chicago）
- 市川浩（1992）『精神としての身体』講談社
- 伊藤菊子・小沢厚子他（1981）『慣用句の調査—身体語彙（頭部）を構成要素とした慣用句—』国立国語研究所補助員研修慣用句班
- 井上次夫（1999）「身体部位を含む慣用表現にみる格関係」『奈良教育大学国文：研究と教育 / 奈良教育大学国文学会』第22号、pp.84-76
- 梅棹忠夫（監修）（1995）『日本語大辞典 第二版』講談社
- 大石 亨（2008）「感情のメタファーの日英差をもたらす要因についての考」『日本語認知言語学会論文集』第8巻、pp.274-284
- 大堀壽夫（2002）『認知言語学』東京大学出版会
- 小笠信之（1992）『分野別・日本語慣用句表現』専門教育出版
- 沖本正憲（2009）「身体部位詞の比喩的意味拡張と顔の認識 Extended meanings of body-part nouns and face recognition」『苫小牧工業高等専門学校紀要』第44号、pp.64-79
- 奥雅博（1990）「日本文解析における述語相当の慣用的表現の扱い」『情報処理学会論文誌』Vol.31.No.12
- 言語社会編（1979）「慣用句の文法的な特徴」『言語の研究』むぎ書房
- 梶茂樹・中島由美・林徹（2009）『辞典 世界のことば141』大修館書店
- 上条、由実、富所、諒子（2004）「肩・胸・脇・背を含む慣用句と比喩」『信大日本語教育研

- 究』Vol.04、pp.28-32 信州大学人文学部日本語教育学研究室  
 北原保雄（編）（2003）『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店
- キロワ、スベトラ（2003）「第二部 14 か国語の慣用句の比較調査(慣用句の分類とその応用)」  
 『宇都宮大学国際学部研究論集』第 16 号、pp.91-104
- 楠見 孝・米田英嗣（2007）「感情と言語」 藤田和生(編) 『感情科学の展望』 pp.55-84  
 京都大学学術出版会
- 小池清治、スベトラ＝キロワ（2003）「慣用句の分類とその応用」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 16 号、pp.89-104
- 坂本勉（1982）「慣用句と比喩：慣用化の度合の観点から」『言語学研究』巻 1 京都大学言語学研究会
- 坂原茂（2000）『認知言語学の発展』有限会社 ひつじ書房
- 佐藤信夫（2002）『レトリック感覚』講談社
- シナリオ作家協会・監修（2012）『「キツツキと雨」「アフロ田中」』通巻 764、第 68 巻、3 号、シナリオ作家協会
- シナリオ マガジン（2012）『ドラマ 相棒（season 10）シナリオ特集/AKB ラジオドラマ 劇場特集』通巻 392 号、34 巻、2 号、映人社
- 庄司明子（2010）『日英語イディオムの認知的研究』（博士学位論文）
- 新村出（編）（2008）『広辞苑 第六版』岩波書店
- 菅野盾樹（1985）『メタファーの記号論』株式会社 勁草書房
- 鈴木孝夫（1985）『日本語の語彙と表現』大修館書店
- 瀬田幸人（2009）「メタファーについて」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第 142 号、pp.49-59 岡山大学大学院教育学研究科
- 瀬戸賢一（1995）『メタファー思考 意味と認識のしくみ』講談社
- 瀬戸賢一（1997）『認識のレトリック』海鳴社
- 瀬戸賢一（2005）『よくわかる比喩』研究社
- 瀬戸賢一（2007）「メタファーと多義語の記述」『メタファー研究の最前線』ひつじ書房
- 瀬戸賢一（2003）『日本語のレトリック』岩波書店
- 千住淳、東條 吉邦、谷口 清、大六一志、長谷川寿一（2003）「自閉症児の視線検出機構の検討」『自閉性障害のある児童生徒の教育に関する研究』第 6 巻、pp.19-26
- 滝浦静雄（1978）『言語と身体』岩波書店
- 多門靖容（2006）『比喩表現論』風間書房
- 田中聡子（2001）「「目」の多義分析・フレームと比喩複合」『言葉と文化』第 2 号、61-78  
 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻
- 田中聡子（2003）「心としての身体—慣用表現から見た頭・腹・胸—」『言語文化論文集』第 24 号、pp.111 - 124 名古屋大学大学院・国際言語文化研究科

- 田中聰子（2002）「「口」の慣用表現 ―メタファーとメトニミーの相互作用」『言葉と文化』第3号、pp.5-20 名古屋大学大学院・国際言語文化研究科・日本言語文化専攻
- 谷口一美（2003）『認知意味論の展開―メタファーとメトニミー―』研究社
- 谷口一美（2006）『認知言語学』ひつじ書房
- 大辞泉編集部、監修：松村明（1995）『大辞泉 第一版』小学館
- 程 長善（cheng changshan）（1996）「日本語慣用句の語彙的な特徴に関する一考察」『経営研究』第9巻、第3号
- 辻幸夫（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社
- 辻幸夫（2003）『認知言語学への招待』第一巻 大修館書店
- 土屋智行（2009）「慣用表現の変形操作とその動機づけ―「目/手」を含む慣用表現の関係節化を例に―」『日本認知言語学学会論文集』第9巻、pp.415-424
- 中村明（2013）『比喩表現の世界』株式会社筑摩書房
- 仲本康一郎（2012）「メトニミー再考」『山梨大学教育人間科学部紀要』第13号、pp.302-320 山梨大学教育人間科学部
- 鍋島弘治朗（2004）「「理解」のメタファー ―認知言語学的分析―」『大阪大学言語文化学』Vol.13 pp.99-116 大阪大学言語文化学会
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2001）『日本国語大辞典 第二版』小学館
- 野内良三（2000）『レトリックと認識』日本放送出版協会
- 方小賛（Fang Xiaoyun）（2011）「日本語と中国語における「首」を含んだ慣用句の比較」『宇都宮大学国際学部研究論集』第3号、pp.137-150
- 方小賛（Fang Xiaoyun）（2011）「日本語と中国語における「鼻」を含んだ慣用句の比較 A Comparative Study of Idioms of Nose in Japanese and Chinese」『外国文学』第60号、pp.15-32 宇都宮大学外国文学研究会
- 日景敏夫（2009）『ことばの意味構造』現代図書
- 東野圭吾（2011）『麒麟の翼』講談社
- 深田智・仲本健一郎（2008）『概念化と意味の世界』株式会社研究社
- 星野命（1976）「身体語彙による表現」鈴木考夫（編）『日本語講座第4巻 日本語の語彙と表現』pp.153-181 大修館書店
- 松村明（2006）『大辞林第三版』三省堂
- 松本曜（2000）「日本語における身体部位詞から物体部分詞への比喩的拡張」、坂原茂（編）『認知言語学の発展』317-346 ひつじ書房
- 松本曜（2003）『認知意味論』第三巻 大修館書店
- 宮地裕（1982）『慣用句の意味と用法』明治書院
- 向田邦子（2009）『シナリオ集Ⅰ、あ・うん』岩波書店
- 向田邦子（2009）『シナリオ集Ⅱ、阿修羅のごとく』岩波書店

- 向田邦子（2009）『シナリオ集Ⅲ、幸福』岩波書店
- 向田邦子（2009）『シナリオ集Ⅳ、「冬の運動会」』岩波書店
- 向田邦子（2009）『シナリオ集Ⅴ、「寺内貫太郎一家」』岩波書店
- 向田邦子（2009）『シナリオ集Ⅵ、「一話完結傑作選」』岩波書店
- 村木新次郎（1985）「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』4巻1月号、pp15-27 明治書院
- Mei Lin（2011）「日本語母語話者の中国語の語彙習得に関する一考察—「母語からの移転」の観点から—」『流通科学大学論集』第23巻、第2号 pp.45-53
- 糸山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』研究社
- 糸山洋介・深田智（2003）「意味の拡張」『認知意味論—シリーズ認知言語学入門』第3巻 大修館書店
- 糸山洋介（2009）『日本語表現で学ぶ入門からの認知言語学』研究社
- 糸山洋介（2010）『認知言語学入門』株式会社 研究社
- 賈 惠京・吉田則夫（2006）「身体語を含む慣用句についての日韓対象研究—目の場合—」『岡山大学教育学部研究集録』第132号、pp.115-121 岡山大学教育学部
- 姫田慎也（2003）「身体表現に関する日英語比較研究 Comparative Studies of Japanese and English Expressions of Human Body」『龍谷大学際センター研究年報』第12号、pp.73-87 龍谷大学際センター
- 星野命（1976）「身体語彙による表現」『日本語講座第4巻 日本語の語彙と表現』大修館書店
- 山田洋次（（1991）『山田洋次シナリオ集（同時代ライブラリー76）「息子・家族」』岩波書店
- 山梨正明（1988）『比喩と理解』東京大学出版会
- 山梨正明（2004）『ことばの認知空間』株式会社 開拓社
- 山梨正明（2001）『認知言語学原理』くろしお出版
- 吉川寛（2007）「身体名称に関する慣用表現の類似性と相違性：日・英・韓の比較に見る」『国際英語学部紀要』第10号、pp.33-42 中京大学国際英語学科
- 吉村公宏（2004）『はじめての認知言語学』研究社
- 米川明彦、大谷伊都子（2005）『日本語慣用句辞典』東京堂出版
- レイコフ・G. & ジョンソン・M. 著（渡部昇一他訳）（1980）『レトリックと人生』大修館書店（原典：George Lakoff and Mark Johnson 1980 Metaphor We Live By The University of Chicago）
- 延鎮淑（2008）「韓国語身体語彙慣用句の研究（1）—韓国語教育・日韓比較文化論のため—」『信州大学人文社会科学研究』Vol. 02、pp.207-222 信州大学人文社会科学研究会
- 李東一（2006）「日本語教育における慣用句—外国人学習者の日本語教育をメドにして—」『別府大学国語国文学/ 別府大学国語国文学会』第48号、pp.41-59
- 林科成（2007）「認知言語学から見た「手」の多義性—メトニミー表現を中心に—」『対話

- と深化」の次世代女性リーダーの育成：「魅力ある大学院教育」イニシアティブ』  
pp.97-104 お茶の水女子大学「魅力ある大学院教育/平成 18 年度活動報告書：シンポジウム編
- 林八龍（2002）『日・韓両国語の慣用表現の対照研究—身体語彙慣用句を中心として—』明治書院
- レイモンド・W. & ギブズ・Jr. 著 小野滋他訳（2008）『比喩と認知』研究社（原典：Raymond W.Gibbs,JR 1994 *The Poetics of Mind:Figurative Thought,Language,and Understanding* Cambridge University Press）

## ペルシア語文献

- Āqā Hosseinī.,Hossein and Āqā zeinālī,Zahrā. 2007. *Moqāyeseye Ejmālīye sovare xīāl dar zabāne Fārsī va Engīlīsī.Pazhuhešhāye Adabe Erfānī*. No1.pp.49-78
- Alī nejād,Hossein. 1996. Kenāyāt rā behtar bešnāsīm.*Roshd,Aamūzeše Zabān va Adabe Fārsī* No.86.pp.30-31
- Amīd, Hassan .2010. Farhang-e Amīd. Rāhe Rošd Press
- Dehxodā, Alī Akbar. 1998. Loqat Nāmeye Dehxodā. Mo’ asseye Enteshārāt va Chāpe dāneshgāhe Tehrān Press
- Edrīsī ,Mohammad Hassan . 2000. Seirī Dar Majāze Morsal. *Majaleye Pazhūhešye Dānešgāhe Esfahān(Olūme Ensānī*. Vol.11.No.1,2. pp.45-60
- Ekrāmī, Mahmūd . 2005. Mardom šenāsyē Estelāhāte xodemānī. Mašhad,Ivār Press
- Fešārakī,Mohammad.2004. Degar Andišye Belāghī. *Majaleye Elmī Pazhūhešye Dāneškadeye Adabīāt va Olūme Ensānyē Dānešgāhe Esfahān*. Vol.2.No.38. pp.1-10
- Forūzandeh,Sīāvāš. 2013. Zabān va adabīāte Fārsī:Kenāye yekī az tasvīrhāye xīāl dar Fārsye rūzmare (1).*Hāfez*.No.103.pp.28-31
- Forūzandeh,Sīāvāsh. 2013. Zabān va adabīāte Fārsī:Kenaye yekī az tasvīrhāye xīāl dar Fārsye rūzmare (2).*Hāfez*.No.104.pp.53-56
- Forūzandeh,Sīāvāsh. 2013. Zabān va adabīāte Fārsī:Kenāye yekī az tasvīrhāye xīāl dar Fārsye rūzmare (3).*Hafez*.No.105.pp.42-45
- Mīrzānīā,Mansūr.1994. Soxan dar parde mīgūyam ( darbareye zherfā šenāsī kenāye dar adabe Fārsī).*Adabestāne farhang va honar*.No.53.pp.54-57
- Moīn Mohammad . 1971. Farhang-e Moīn: Amīr Kabīr Press
- Najafī,Abolhassan . 2000. Farhang-e Fārsye Amīāne : Nīlūfār Press
- Šamīsā,Sīrūs . 2003. Ma’ ānīo Bayān 1: Dānešgāhe Payāme Nūr Press
- Šamīsā,Sīrūs . 2003. Ma’ ānīo Bayān 2: Dānešgāhe Payāme Nūr Press
- Sojūdī,Farzān. 2003. Šarh va bāzbīnyē chand estelāhe elme bayān az manzare zabānšenāsī:este ‘āre,majāz,majāze morsal,kenāye. *Xīāl*.No.5 pp.54-77

- Tabībīān Seyyed Hamīd . 1993. Haqīqat va majāz. *Farhang (Vīzheye Adabīāt va Erfān)*  
NO.14 pp.89-111
- Taghī Vahīdīān, Kāmyār. 1996. Kenāye, naqāšye zabān. *Nāmeḥ Farhangestān*. No.8. pp.55-69
- Tajlīlī, Jalīl. 1988. ‘alāqehāye majāz va resāleheī az esāmoddīn. *Dāneškadeye Adabīāt va Olūme Ensānye Dānešgāhe Tehrān*. No.105-108. pp.52-61
- Yāsīnī, Hassan. 2002. Ta’ amolī dar majāz, este ‘āre va tašxīs. *Rošd āmūzeše zabān va adabe Fārsī*. No.62. pp.31-35

## 謝辞

本研究を遂行し、まとめるに当たり、多くのご支援とご指導を賜りました。この場を借りて、感謝の意を述べさせていただきたいと思います。本論文をまとえるにあたり、終始懇切丁寧なご指導、ご鞭撻を頂いた一橋大学言語社会研究科糟谷啓介教授に心から感謝の意を表します。糟谷先生は私の研究のために豊かな学問的な刺激と思慮深い御助言を与えてくださり、論文原稿を読み通し、多くの点において価値ある提言を提供してくださいました。また、博士論文の副査を引き受けていただきました東京外国語大学大学院総合国際学研究院、特定外国語主任教員、シーラーズ大学ペルシア語文学研究科、マルヤム・コハンサール教授に深く感謝申し上げます。また、研究方法に関して貴重なご意見を頂き、ご相談にも乗って頂きましたペルシア語を専攻する池田千明氏と小林歩氏は感謝を申し上げます。池田氏には博士論文の日本語のチェックも頂いただきました。また、本研究における資料として使用した朝日新聞の天声人語の意味分析につきまして多くの支援を賜り、ご協して頂きました小平日本語ボランティア会の皆様に心から感謝を申し上げます。また、研究を進めるにあたり、ご支援、ご協力を頂きながら、ここにお名前を起こすことができなかった多くの方々に深く感謝しております。

最後に、これまで、自分の思う道を進むことに対し、いつも暖かく見守り、心の支えになってくれた家族に対しては心から感謝の意を表して謝辞と致します。

ファルザネ・モラデイ

2014年6月1日